

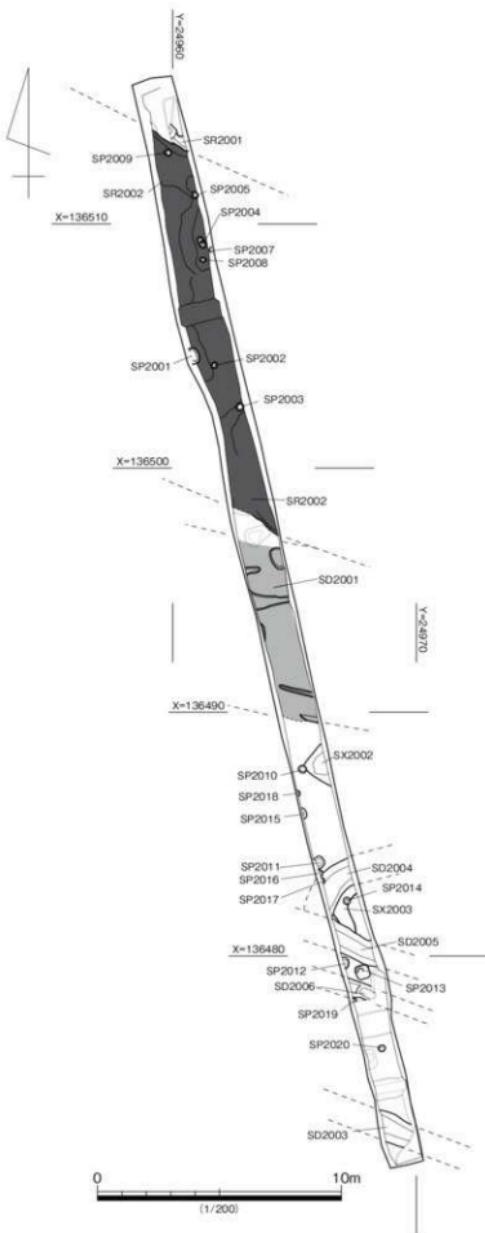
66図 2区②全体図

第3節 2区の調査

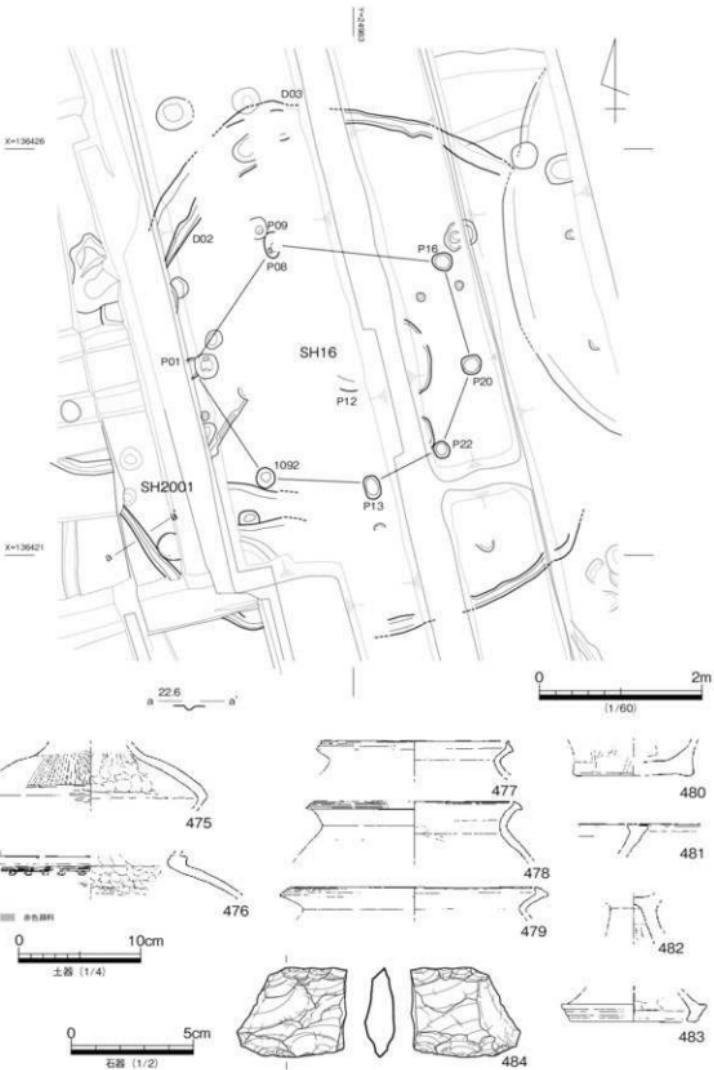
2区

外構工事に合わせ調査区と調査期間を設定した。そのため調査区名が細分化され煩雑になったことから、報告では北側を2区①、南側を2区②としてまとめ報告する。調査時と報告時の調査区対応関係については4図表2を参照していただきたい。また2区②では外構工事の掘削深度の関係から保護層を確保できることが判明したため、遺構の検出にとどめ、周囲の完掘後遺構上面に盛土を行い遺構面の保護を行っている範囲がある。66図に示した範囲が盛土によって保護を実施した範囲に該当する。

微地形は2区①と2区②の基盤層IV層の黄色シルト層は比較高差が約1.0mあり、南と北での基盤層の落差が著しい。基盤層V層のレキ層は標高21.5m以下で確認でき、流路(SR2002)底面は基盤層V層のレキ層が全面に露出している。21図の等高線図を見てもわかる通り、2区①の北半部分は微高地⑤が北へとわずかに張り出した箇所から斜面部へと変化する箇所を捉えているものと考えられる。



67図 2区①全体図



68図 2区②SH2001 平断面図・出土遺物実測図

a. 弥生時代から古墳時代前期

1) 穫穴建物

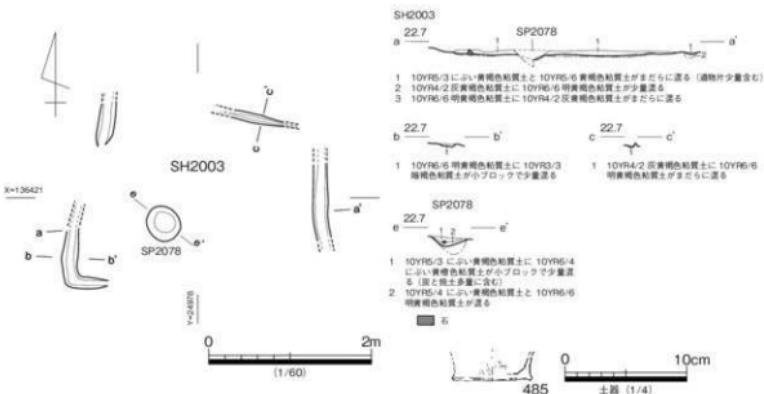
SH2001 (68 図)

遺構 2 区②東側で検出した竪穴建物である。主柱穴 7 基、中央土坑を有する。主柱穴は多角形に配置され、主柱穴南側 5 基の柱間は 1.2m ほどであるが、北側は 1.8m ~ 2.1m と間隔が広く北側に施設の存在が想定できよう。また壁溝が 3.0m ~ 3.5m の直線の溝が連続することから、平面プラン多角形の竪穴建物と考えられる。規模は最大 6.6m ほどの大きさである。

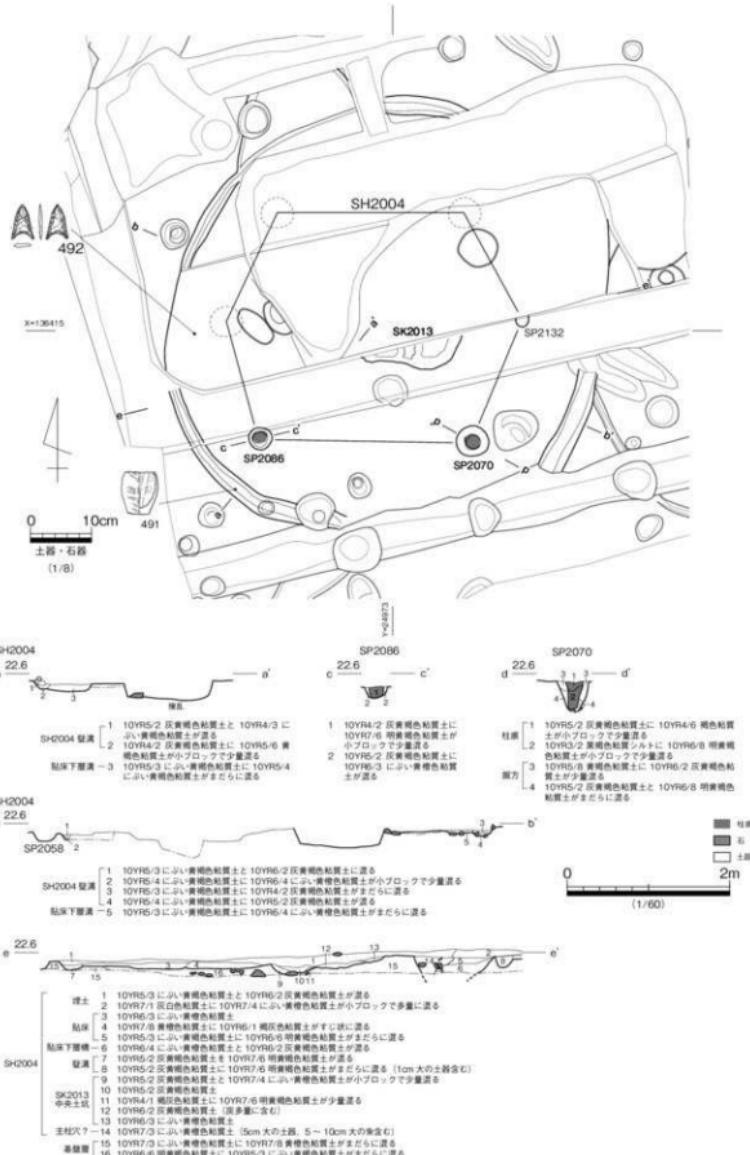
遺構の重複関係は SH2010・SH2001 (SH16) → SH2006 である。SH2001 と SH2006 は「旧練兵場遺跡 I」報告の SH16 と報告されていた建物の西側部分にあたる。遺構の重複関係から P09 は P08 より新しく、柱穴の重複は同一建物の建て替えと報告されていた。本次調査で検出した SH2001 と SH2006 の重複関係から判断して、P08・P09 と P01・P04 の重複関係は同一建物 (SH16) の建替えによるものではなく、異なる竪穴建物 (SH2001 と SH2006) の重複関係として理解でき、P08・P01 は SH2001 の主柱穴、P09・P04 は SH2006 の主柱穴と改め報告する。

土器 出土遺物は、壺 (475・476)、甕 (477 ~ 479)、底部 (480)、高杯 (481 ~ 483)、サスカイト製品 (484) がある。475 の壺は、胴部の中位で屈曲する算盤玉を呈し、中位よりやや上に横方向の沈線を施す。吉備からの搬入品とみられる。476 の壺は、頸部に突帯を張り付け、突帯よりやや下がった位置に二段の竹管文を施す。下段の竹管文はほとんど磨滅しており、わずかに一つ確認できるだけである。また、文様内に赤色顔料が認められる。竹管文や胎土に石英が目立つ点など搬入品の可能性が高い。477 ~ 479 の甕は、口縁端部をわずかに拡張させるが、凹線は明瞭でない。481 の高杯は、端部を外外面にわずかに突出させる。483 の高杯は下方に拡張した脚端部を作り出し、端部上端は水平方向につまみ出され、端面には凹線が施される。備後からの搬入品とみられる。484 はサスカイト製の石器である。

時期 477 ~ 479 の特徴から後期前半新相に廃絶したものと考えられる。



68 図 2 区② SH2003 平断面図・出土遺物実測図



70 図 2 区② SH2004 平断面図

SH2003 (69図)

遺構 2区②中央やや南で検出した平面プラン長方形の堅穴建物である。規模は南北2m、東西3mと小型である。壁溝と焼土が混じる中央ピット(SP2078)を検出したことから、堅穴建物と判断した。主柱穴の有無を確認するため、貼床上面および貼床掘削後に幾度かの精査を行ったが、主柱穴と考えられる柱穴は検出できなかった。

土器 出土遺物は、貼床から出土した甕(485)一点だけである。485の甕底部は、内面はヘラ削りが施される。

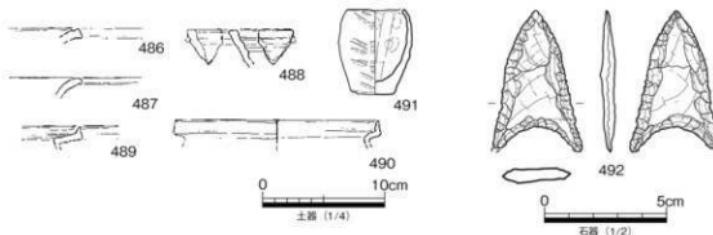
時期 廃絶時期を示す土器は出土していないが、貼床内から出土した485の甕底部片から築造時期を少なくとも弥生時代中期後半には築造されたものとしておきたい。また遺跡内の平面プラン小型長方形で無主柱穴の堅穴建物は中期後半から後期前半までの時期幅に現状では限られている。

SH2004 (70図・71図)

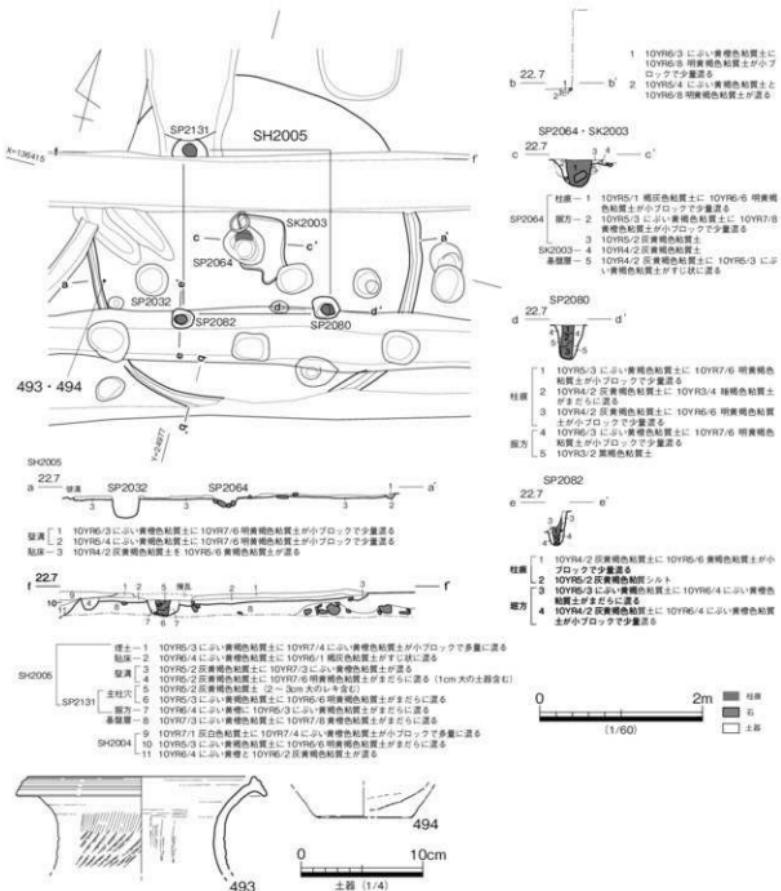
遺構 2区②南西で検出した平面プラン円形の堅穴建物で、北に張出が付属する。直径約5.5m、張出は東西1.6m、南北70cmほどの半円形である。中央三分の一は保護層が確保できることから、検出にとどめ掘削は実施していない。内部構造は中央に精円形の土坑(SK2013)を配し、主柱穴は三基(SP2086、SP2132、SP2070)を確認している。主柱穴はその配置状況から五角形もしくは六角形に配置されていたものと考えられる。遺構の重複関係はSB2001に先行し、SH2005より後出する。建物北側に付属する張出は建物内部の貼床より一段高く作り出されている。

土器 出土遺物は甕(486・487・489・490)、無頸壺(488)、ミニチュア壺(491)、石鎌(492)がある。489の甕は頭部から鋭く屈曲し口縁部に至り、上端部を上方に拡張させ凹線を施す。490の甕は、頭部から水平方向に口縁部がのび、端部は上方に屈曲させる。488の無頸壺は、口縁部外面に凹線が施される。凹線の最上段に孔が二ヶ所確認できる。491はミニチュアの壺である。タタキによって整形され、端部は少し内湾させている。492はサヌカイト製凹基式石鎌である。長軸5.8mと大型品である。

時期 中期後半に属する488・489は後述するSH2005の廃絶時期に近く、混入したものと考えられる。埋土から出土した甕(490)の特徴から後期前半新相に廃絶したものと考えられる。



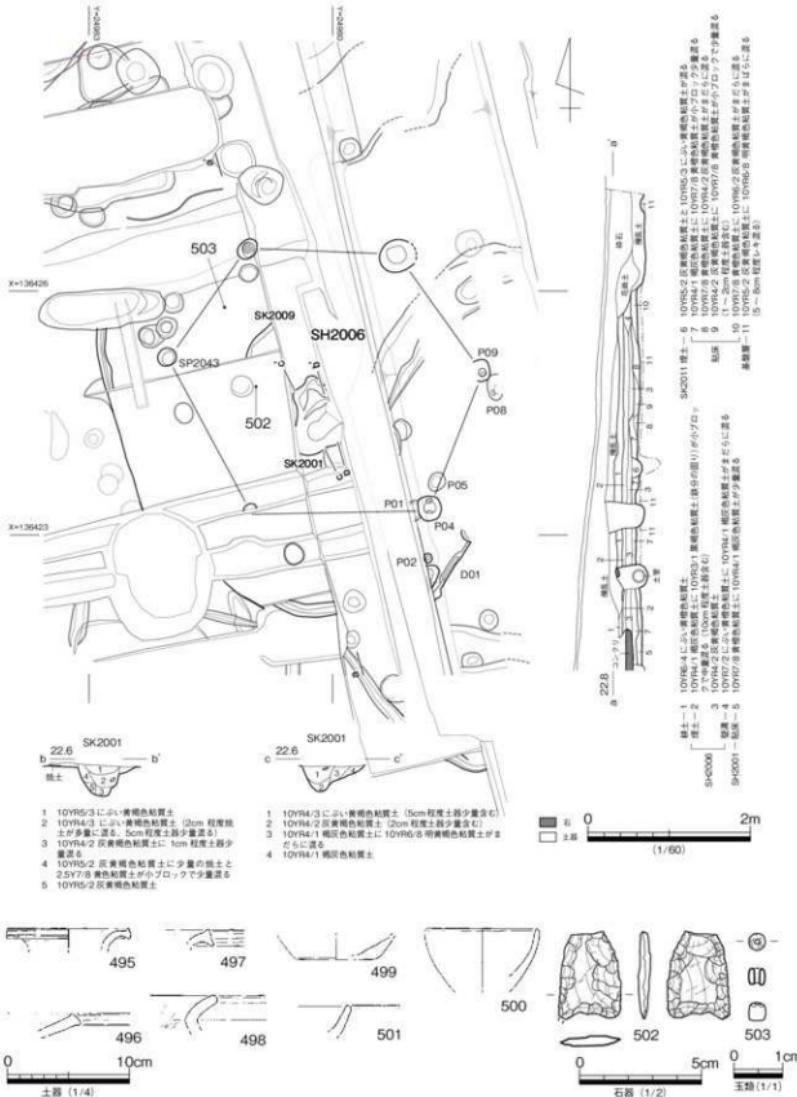
71図 2区②SH2004出土遺物実測図



72 図 2 区② SH2005 平断面図・出土遺物実測図

SH2005 (72 図)

遺構 2 区②南側中央で検出した平面プラン円形の竪穴建物である。北側三分の一は保護層が確保できることから、検出にとどめ掘削は実施していない。竪穴建物の埋土はほとんど削平され、検出時に貼床が露出しており、残存度は極めて低い。規模は直径 4.2 m を測り、主柱穴は三基 (SP2131・SP2080・SP2082) を検出した。柱間は西側 21 m、南側 18 m を測る。中央には 30 cm 四方の 5 cm ほどの低い落ち込み (SK2003) があり、中央土坑の可能性がある。貼床は厚さ 6 cm ほどで、基盤層 IV 層に由来する黄色シルトをベースにしている。平面的な重複関係は SH2004・SP2064 に先行し、SP2065 より後出す。



73 図 2 区② SH2006 平面図・出土遺物実測図

土器 出土遺物は、広口壺（493）、底部（494）がある。493の広口壺は、頸部中ほどに二段のハケ原体圧痕が施されている。口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部を上下に大きく拡張させ凹線を施す。494は壺の底部と考えられ、やや厚く造られている。

時期 貼床直上から出土した493の広口壺の特徴から中期後半新相の時期に廃絶したと考えておきたい。

SH2006 (73図)

遺構 2区②西側で検出した堅穴建物である。壁溝が残存する場所では2.5mほどの直線の溝であり、それぞれの壁溝が連続することから、平面プラン多角形の堅穴建物と考えられる。遺構の重複関係はSH2010及びSH2001、SB2005より後出す。

主柱穴 5基、中央土坑を有する。主柱穴の5基は南に先端をもつ五角形の配置をとり、北側の柱間は3.0mと北より広くとられている。貼床は15cm程度のものであるが、中央土坑から周囲80cmはやや薄く一段下がる。中央土坑は北側がやや浅く、南側が柱穴状に窪み焼土塊が混じる。

土器 出土遺物は、広口壺（495～497）、壺（498）、底部（499）、鉢（500）、高杯（501）、石鎌（502）、玉（503）がある。495の広口壺は、口縁部端部をやや上方に拡張させ、端部に凹線を施す。498の壺は、頸部の屈曲はゆるく、端部は丸くおさめる。500は小型の鉢である。501の高杯は、杯部は箱型を呈し端部断面は方形を呈する。502のサヌカイト製の凹基式石鎌は、刃頂部が欠損している。503はガラス製の小玉である。

時期 498の壺と500の鉢の特徴から、終末期古相に廃絶したものと考えられる。その他の遺物はやや古手の遺物群で、重複関係にあるSH2001（弥生後期前半新相）、SH2010（弥生中期後半新相）に位置づけられることから混入と判断される。

SH2007 (74～76図)

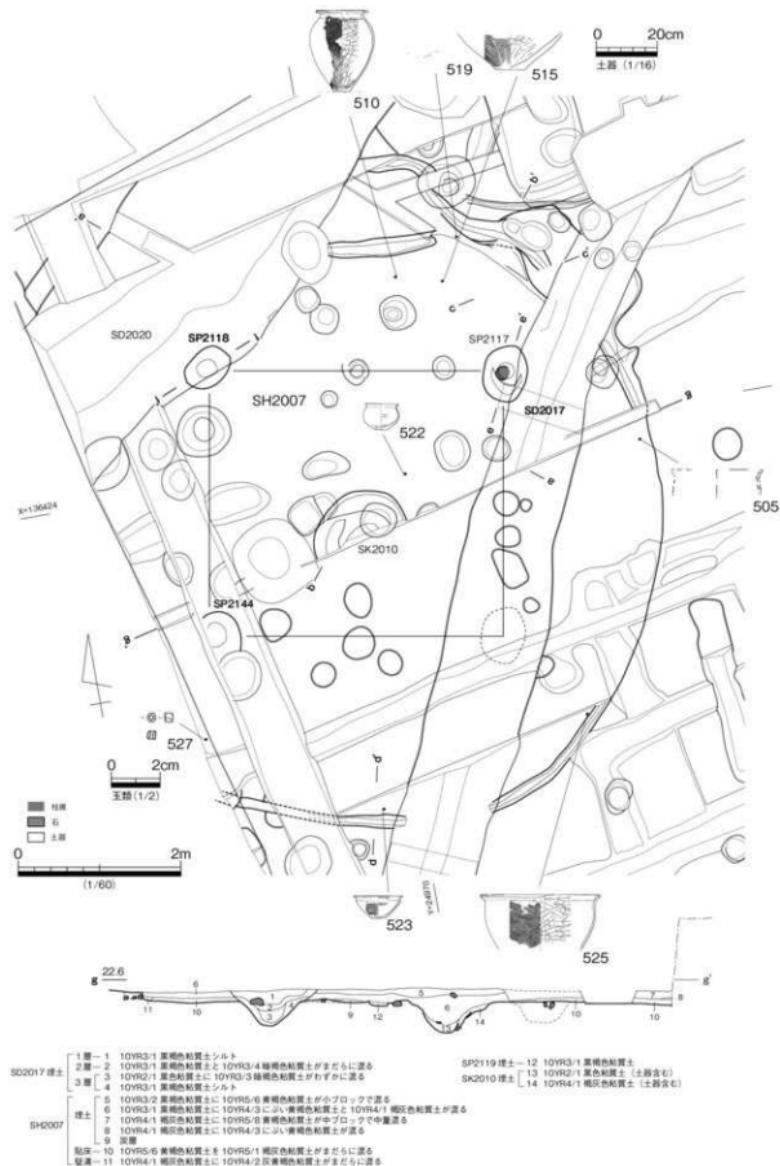
遺構 2区②北西側で検出した平面プラン円形の建て合建物である。規模は直径7mほど、張出が北東方向に2箇所とりつく。南側三分の一程度は、保護層が確保できることから検出にとどめている。

中央に直径1.2m深さ40cmの円錐形の中央土坑（SK1010）を配し、主柱穴を3基（SP2118、SP2117、SP2144）確認している。柱穴の配置から四基の主柱穴の配置が考えられる。主柱穴はいずれも直径70cmほどの長楕円形を呈し、深さは80cm、柱痕は20cmほど、柱間は北側3.7m、東側3.2mを測る。

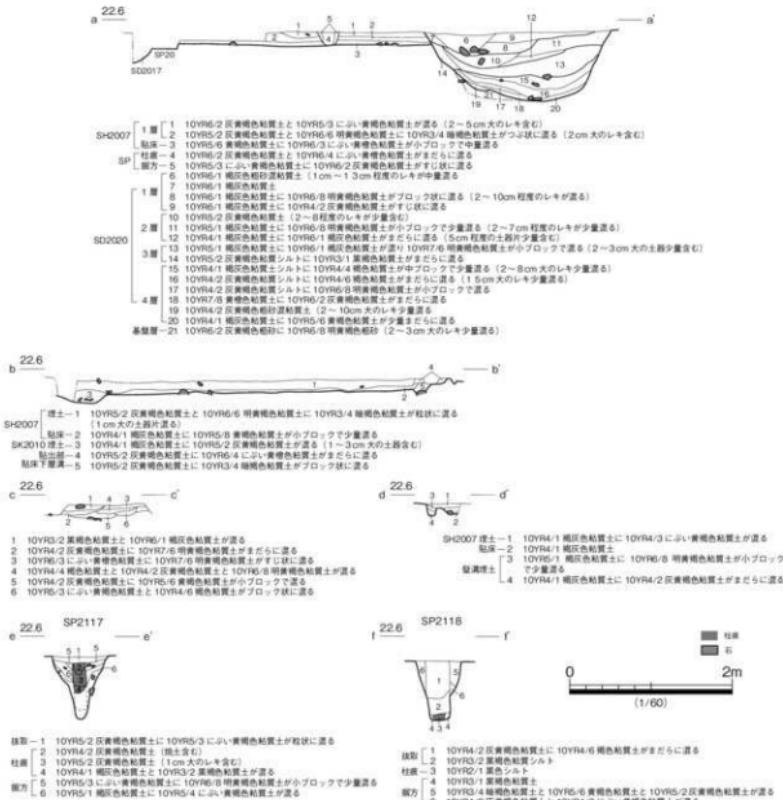
堅穴建物の埋土自体は黒褐色系の粘質土で占められていたが、張出部分の埋土は基盤層由来の黄色シルトを埋戻に用いており、場所によって埋土が極端に異なる。床面直上特に、堅穴建物縁辺部に完形の土器が目立つ。

遺構の重複関係はSD2017およびSD2020に先行し、SH2008より後出す。

土器 出土遺物は、壺（504・508）、壺（505～507・509～511）、底部（512～515）、器台（516）、高杯（517・518）、鉢（519～526）、玉（527）がある。鉢のほとんどは貼床直上から出土した完形品がほとんどである。504の壺は、頸部からゆるく口縁部まで至り、端部を上下に拡張する。508の壺は、ほぼ水平方向にのび、口縁端部を上下に拡張させる。また、強い横ナデによって、下面にゆるい凹凸がある。505～507、509～511の壺は、口縁部が分かるものは、凹線文が施されるが、その凹凸は浅い。



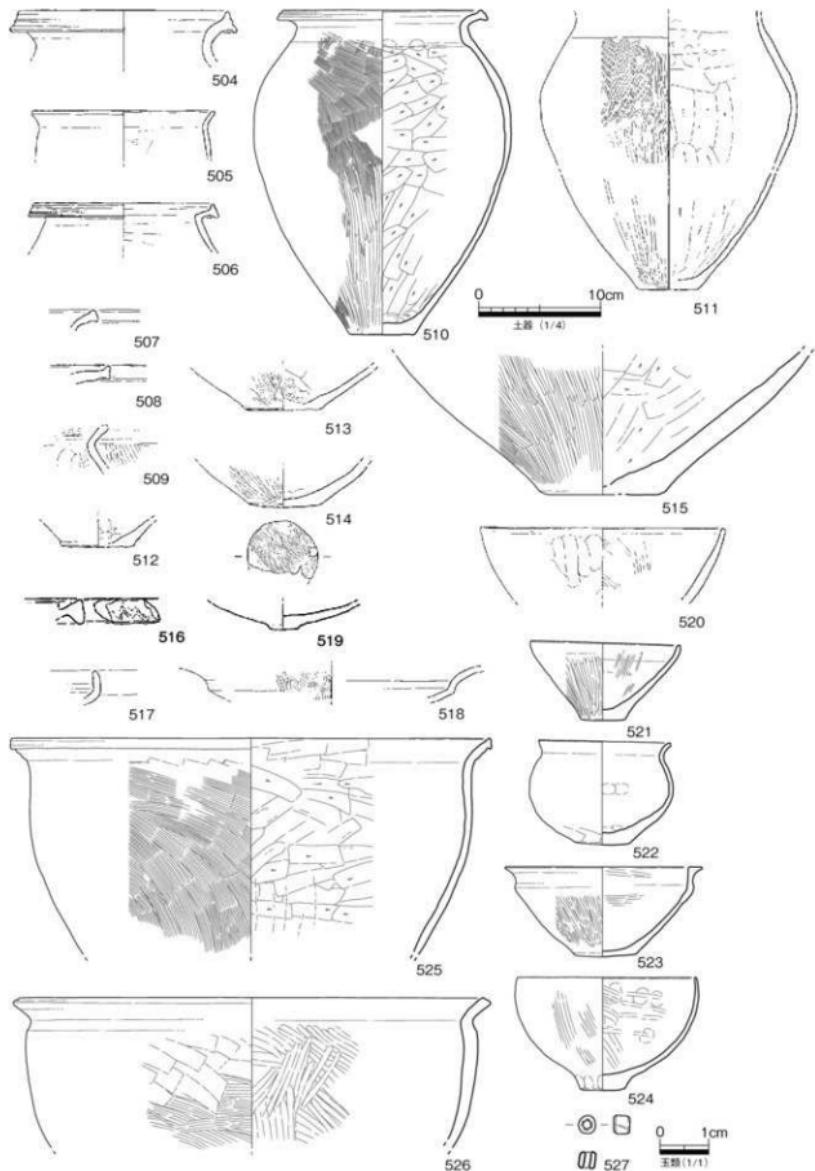
74 図 2区② SH2007 平断面図



75 図 2区② SH2007 断面図

509は外外面ともにハケ目が施され、頭部はゆるく屈曲しながら口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。510は全形が分かる資料である。内面は口縁部を除く全面にヘラケズリが施され、外はハケ調整の後、下半にヘラミガキが施される。頭部が胴部に対してやや厚く、頭部から少し立ち上がりややゆるく屈曲して口縁部に至る。511もほぼ同形同大の甕とみられる。515の底部は、大型の甕の底部とみられる。516は器台の口縁部とみられ、端面に波状文が施される。517・518は高杯の杯部である。517は口縁部を内湾させるタイプ、518は口縁部を外に強く広げるタイプである。519～524は小型、525・526は大型の鉢である。小型品は形状にバリエーションがある。522は豊前からの搬入品である『旧練兵場遺跡Ⅱ』SR02上層溝下層資料(3073)に同形のものがある。

時期 508・509の弥生時代後期後半から終末期の土器も極少量ある。層位は床面からは避離したことから、終末期までは窪地として残存した際の混入品とみられる。時期は貼床直上から出土した土器群の特徴から弥生時代後期前半古相に機能していたものと考えられる。



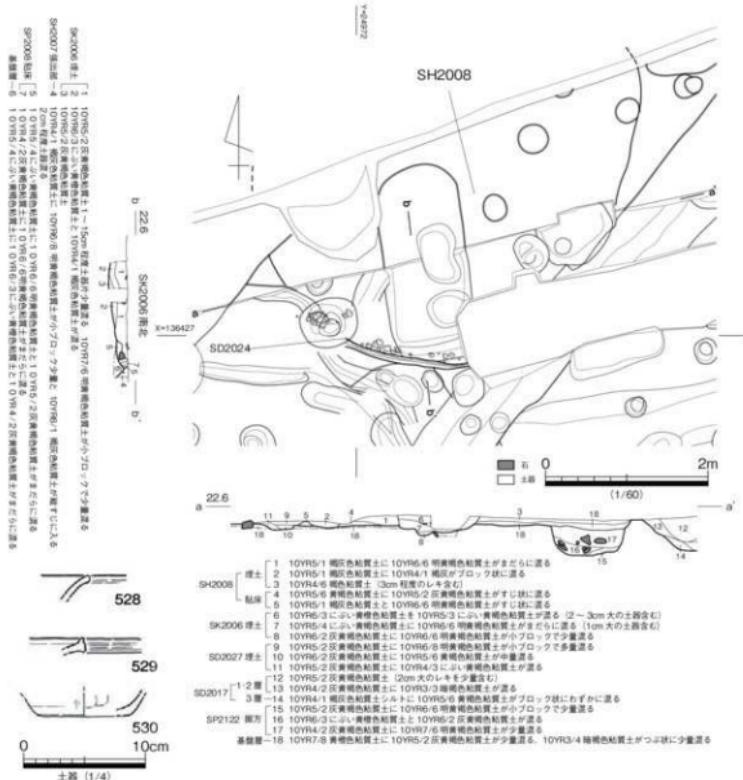
76図 2区②SH2007出土遺物実測図

SH2008 (77図)

遺構 2区②の北側で検出した竪穴建物である。遺構の重複関係はSK2006とSH2007に先行し、SH2003より後出する。平面プランは壁溝と検出ラインが円弧を描くことから円形を想定できるが、正円ではなく、南北に長い楕円形プランである。主柱穴は掘削範囲では検出できていない。

貼床掘削時に壁溝の円弧に沿う弧状の石列を検出した。石列は幅約20cm、長さ1.5mの範囲に5cm～10cm前後の小振りな石材を、やや粗く配置している。SH2008のベース面はほぼ基盤層Ⅳ層のシルトで占められることから、人為的に石材が配置されたことは間違いないだろう。弧状に配置されていることから壁溝と関連する遺構と考えられるものの、壁溝の裏込めとして考えるには脆弱であり、別の機能も想定しなければならない。

土器 出土遺物は小片がわずかに出土しているのみで、528～530はいずれも埋土から出土している。529の甕は、上下に拡張した口縁端部に凹線文が施され、器壁は薄い。530の底部も器壁は薄い。



77図 2区② SH2008 平断面図・出土遺物実測図

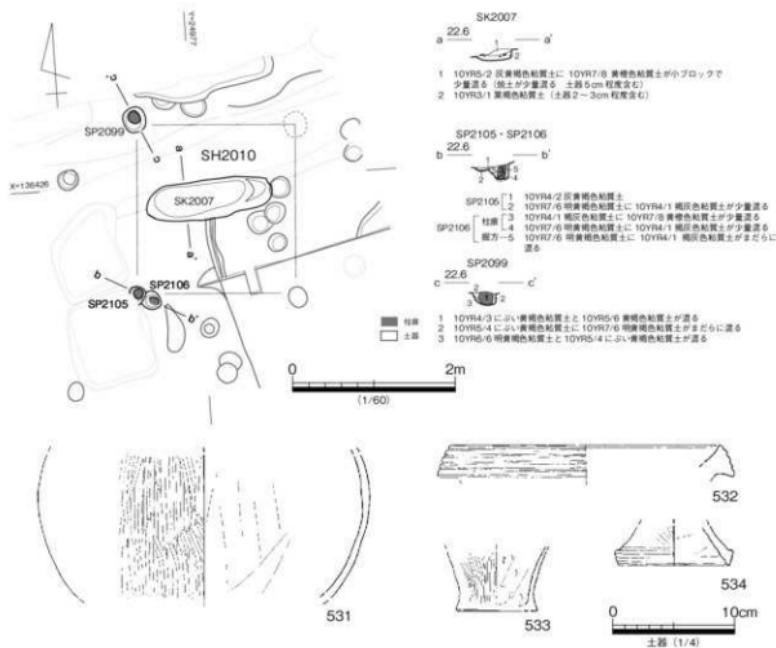
時期 529 と 530 の特徴から弥生時代中期後半新相には廃絶したものと考えられる。また、重複関係にある SB2003 が弥生時代中期後半古相に位置づけられることからも矛盾はない。

SH2010 (78 図)

2 区②東側で検出した堅穴建物である。埋土は全く確認できず、主柱穴 (SP2099・SP2105) と土坑 (SK2007) から堅穴建物と判断した。規模については、壁溝等がすべて削平されており明らかでない。

土器 出土遺物は、壺 (531・532)、甕 (533)、高杯 (534) がある。531 の壺は、胴部の傾きに違和感を残すものの、器壁は薄く外面に縱方向のヘラミガキが密に施される。532 の壺は、口縁部端部に 4 条の凹線文がある。533 の底部は、器壁は薄く外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施され、甕の底部とみられる。534 の高杯は、脚部端部を上方にやや拡張し、凹線文を施す。

時期 533 の底部や 532 の壺の特徴から、弥生時代中期後半新相には廃絶したものと考えられる。重複関係にある SH2006 が終末期に位置づけられることからも、矛盾はない。



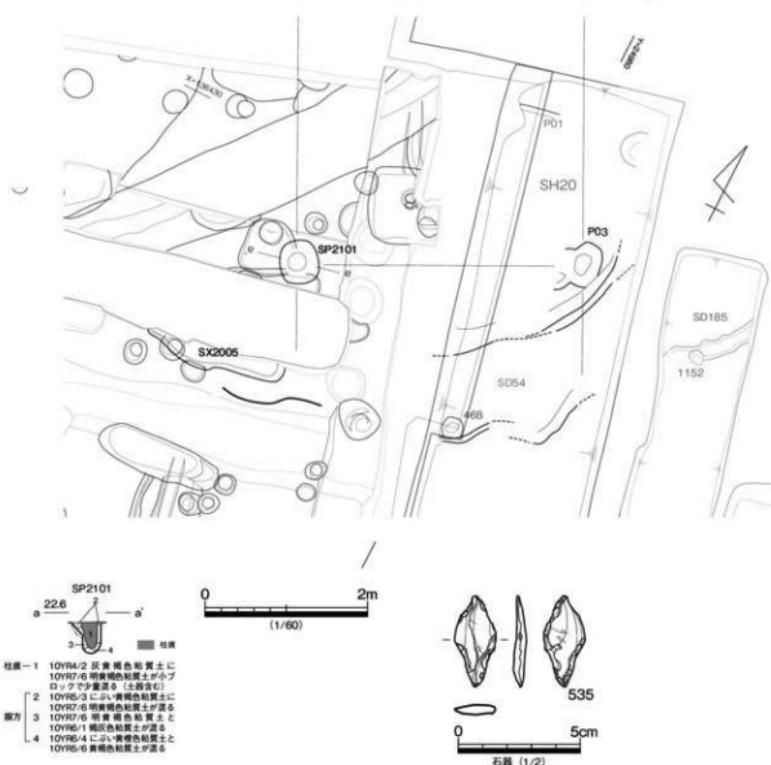
78 図 2 区② SH2010 平断面図・出土遺物実測図

SH2011 (79図)

遺構 2区②北東で検出した堅穴建物である。調査時には堅穴建物と認識していなかったが、「旧練兵場遺跡I」SH20との検討からSP2101とP03を主柱穴、SD54を壁溝と認識し、堅穴建物と判断した。2区②ではベース面が濁る範囲として認識し、またSX2005も無関係の遺構と判断して掘削していたが、この範囲がSD54の円弧の曲線状に沿うことからも、堅穴建物の貼床残存範囲として認識するのが妥当と考えられる。SD54とベース面の濁りのある範囲とした部分を基準にすると、直径7m前後の大きさに復元できる。

土器 出土遺物は石鏡(535)のみである。頁岩製の有茎式石鏡で、産地は愛媛県産と考えられる。

時期 本次調査では遺物から時期を特定できる遺物は出土していない。「旧練兵場遺跡I」報告の遺物をみると、弥生時代終末期新相から古墳時代前期前葉に位置づけられる。



79図 2区② SH2011 平断面図・出土遺物実測図

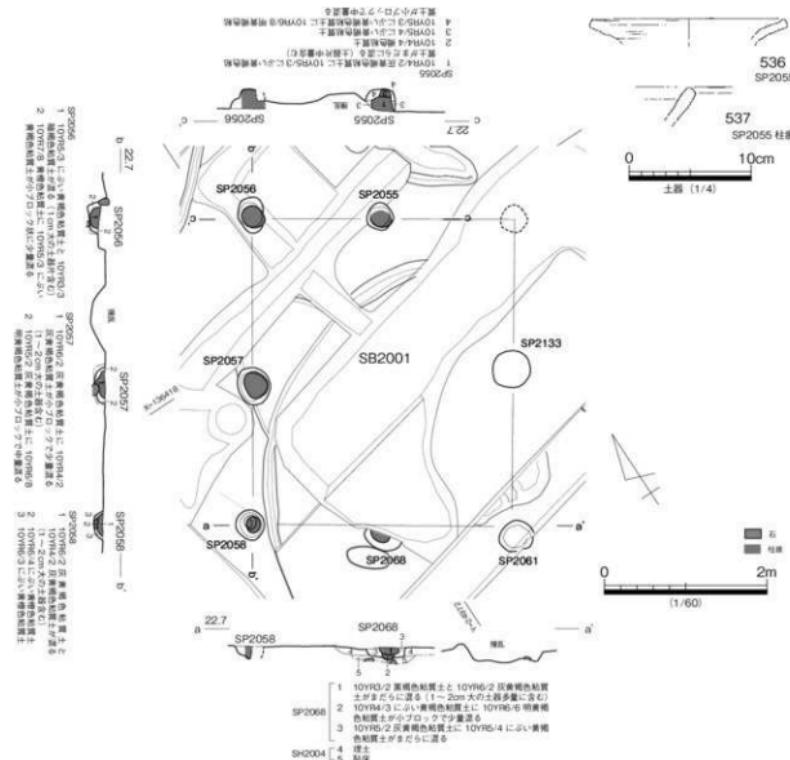
2) 挖立柱建物

SB2001 (80 図)

遺構 2 区②南で検出した梁間 2 間、桁行 2 間の掘立柱建物である。梁間 3.4m、桁行 3.8m を測り、建物の主軸は N34° E である。遺構の重複関係は SH2004 よりも後出する。梁間および桁行の各々の柱間は全く揃わない。盛土による保護層が確保できる部分と重なることから、SP2068 と SP2133 は検出にとどめ、SP2068 のみ擾乱によって露出した断面の観察を実施している。また北東隅の柱穴は、擾乱によって破壊されており残存しない。いずれの柱穴も柱材の抜き取りによって埋土が乱されており、一部は掘方の外側まで抜き取り穴が及んでいる。抜取穴からは土器細片が多量に出土している。柱穴の形状は円形から稍円形を呈し、直径 40cm 深さ 15cm 前後を測る。

土器 出土遺物は、広口壺(536)、鉢(537)がある。536 の広口壺は、口縁上端部をやや上につまみ上げ、口縁部はやや強いナデによって成形されている。

時期 廃絶時期は柱穴抜取から出土した 536 の口縁部の特徴から弥生時代後期後半でも新しい時期に相当すると考えられるが、詳細な時期比定は困難である。また築造時期については、SH2004 が後期



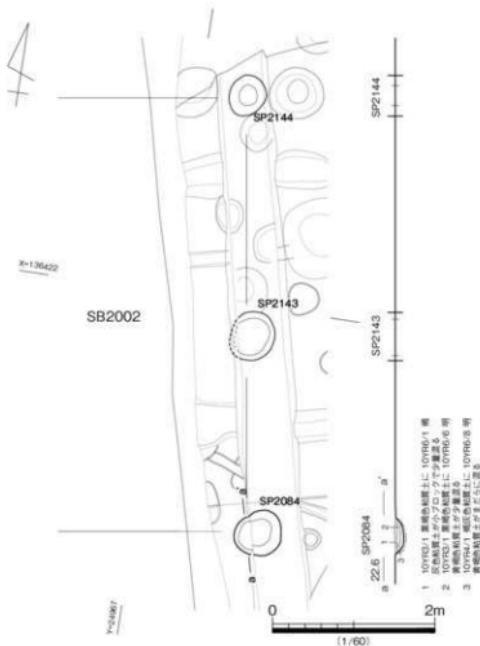
前半新相に位置づけられることから、遺構の重複関係からも齟齬はきたさない。また遺跡内では当該期の建物が1間×2間や1間×3間が多い中、建物の梁間と桁行が2間×2間の類例は少ない。

SB2002 (81図)

遺構 2区②西側で柱間二間分を検出した掘立柱建物である。規模は柱間2.4m等間で、柱穴は60cm程度の不整円形で、深さは20cmほどである。柱穴列の主軸はN 9° Eである。遺構の重複関係は、SH2007より新しい。柱穴列が位置した場所の大半は、立会形式で調査された場所であり、遺構の標高がおさえられなかった。そのため断面図では、SP2143とSP2144については、上場と下場の位置を表現している。

東と南に組み合う柱穴ではなく、西へ展開する建物と考えられる。検出した柱穴列が梁間、桁行であるかは判断できない。

時期 遺物は出土しているがいずれも弥生土器の細片で、時期は判断できないが条里型地割に規制されていないことから、上限は古代以前、下限はSH2007の主柱穴よりも後出することから、弥生時代後期前半以降である。詳細な時期や規模については、今後の調査を待ちたい。



81図 2区②SB2002 平断面図

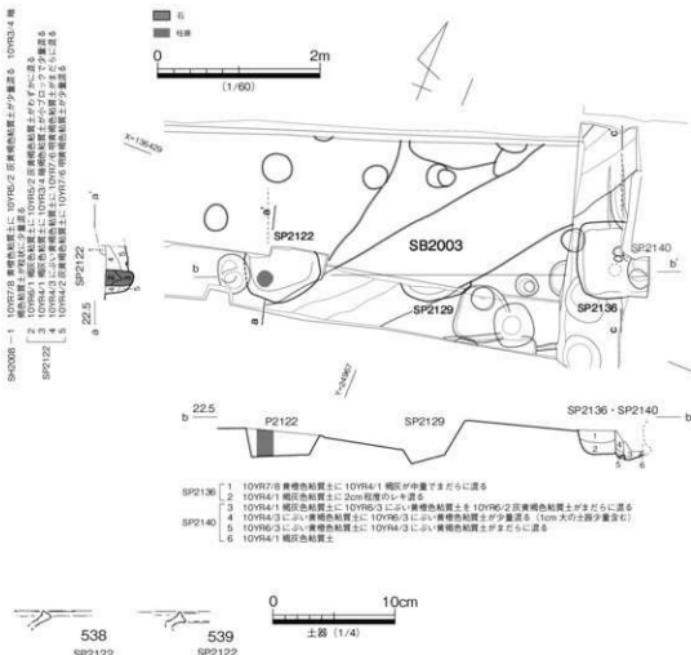
SB2003 (82図)

遺構 2区②北東で検出した掘立柱建物である。柱間は2.1m等間で、柱穴はすべて同サイズの一辺90cm程度の方形の掘方をもち、検出面からの深さは40cm、柱直径は20cm程度である。遺構の重複関係はSH2008・SD2017・SP2116・SP2114に先行する。

東と南にも組み合った柱穴がないことから北に展開する建物と考えられる。既往調査でも弥生時代の掘立柱建物で、梁間が2間になるものはほとんどないことから、SB2003は1間×2間の掘立柱建物となる可能性がある。

土器 遺物はいずれも細片で磨滅が著しい。538・539の甕は、口縁部を上下に拡張させ、端面には凹線文が施される。

時期 詳細な時期比定は困難であるが、柱痕から出土した539の甕の口縁部の特徴から中期後半でも古相とみられる。遺構の重複関係より後出するSH2008が弥生中期後半新相であることからも妥当と考えられる。以上の整理より弥生時代中期後半古相に廃絶したと考えられる。



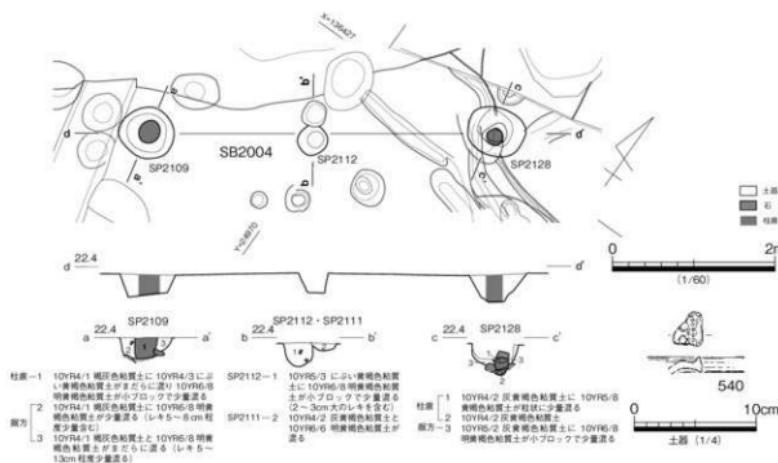
82図 2区② SB2003 平断面図・出土遺物実測図

SB2004 (83図)

遺構 2区②北西で検出した柱穴列である。柱穴 (SP2109・SP2112・SP2128) で、柱間は 2.1m 等間、南に組み合う柱穴がないことから、北に展開する建物と考えられる。遺構の重複関係は、SH2007 に先行し、SH2008 より後とする。

遺物 出土遺物は広口壺 (540) のみである。540 の広口壺は、端部外面には凹線文を施し、内面に円形浮文と円形の押し型文がある。

時期 柱痕から出土した遺物はわずかであるが、広口壺の特徴から弥生時代中期後半新相に廃絶したものと考えられる。遺構の重複関係にある SH2008 (弥生時代中期後半新相) より後とする。



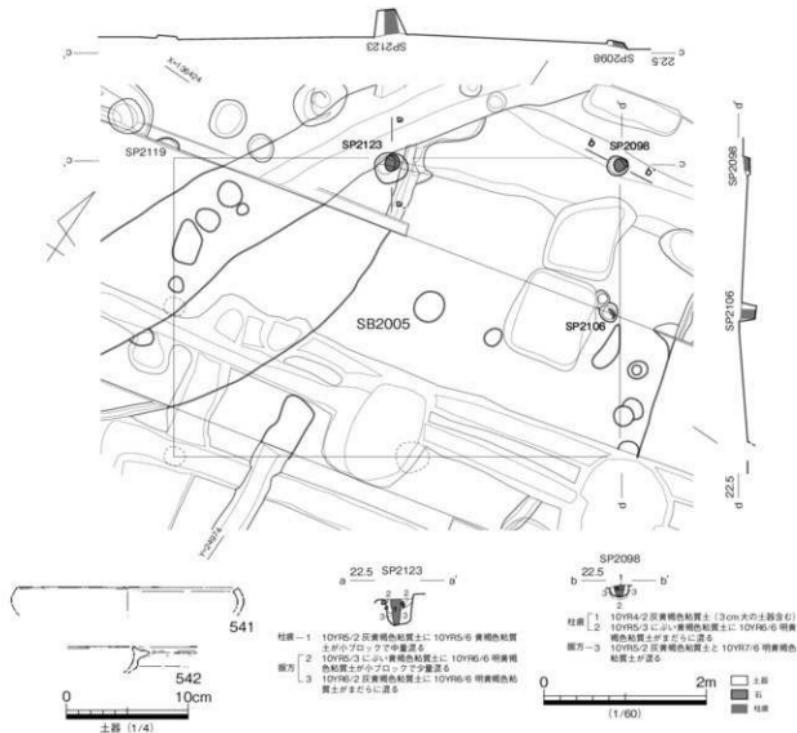
83図 2区② SB2004 平断面図・出土遺物実測図

SB2005 (84図)

遺構 2区②中央で検出した2間×2間の掘立柱建物である。梁間3.6mの一間1.8m、桁行5.5mの一間2.7mを測る。遺構の重複関係はSH2010とSH2007より古い。

遺物 出土遺物はごくわずかである。541・542の高杯は、541が口縁部を内湾させ端部は方形を呈する。542は端部外面を突出させ、外面に強いヨコナデを施す。

時期 柱痕から出土した541の高杯から弥生時代中期後半新相には廃絶したものと考えられる。

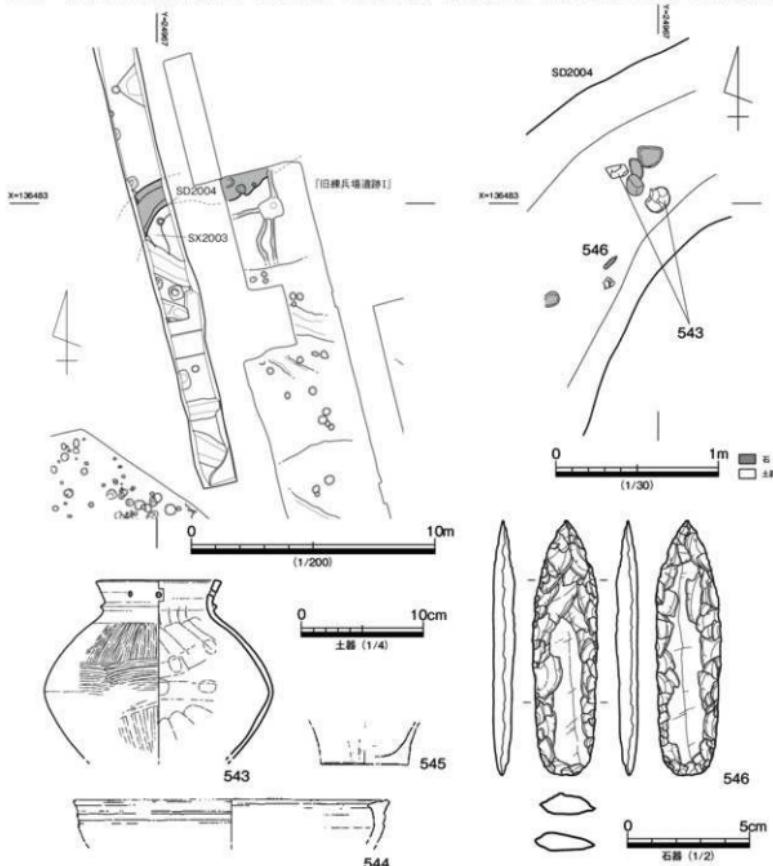


3) 溝

SD2004 (85図)

遺構 2区①の中央で検出した溝である。幅1.1m、深さ25cmを測り、平面形は弧状を呈する。遺構の重複関係はSX2003より後出し、SD2005に先行する。溝の埋土は上下2層に分けられる。下層は基盤層IV層に由来する黄色シルトがグレイ化した層である。上層は黒褐色系の粘質土に基盤層IV層に由来する黄色ブロックが混る。『旧練兵場遺跡I』では、遺構名はついていないが、遺構のラインが検出されており、溝の埋土を捉えているものと考えられる。また、SD2004を南へ延伸すると『旧練兵場遺跡I』で報告されている調査区にあたるが、検出されていないことから、2区①より西では、大きく南西へ反れるものと想定される。

土器 出土した遺物は、無頸壺(543)、高杯(544)、底部(545)、石剣(546)がある。543の無頸壺は、



85図 2区① SD2004 平断面図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

底部は欠損しているが、中位に胴部最大径をもち、やや丸みをもつ。頭部はななめ上方に短く延びる。また頭部に断面三角形の突帯を張り付け、その上位に2個一セットの孔が穿孔されている。544の高杯は、口縁端部下に凹線がみられる。545の底部は、器壁はやや薄い。546は石劍である。長さ10.5cm、幅2.7cm、厚み1.0cmを測る。刃部などやや磨耗しているようだ。

時期 埋没時期は543の胴部がやや丸みをもっている点、544の特徴から弥生時代中期後半新相に相当するとみられる。

4) 土坑

SK2004・SK2005 (86図・87図)

遺構 2区中央で検出した土坑2基である。SK2004の北側三分の一は保護層が確保できることから、検出に留め掘削は実施していない。

SK2004は南北に軸をとり、長さ2.3m・幅40cm・深さ20cmを測り、断面は逆台形を呈する。攪乱によつて土坑の中央部分が破壊されているが、土器は北側を中心に埋土中位～上位に比較的大きな破片が重なり出土した。また断面図や写真(写真図版14)をみてわかる通り、埋土下層には土器がほぼ含まれず、下層の上面に土器が集中していることがSK2004およびSK2005両者でみられた。下層と上層の土器の出土状況の違いはどういった要因であるのかはわからないが、下層埋土と上層の土器群を含む埋土に大きな違いは見られないことから、開削と埋戻しは一連の行為の中で行われ、その埋戻に際して土器群が廃棄された可能性があるだろう。

SK2005は長さ1.3m、幅70cm、深さ25cmを測り、断面は逆凸字形を呈する。攪乱によって遺構の中央部分が大きく破壊されている。残存した北側はほとんど土器はみられず、南側に土器が集中する。南側で集中していた土器は小片に割れているものが多く、ほとんど隙間なく重なり出土した。

両遺構とも平面形や断面形状は溝状を呈するが、底面のレベルはほぼ一定で流水の痕跡は全く確認できない。下層に黄色シルトが混じり、掘削直後に土器が投棄され、掘削土で埋戻されたものと考えられる。

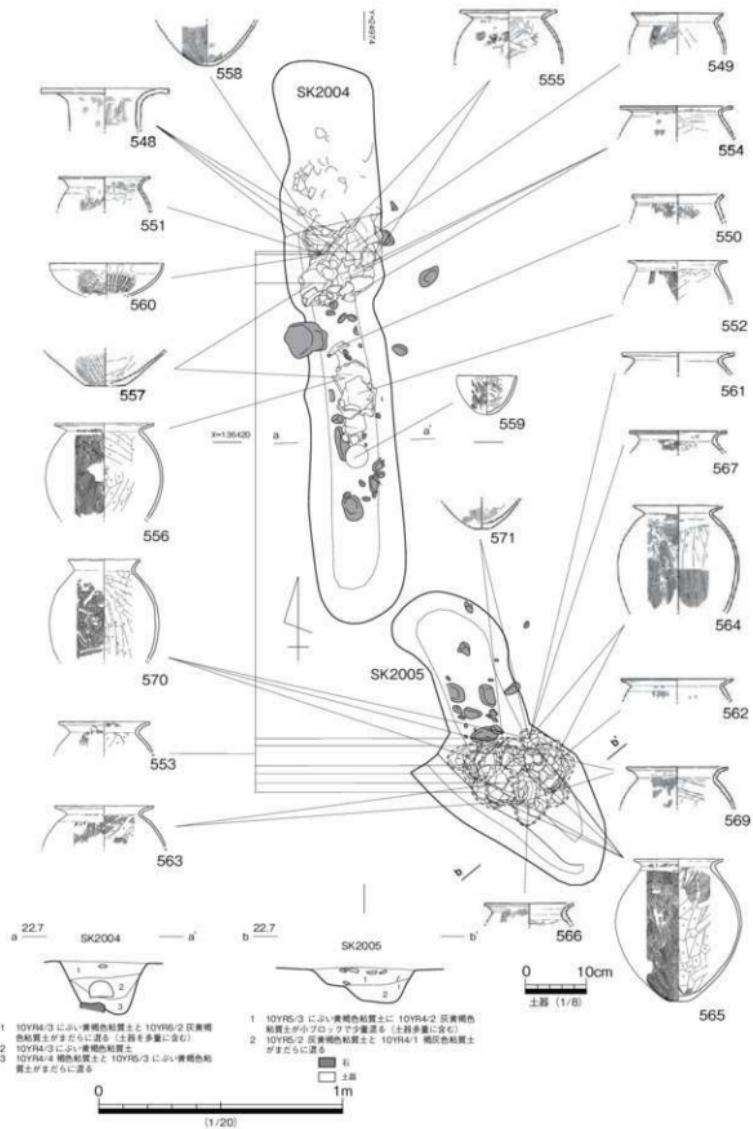
SK2004からは広口壺・鉢が数点出土している以外は、両遺構の土器組成は大きく変わらず、甕が大部分を占める。また、土坑の観察から埋土に焼土等の焼成に関連する遺物は一切含まれず、土坑の壁面にも被熱による変色はみられない。さらに出土土器にも焼成破裂等はみられなかったことから、焼成土坑の可能性は限りなく低いといえる。

『旧練兵場遺跡Ⅲ』U区SD5005などに平面形や断面形に類似するものがみられるが、遺構の機能は不明な点が多い。

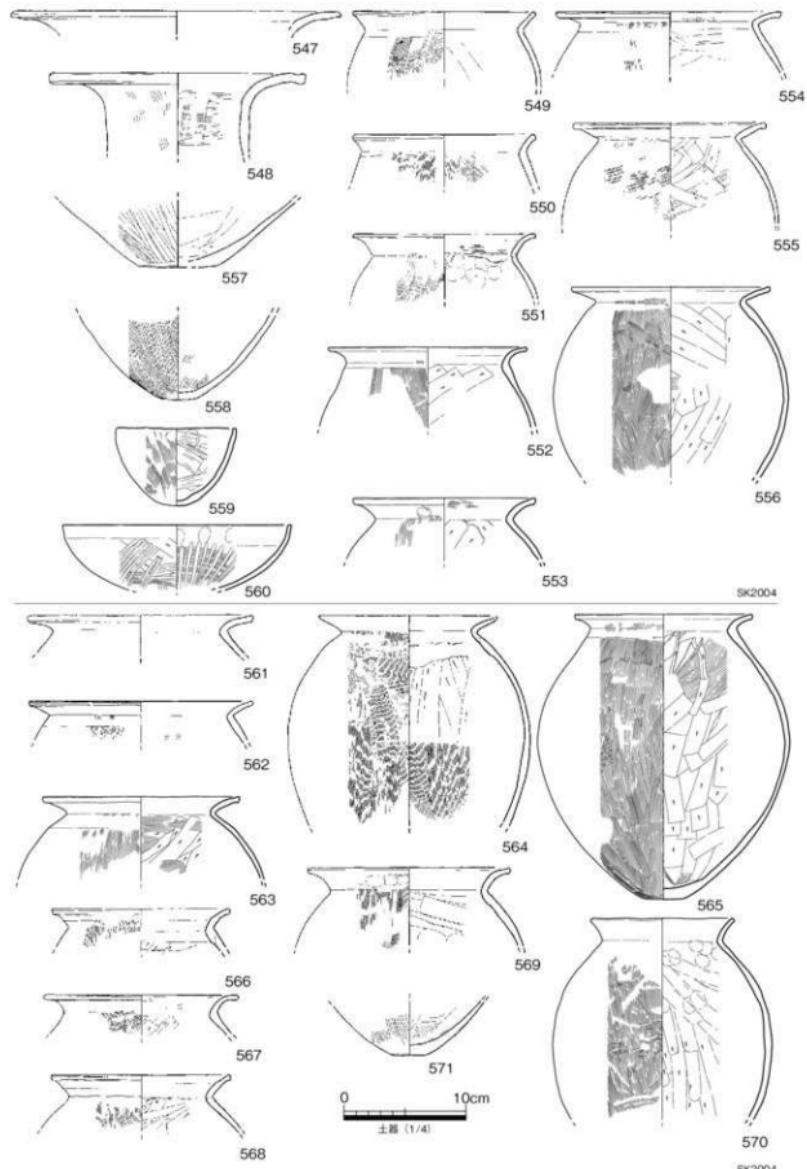
土器 SK2004から出土した遺物は広口壺(547)、長頸壺(547・548)、甕(549～556)、底部(557・558)、鉢(559・560)がある。SK2005から出土した遺物は甕(561～570)、底部(571)がある。

548の長頸壺は、直立する頭部にやや不明瞭な口頭部を経て口縁部に至る。端部は上方にややつまみ上げる。549は小型の鉢、560は中型の鉢で端部は断面四角形を呈する。549・550の甕は口縁部を斜め上方にするもの、551～556は外反して中位から水平になるものがある。555・556の甕は、胴部よりやや上位に胴部最大径をもつ。557の底部は器壁がやや厚く、壺の底部とみられる。558は甕の底部とみられるが、完全な丸底ではない。

561～570の甕は、SK2004の遺物群とさほど変わらない。571はSK2004出土の558と同様に、完全



86図 2区②SK2004・SK2005 平断面図・遺物出土状況



87図 2区②SK2004・SK2005出土遺物実測図

な丸底ではない。570 の甕は、やや寸胴を呈する胴部をもち、口縁部は上方に引き出される。

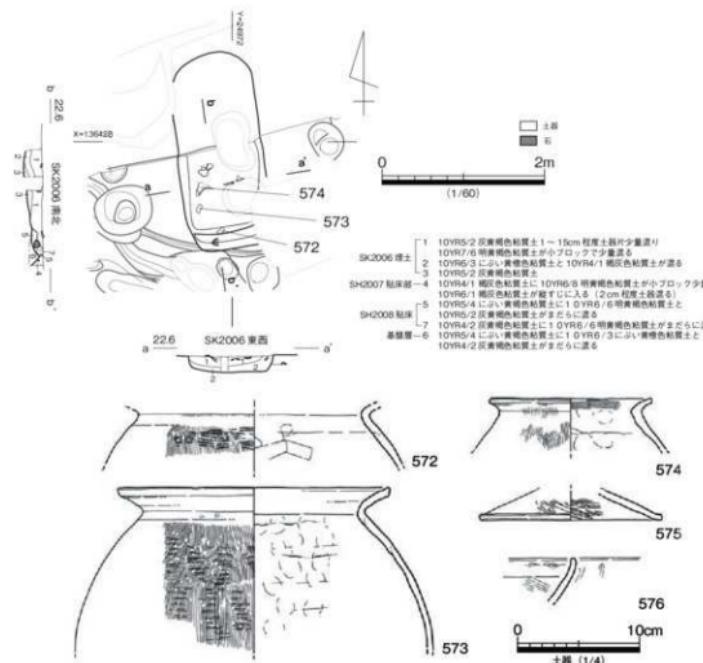
時期 出土遺物はその出土状況から、掘削後間もなく投棄され短期間で埋め戻され、また土器群の特徴もまとまるところから、良好な終末期新相の一括資料と考えられる。

SK2006 (88図)

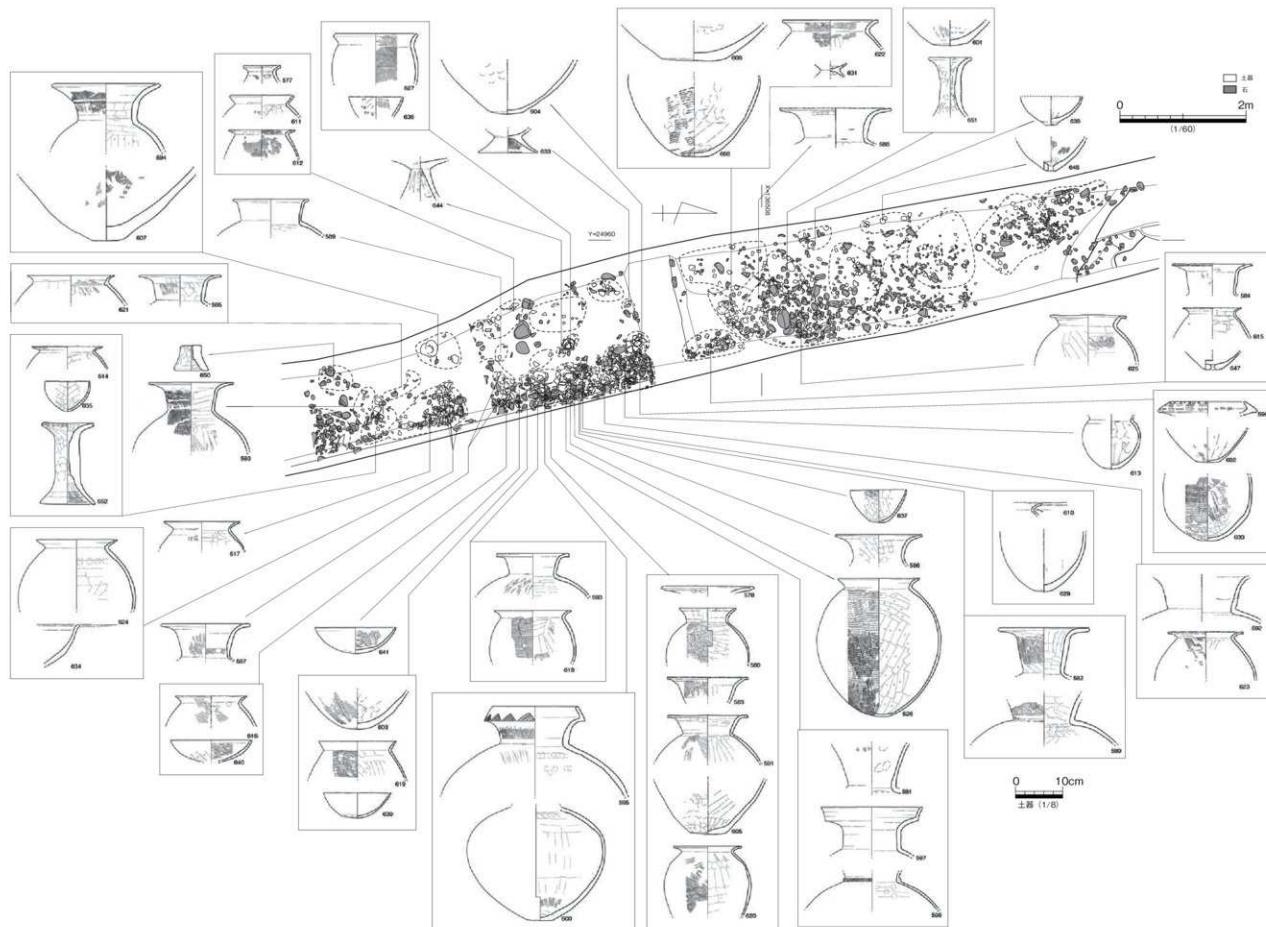
遺構 2区②北で検出した隅丸長方形の土坑である。幅1.1m、長さ2.4m、深さ20cmを測る。断面形状は箱型を呈し、壁面は垂直気味である。埋土は下層に黄色ブロックがわずかに混じるのみで、上層下層ともほぼ変化はみられない。北半分は保護層が確保できることから、検出にとどめ掘削は実施していない。遺構の重複関係は、SH2008より後出す。埋土下層には遺物はほとんど含まれておらず、上層上位に集中している。

土器 出土遺物は甕(572～574)、高杯(575)、鉢(576)がある。573の甕は、胴部にタタキの痕跡が残る。頭部の屈曲はややゆるく端部はややつまみ上げる。572と573は接合関係にないが、胎土調整など類似することから、同一個体の可能性がある。575の高杯は、末広がりの脚部である。576の鉢は、やや内湾する口縁部をもつ。

時期 573の甕の特徴から、弥生終末期古相に廃絶したものと考えられる。

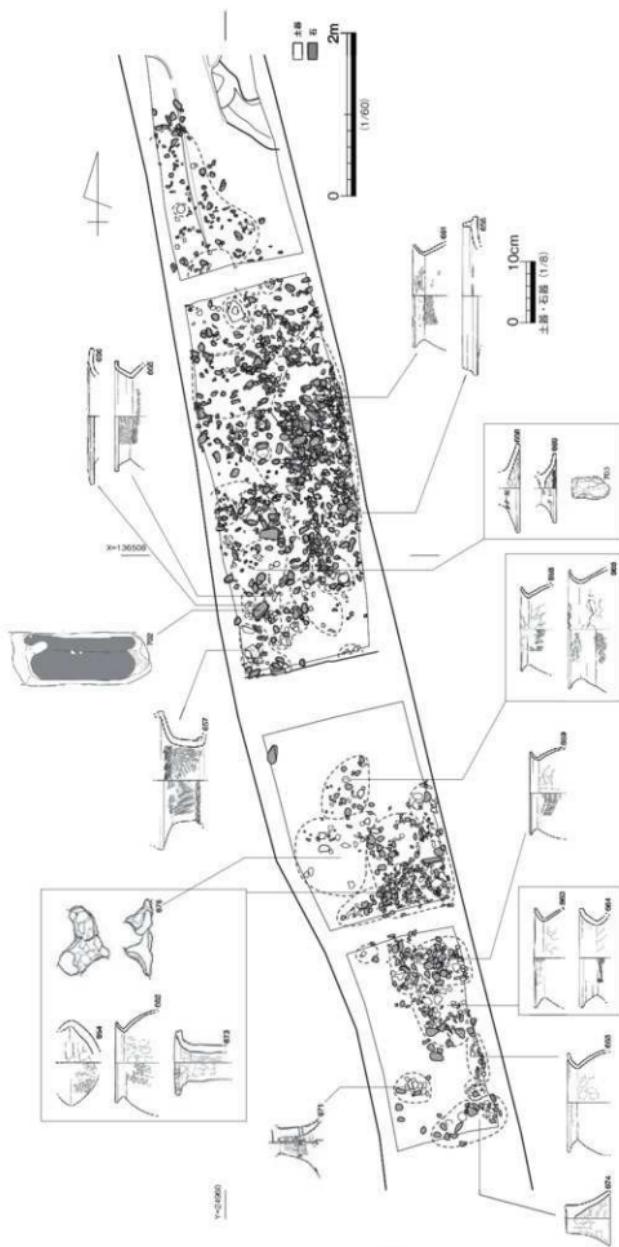


88図 2区② SK2006 平断面図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

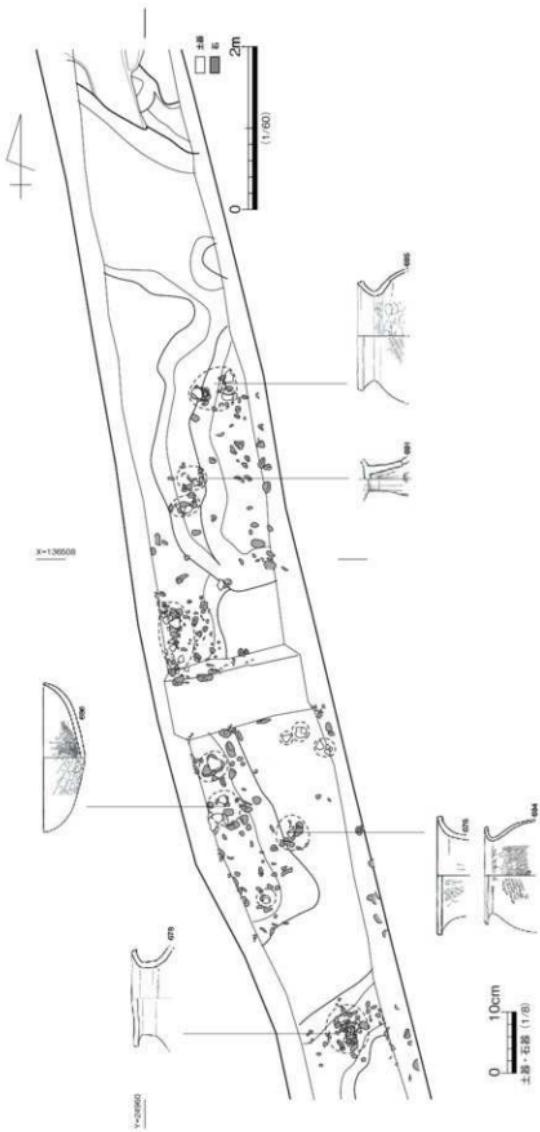


89図 2区②SR2002遺物出土状況図(1)

90 図 2区② SR2002遺物出土状況図(2)



91図 2区② SR2002遺物出土状況図 (3)



5) 流路

SR2002 (89図～98図)

遺構 2区①で検出した南南西から北北西へと流下する流路である。幅約14m、深さ50cm～80cmを測り、埋土は上層、中層、下層の三層に分かれる。あぜの断面や各層での土器の分布をみると、東側に集中する傾向にあり、特に上層でその傾向が顕著である。

下層は基盤層V層に由来するレキ層が底面に露出し、埋土もレキと粗砂が基本となる。おそらくは水流でV層を侵食した結果、レキと遺物が混在する状況になったとみられる。遺物取上げは4層、5層として取上げている。中層は極細砂から粗砂が主体となり、拳大ほどの亜円レキが全域に広がる。3層で遺物を取り上げている。遺物群の大きな個体の大半は東半分に寄り、西半分は小片が多い。しかしその傾向も南北ほどその傾向にあるが、北へいくほど土器群の分布が西へ寄る。上層は暗褐色系の粘質土が主体となり、下位には砂レキなど夾雜物が多いが、上位ほど粘質土のみとなる。遺物は2層（2層下位）として取上げている。最上層は暗褐色系の粘質土のみとなる。遺物は1層として取り上げている。

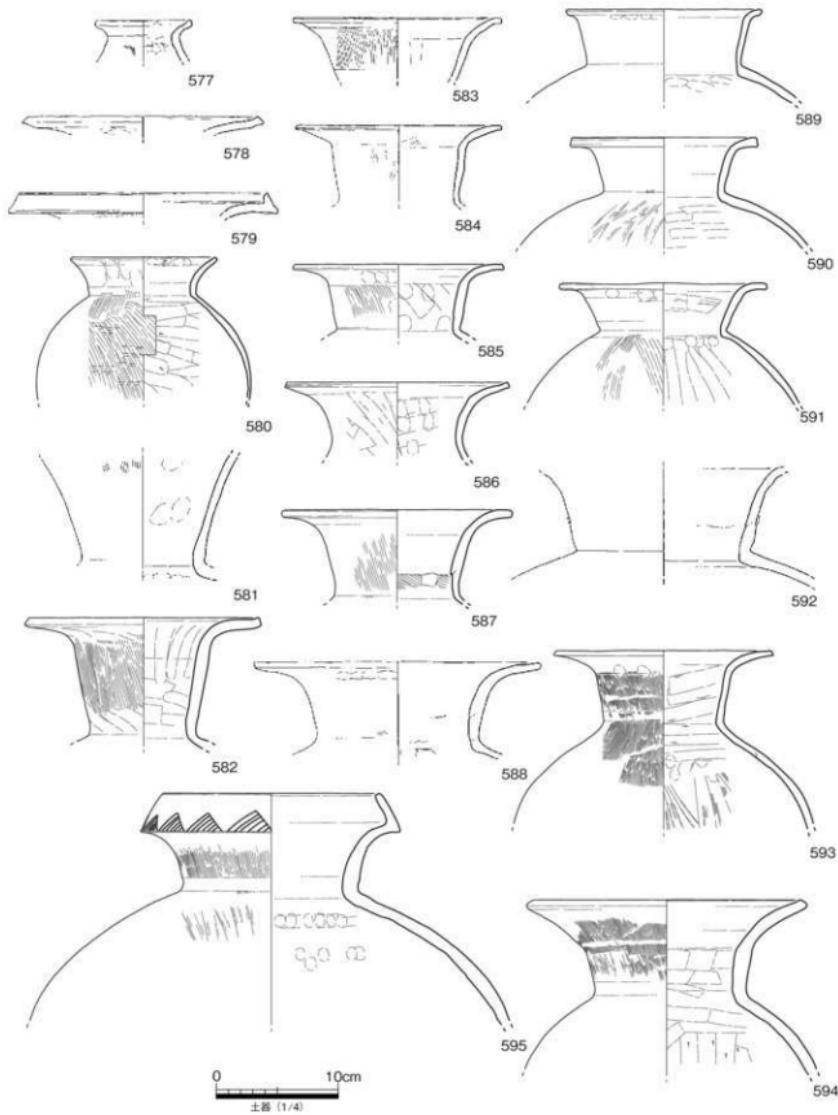
この流路は1区東で検出したSR1003の大溝、14次SD56とも類似していることから、SR2002およびSR1003と14次SD56は一連の遺構である可能性がある。

上層（2層・2層下位）(89・92～95図)

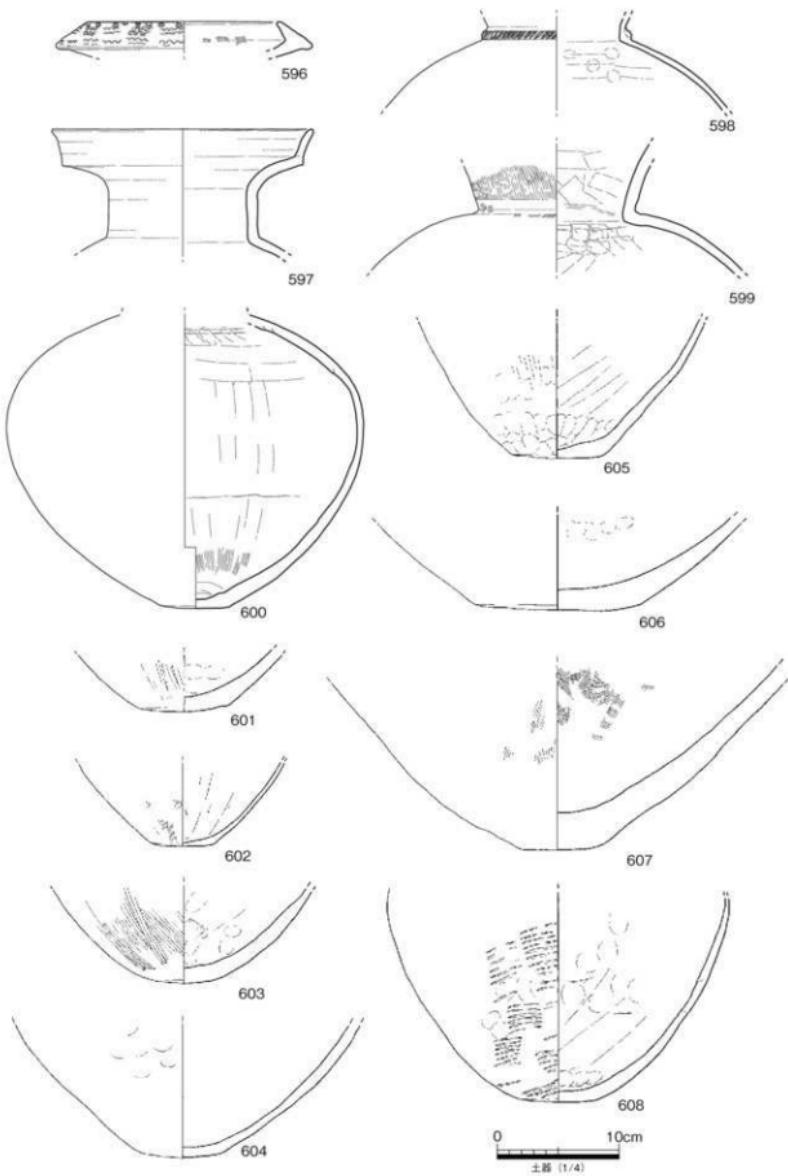
出土遺物は広口壺（577・578・580～594・598・599）、複合口縁壺（579・595・596）、二重口縁壺（597）、底部（600～608・529・530）、甕（609～628）、鉢（634～643）、台付鉢（631～633）、高杯（644～646）、瓶（647～649）、支脚（650～652）、サスカイト製平基式石鏡（700）がある。時期は弥生終末期新相から古墳前期古相の時期である。

578は広口壺である。古墳前期でも古層を示す。582～594の広口壺は、頸部はほぼ垂直でやや不明瞭な口頭部を境にしてやや外反しながら端部に至る（584・585）、頸部から口縁部までがほぼ連続して外反し端部に至る（586～588）、逆「ハ」の字に開く頸部とやや明瞭な口頭部を境にして水平方向に張出す（588～591）がある。

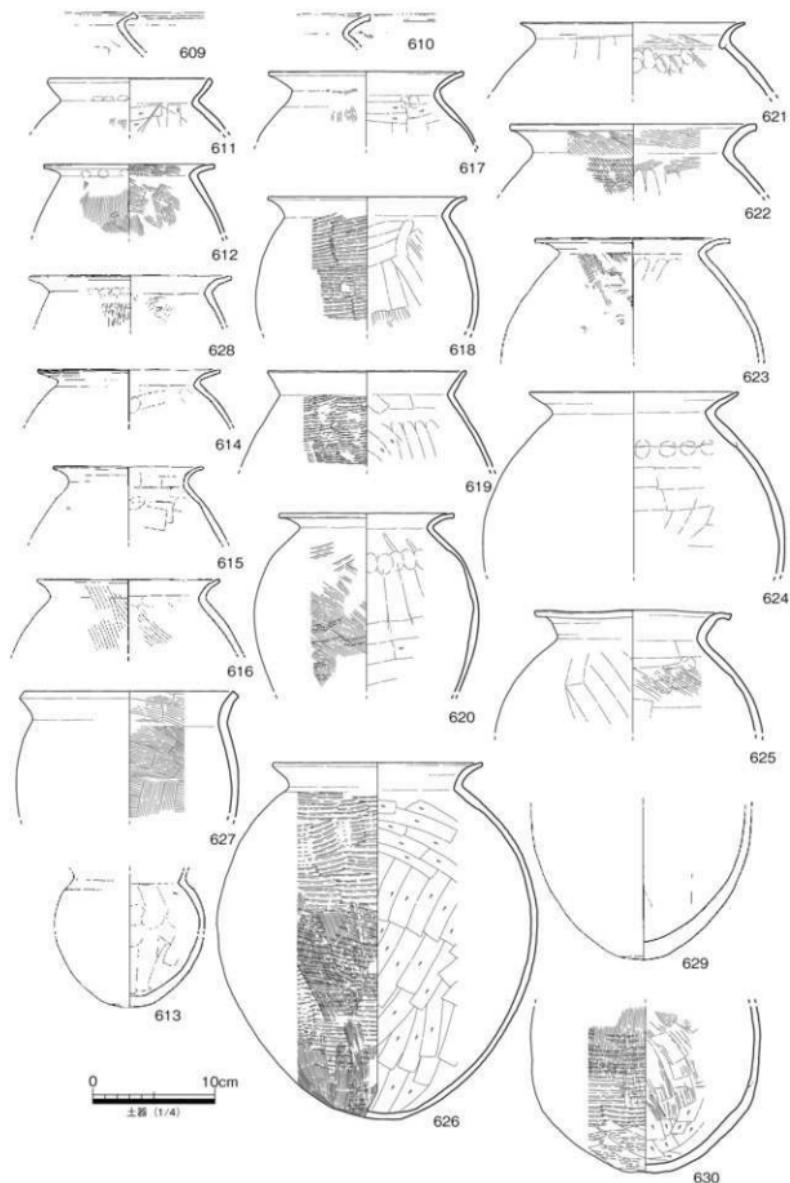
580の広口壺は、頸部は明瞭に屈曲し口縁部はゆるく立ち上がる。593の広口壺は、胴部の上位がやや肩を張り、口頭部の境はしっかりとしている。594の広口壺は、他のものに比べ、器壁が厚く、各所の傾斜変換点はゆるい。595の複合口縁壺は、鋸歯文が施される。596の複合口縁壺は、端部外面の上位に竹管文、下位を波状文が占める。口縁部分は鋭角に屈曲し、内側に折れる。597の二重口縁壺は、頸部がやや長く垂直に立ち上がる。598～600の壺は、胴部の上位が張り、598は胴頭部の境に突帶を貼付けハケ原体压痕の列点文が施される。601～607の底部は、壺の底部とみられ、606・607は特に大型壺の底部とみられる。甕は617・623・625は古墳時代前期初頭にくる可能性がある。底部が残存しているものは、丸底化している。胴部最大径は、胴部中位よりやや上にある。鉢は、口径10cm～12cm（635～637）の小型のボウル状を呈するもの、口径13cm～14cm（638・639）の口縁部がやや外開きになる椀状のもの、口径17cm前後（640・641）の器高が口径に対し低いものの、三種類がある。口径が17cm以上になるもの（634・642・643）は、口縁部がいずれも、屈曲し外反する。屈曲や外反の度合いは、個体により異なる。650は、台形状の支脚、652は筒状の支脚で、口縁部に刻目が等間隔で施される。



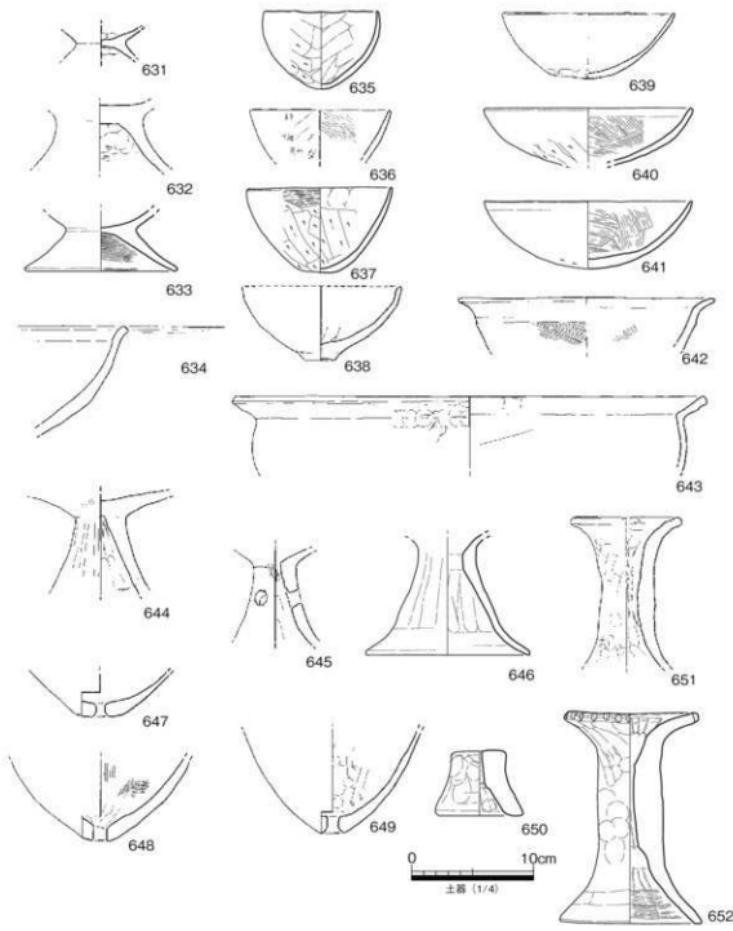
92図 2区② SR2002 出土遺物実測図(1)



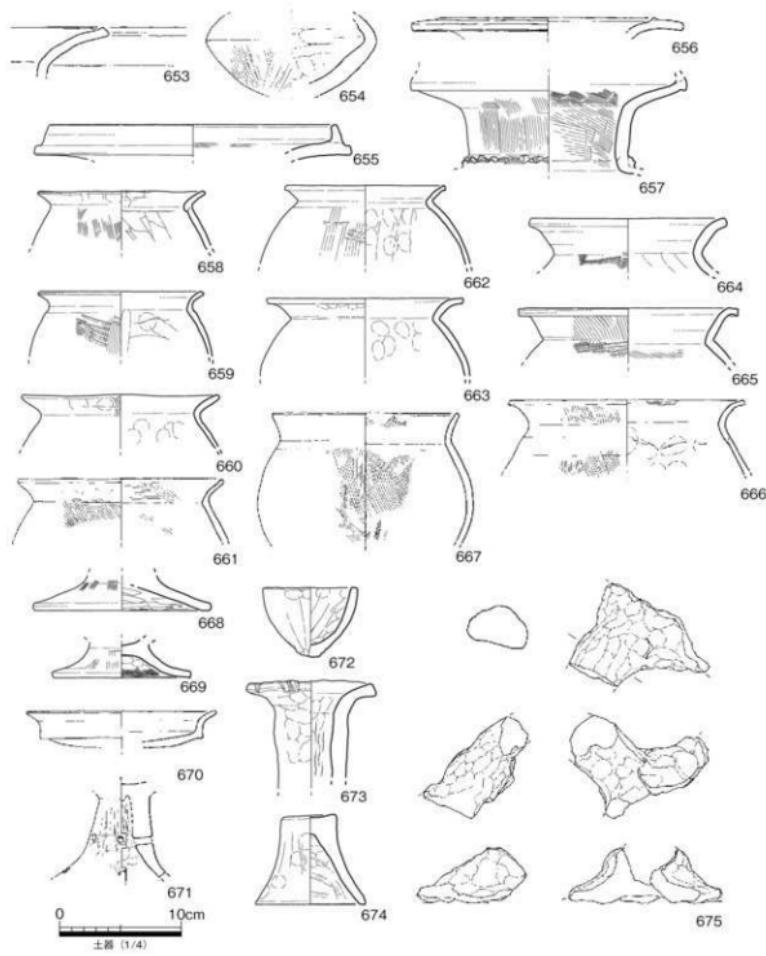
93図 2区②SR2002出土遺物実測図(2)



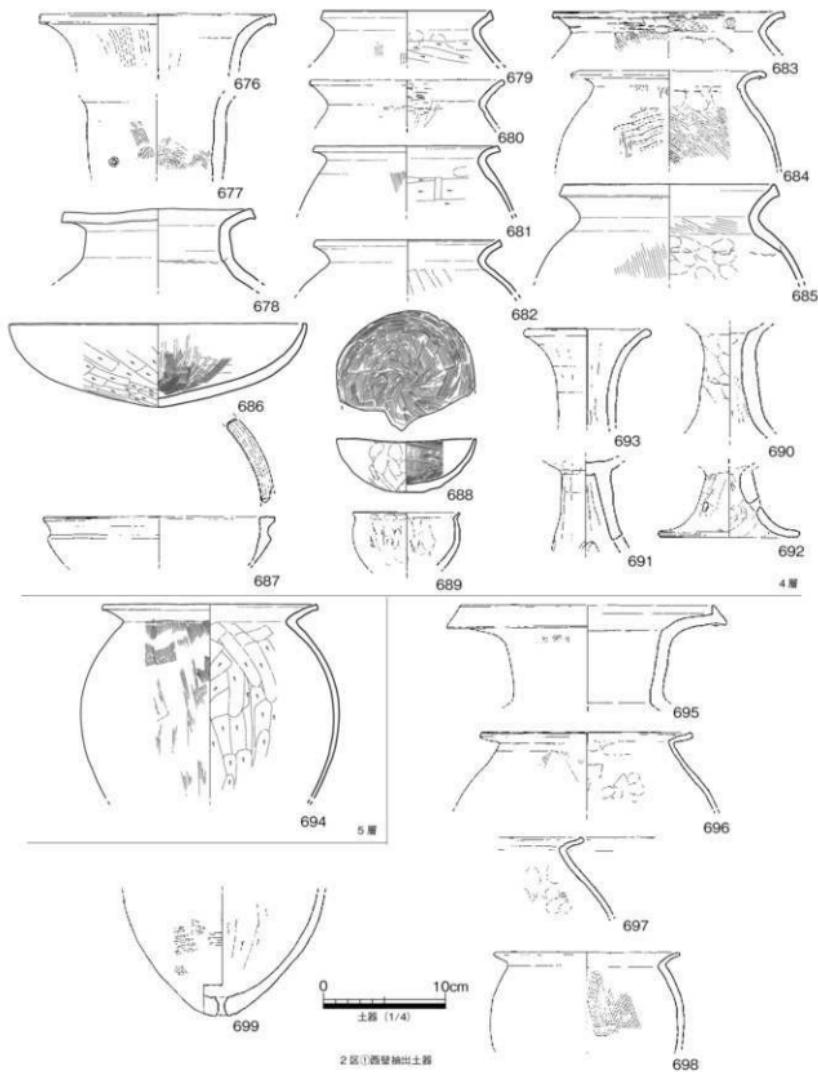
94図 2区②SR2002出土遺物実測図(3)



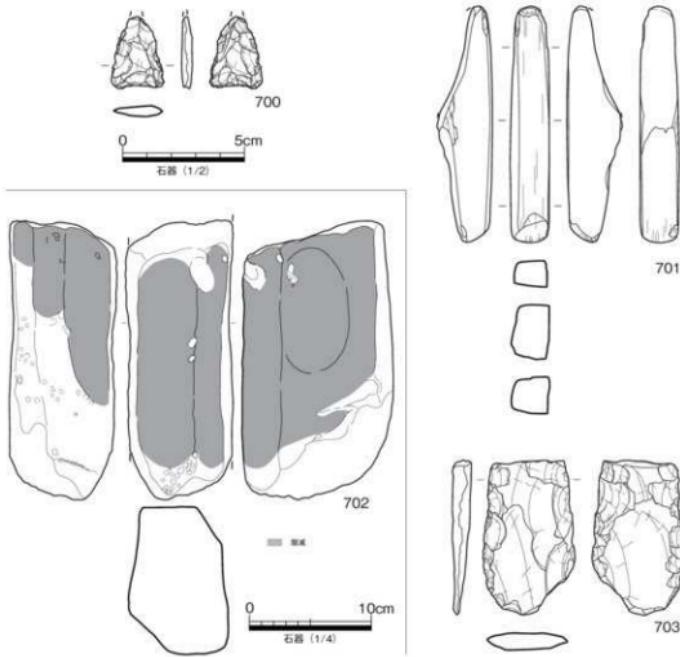
95図 2区②SR2002出土遺物実測図(4)



96図 2区②SR2002出土遺物実測図(5)



97図 2区②SR2002出土遺物実測図(6)



98図 2区②SR2002出土遺物実測図(7)

中層(3層)(90図・96図・98図)

出土遺物は広口壺(653)、壺(654)、複合口縁壺(655～657)、甕(658～667)、高杯(668・670・671)、鉢(672)、台付鉢(669)、支脚(673～675)、石器(702・703)がある。時期は終末期新相である。

654は、細頸壺の胴部とみられるが、器壁が厚い。655の複合口縁壺は、疑似口縁と口縁上部の接続はスムーズではなく、内側にズラして口縁上部がとりつく。656の複合口縁壺は、口縁部内面に断面三角形の突帯状にめぐり、口縁上部が形骸化したものとみられる。甕は上層資料に比べ、口縁部の拡張は抑え気味である。670の高杯は、短く外反する口縁部で杯部中位の境は明瞭に屈曲する。671は、脚部の中位と傾斜変換部分の二段に円形のスカシを穿孔している。672の小型鉢は、底部の突出が傾いている。673の支脚は、口縁部の刻み目は雑で、二条一組ないし是一条のみの箇所もある。675の支脚は、出土地点や色調・胎土が共通しており同一個体として図上復元している。大きく二股に分かれる。二股部分は中実、それ以外の部位は中空である。

下層(4層)(91図・97図・98図)

出土遺物は広口壺(676～678)、甕(679～685)、鉢(686～689)、高杯(691・692)、支脚(690・693)がある。時期は後期後半新相から終末期古相の時期幅があり、大多数は終末期古相とみられる。

677 の広口壺は、頸部下位に竹管文が一点施される。678 の広口壺は、短い頸部に明瞭な屈曲をもつて外反する口縁部をもつ。679～685 の壺は、上層中層の資料に比べ、より口縁部の拡張は抑え気味である。口縁端部が強い横ナデで面をなすものがある。683 と 684 の壺は口縁部の外反度がやや強い。686 は口径 25cm を測る大型鉢で内湾気味口縁部をもつ。687 も鉢とみられ、口縁端部に段を有し、上面は外側にやや拡張させる。端部上面はハケが施されている。688 の鉢は、内面内側は放射状に、内面外側は円周状にハケ目が施される。690 の支脚は特に強い横ナデが施され、器壁の凹凸が目立つ。

下層（5層）（97 図）

出土遺物は壺（694）がある。この遺物以外にも出土はあったが、形状不明なものがほとんどであったため報告していない。694 の壺は、胴部中位よりやや上に胴部最大径があり、やや肩が張る。口縁部は強く屈曲し直線的である。

694～699 は SR2002 が位置する 2 区①西壁から取り出したもので、各出土遺物の層番号は 7 図の層番号と対応する。

695 の複合口縁壺は層番号 3-36 層取上単位は上層資料である。上方にわずかに拡張させ、弥生終末期の新相から古墳初頭の所産と考えられる。696～699 は層番号 3-19 層、取上単位は上層資料である。696 と 697 の壺は、頸部が強く屈曲し、口縁端部はやや上方につまみ上げられている。香東川下流域産とみられる。699 の壺は、外面にタタキ目の痕跡が確認できる。

b. 古墳時代後期以後

1) 溝

SD2003（99 図）

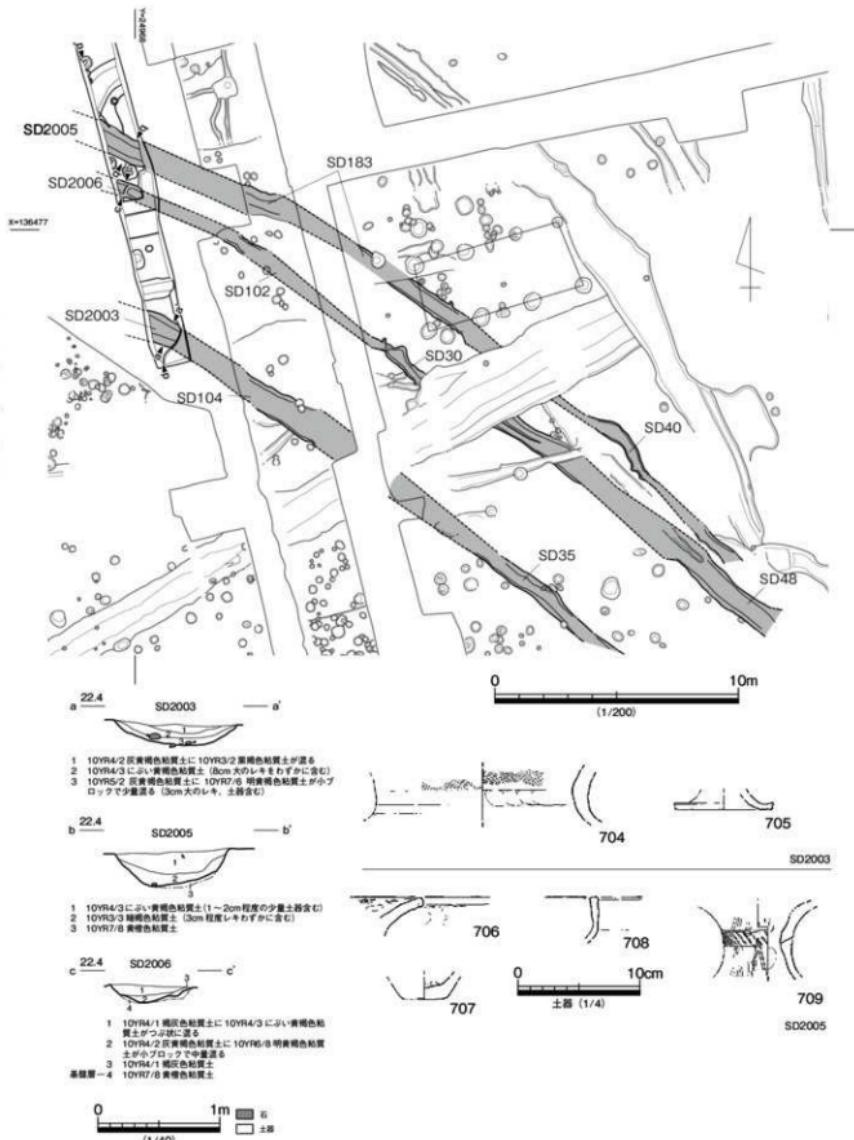
遺構 2 区①南で検出した南東から北西へ軸をとる溝である。溝は幅 1.1m、深さ 25cm を測り、断面形状は幅広の U 字形を呈する。溝の下層には、亜円レギが十数個混じっていた。埋土は大別 2 層に分けられ、下層は黒褐色粘質土に基盤層 IV 層に由来する黄色シルトが混じり、上層は暗褐色粘土層である。

この SD2003 は、東側に 14 次 SD35・SD104（以下 SD35）、北西の直線上には保育所付帯施設工事等に伴う事前調査で確認された SD07 があり一連の遺構である可能性がある。

微高地⑤を横断した直線の形状であることから SD2003 は人為的な溝と判断でき、また SD2003 北側の SD2005 と SD2006 も一定距離を保ちつつ位置することから、この 3 条の溝は関連性の高い同時期の溝の可能性がある。

土器 出土遺物は、壺（704）、高杯（705）がある。704 の壺は、大型の壺頸部の破片である。705 は須恵器高杯の脚部である。脚部は内湾し端部に至る。端部は上下に少し拡張させている。

時期 ほぼ弥生時代の遺物で占められるが、埋土下層に須恵器が入る。改めて検出時の写真を確認したが混入を示す痕跡は確認できなかった。705 の須恵器高杯は 7 世紀全般にみられる形態であり、詳細な時期は特定できない。一連の遺構である 14 次 SD35 は平安後期以後と報告されているが、報告遺物に当該期の年代を示す出土遺物は皆無である。以上より 7 世紀代に埋没したものと考えておきたい。



99図 2区① SD2003・SD2005・SD2006 平断面図・出土遺物実測図

SD2005

遺構 2区①の中央で検出した溝である。幅1.0m、深さ25cmを測る。埋土は上下2層に分けられる。2層は粘性が強くほぼ単層、1層は基盤層IV層に由来する粘質土のブロックが上位にいくほど多く含まれ、マンガンの沈着もみられる。2層を機能時の堆積、1層を埋戻土とすることができるだろう。遺構の重複関係は、SD2004とSX2003より後出す。

SD2005の東側は14次SD40・SD183として報告されている溝があり、一連の遺構と考えられる。14次調査の部分ではやや蛇行する部分もあるようだが、ほぼ直線である。

土器 出土遺物は、壺(706)、底部(707)、高杯(708・709)がある。708の高杯は、口縁部が内傾気味に立ち上がる。端部は断面方形である。709の高杯脚部は、帯状に左上の沈線をめぐらせた後に、三角形のスカシを四方向に穿孔している。SD2005に先行するSX2003出土資料と接合したことから、SX2003からの混入と判断した。

時期 前述の通り、SD2003・SD2006と相互に関係する遺構と考えられる。本遺構から出土した遺物は、弥生時代後期前半のものしか出土しておらず、SD2003の時期の7世紀代の遺物は皆無である。

SD2006

遺構 2区①の中央で検出した溝である。幅60cm、深さ30cmを測る。溝の埋土は単層だが、基盤層IV層に由来する黄色シルトが混じり、また、溝底は不整形である。底面は西が高く、東が低い。SD2006の東側は14次SD30、SD48、SD102があり一連の遺構と考えられる。流水目的とするならば、周辺の地形を含め考えると、東から西へと傾斜しなければならない。しかし、本遺構は西が高く、東が低い形状を呈している。検出できた範囲は一部であるが、同様の底場の形状を示すものに、道遺構に関連する連結土坑型の溝がある。今後養護学校下の報告で確認作業が必要である。

時期 時期決定できる資料は皆無で、SD2003・SD2005と同様に7世紀代の埋没と捉えておきたい。

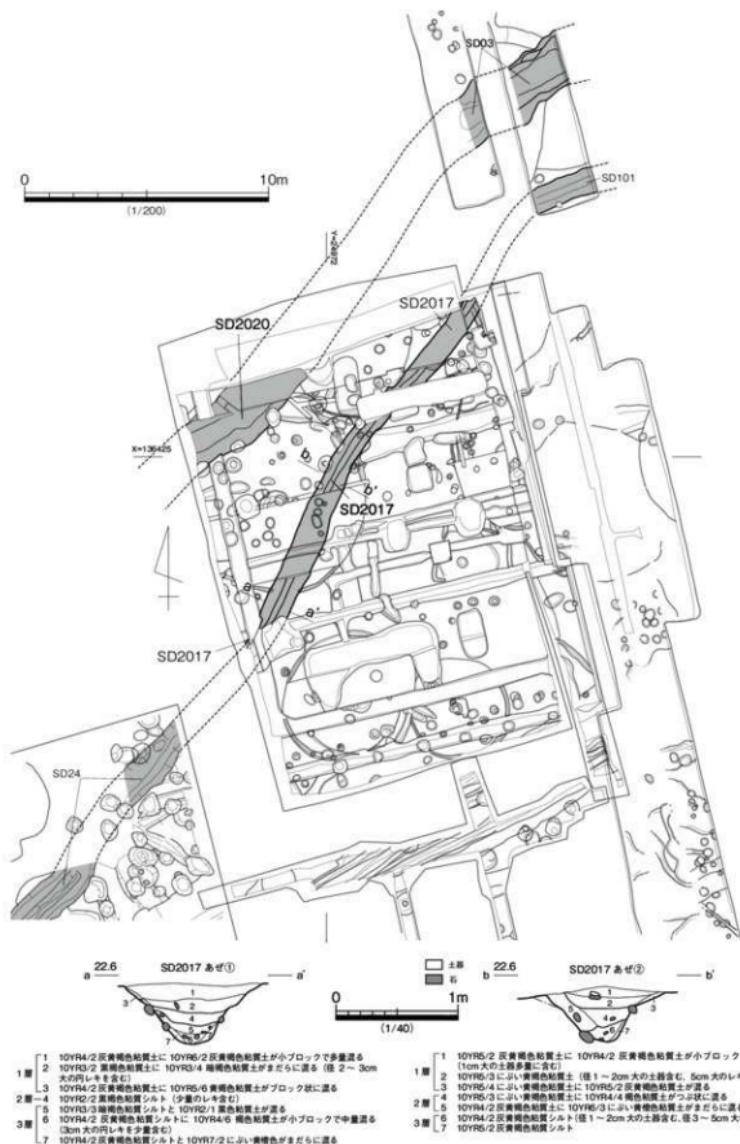
SD2017 (100図・101図)

遺構 2区②で検出した南西から北東へと進路をとる大溝である。規模は幅1.1m、深さ40cmを測り、断面形状は逆三角形を呈する。埋土は大別3層あり、3層はラミナ状の砂質の堆積が認められ、2層もやや粘性を帶びているものの、3層同様には機能時の堆積層と考えられる。上層の1層は周囲の黒褐色包含層によく似る埋土で、レキ等が多く混じる。下層の2層・3層とは様相を異にすることから、大溝の埋戻土と考えられる。

西側は19次SD24、東側は14次SD27・SD101があり一連の遺構と考えられる。なおSD101は14次の平面図でⅡ区中央のSD01と誤表記されているものである。

本遺構はSD2020と一定の間隔を保ちつつ弧状を描き掘削されている。遺構の断面形状や規模は異なるが、埋没状況や遺物の在り方は共通しており、両遺構は相互に関連する遺構と考えたほうが良いだろう。

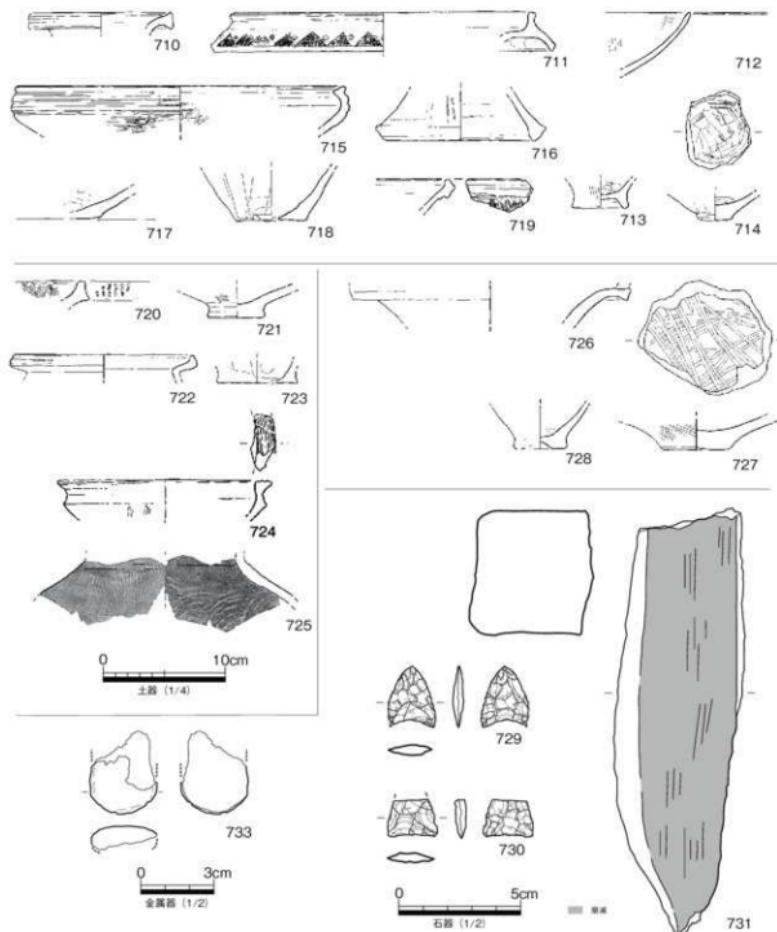
土器 1層出土土器は、広口壺(710)、複合口縁壺(711)、鉢(712・714)、台付鉢(713)、高杯(715・716)、底部(717)、瓶(718)、須恵器壺(719)、石錐(730)、砥石(731)がある。711の複合口縁壺は、口縁上端部がしっかりと作り出され、鋸子文と竹管文が交互に施されている。715の高杯部は、端部を内湾させ、外面には凹線文が施される。716の高杯は、脚部に縱方向の沈線があり、脚端部を少し拡



100図 2区② SD2017・SD2020 平面図

張させ、内面にヘラケズリが施される。吉備系の高杯とみられる。719の須恵器甕は、口縁端部は肥厚し、内面は突岸状につまみ出されている。外面には波状文が施文される。

2層出土土器は、壺(720)、鉢(721)、甕(722)、底部(723)、鉢(724)、須恵器甕(725)、石鎌(729)がある。720の壺は、口縁部内面に波状文、外面には列点文が施文される。撒入品とみられる。722の甕は、頸部で鋭く屈曲し、端部は上方につまみ上げる。擬四線化している。722の須恵器甕は、やや焼成不良で軟質である。



101図 2区②SD2017出土遺物実測図

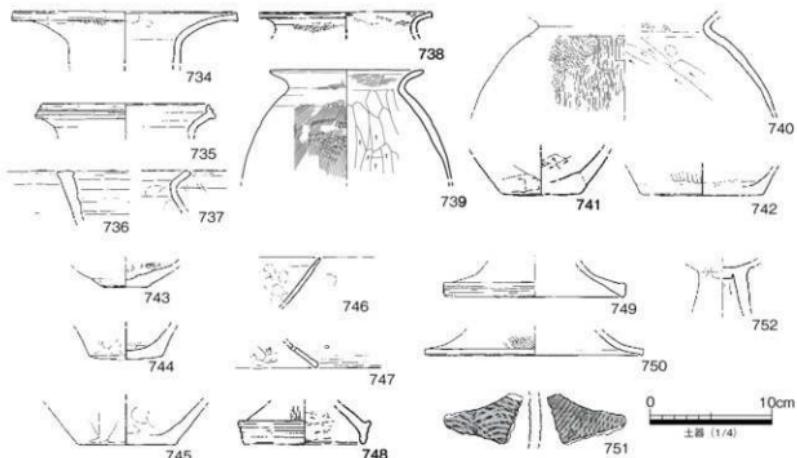
3層出土土器は、複合口縁壺（726）、台付鉢（728）、底部（727）、不明鉄製品（733）がある。728の底部は、台状に大きく外に開き、壺の底部とみられる。733の鉄製品は、形状より刀子の柄と判断したが、詳細は不明である。

時期 層位ごとに遺物を示しているが、各層には弥生時代中期後半から終末期の土器や須恵器が混在しており、弥生時代の遺物はすべて大溝開削時に破壊された周辺の堅穴建物等の遺物と考えられる。大溝の埋没時期を捉えられる遺物は1層出土の甕（719）と2層機能時堆積層の甕（725）のみである。ともに詳細な時期比定は困難であるが古墳時代後期の遺物と考えられる。そこで一連の遺構と考えられる19次SD24、14次SD27・SD101出土遺物も含め検討しておきたい。14次SD27・SD101の遺物は報告されておらず、詳細は不明である。19次SD24からは少量だが須恵器杯・高杯が出土しており、7世紀代に比定されるものである。わずかな遺物しか出土していないが、SD2017は7世紀代に機能していたものと考えておきたい。

SD2020 (100・102図)

遺構 2区②で検出した南西から北東へ進路をとる大溝である。規模は幅2m、深さ80cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。溝の埋土は大別3層ある。下層は基盤層V層に由来するレキと粗砂を主体とし、流水の痕跡が認められた。調査時には4層として遺物の取上げを行っている。中層は夾雜物が多く含まれ黒褐色系の粘質土と基盤層IV層に由来する黄色ブロックが混じる。黄色ブロックが多量に含まれることから、溝の廃絶に伴う埋戻土と考えられる。調査時には2層と3層として遺物の取上げを行っていたが、大別層位としては同一層と判断される。最上層の1層は中世以降の遺構埋土や包含層に土質・色調が類似しており、溝の埋戻後の窪地となった箇所の堆積層と判断される。

なおSD2020の西側に19次SD31、東側は14次SD03があり、一連の遺構と考えられる。



102図 2区② SD2020 出土遺物

土器 出土遺物は、広口壺（734・735）、無頸壺（736）、甕（737～740）、底部（741～745）、鉢（746）、台付鉢（747）高杯（748～750・752）、須恵器甕（751）がある。734の広口壺は、長い頭部から明瞭に屈曲し、口縁部に至る。端部はややつまみ出される。737～740の甕は、いずれもゆるい頭部である。748の高杯は、脚端部を上下に拡張し、凹線文を施す。備後からの搬入品と考えられる。751は甕の胴部と考えられる。内面の当具の圧痕等から胴部中位のあたりとみられる。

時期 本遺構はSD2017と同様に各層に時期を違える弥生土器が混在しており、弥生時代の遺物はすべて大溝開削時に破壊された周辺の堅穴建物の遺物と考えられる。埋没時期を捉えられる資料は下層から出土した751の甕の破片一点のみで、上位からの落ち込みや別遺構の存在は考えられない。751は古墳時代後期以後の特徴をもつが、詳細な時期比定は困難である。そこでSD2020と一連の遺構から出土した遺物をみておきたい。14次SD03は弥生時代に属する土器群しか出土していない。19次SD31では、7世紀後半に属する遺物がまとめて出土している。

今回出土した資料からは埋没時期を判断できないが、一連の遺構である19次SD31から出土した遺物より、SD2020も7世紀後半で埋没したものと考えておきたい。

SD2009・SD6001（103図・104図）

遺構 2区②南東と1区で検出した大溝である。調査区が分かれていたことから、別の遺構名を付しているが、一連の大溝である。規模は幅2.2m、深さ約1mを測る。溝底の断面形状はW字状を呈する。埋土の堆積状況からは改修した痕跡を確認しえないが、大溝底面の凹凸形状は、幾度かの改修が行われた結果生じたものと考えられる。

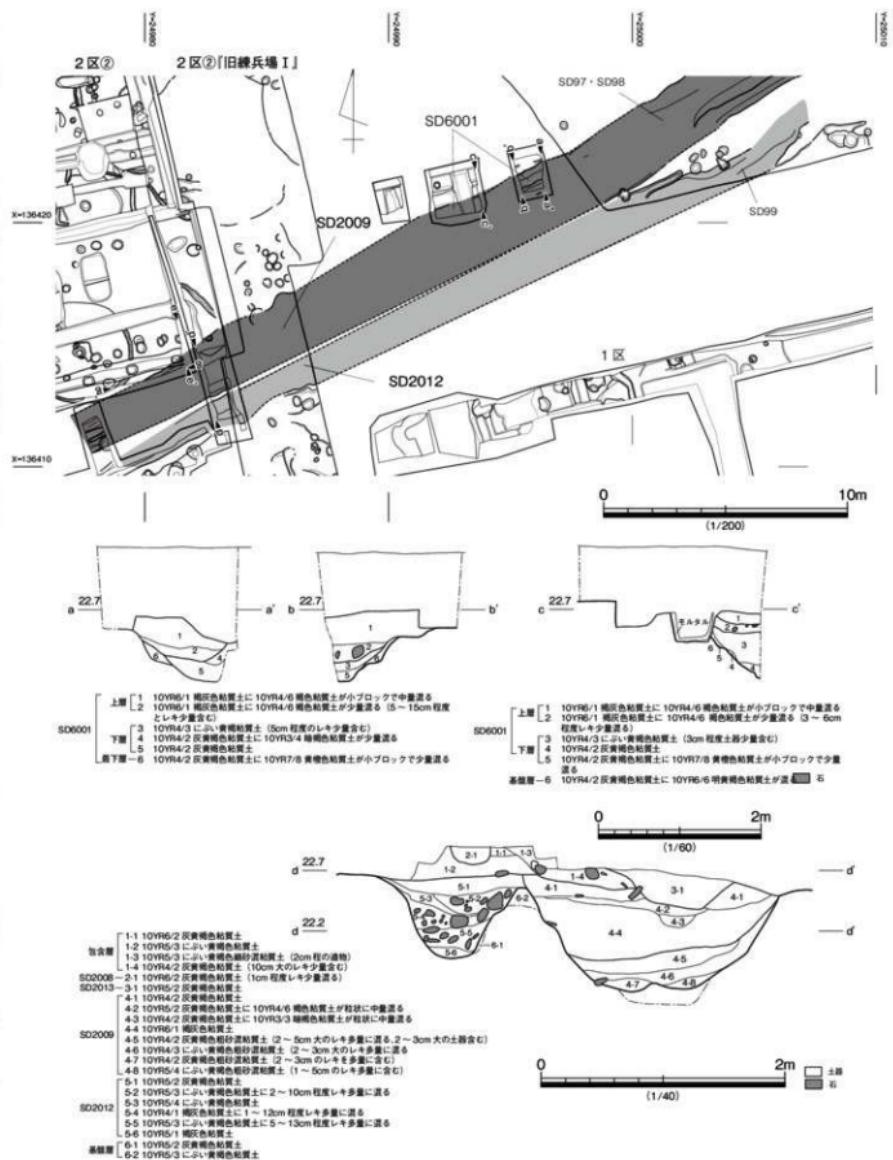
埋土は大別2層あり、下層は基盤層V層に由来する粗砂とレキが混じり、上層は粘質土で占められる。下層は機能時の堆積層、上層は自然埋没層もしくは埋戻し土と考えられる。遺構の重複関係はSD2012より後出す。

SD2009・SD6001は西側を19次SD17、東側を14次SD76・SD91・SD97（以下SD97）と一連の遺構と考えられる。19次で既に報告されているように、条里型地割の坪境に合致する大溝である。

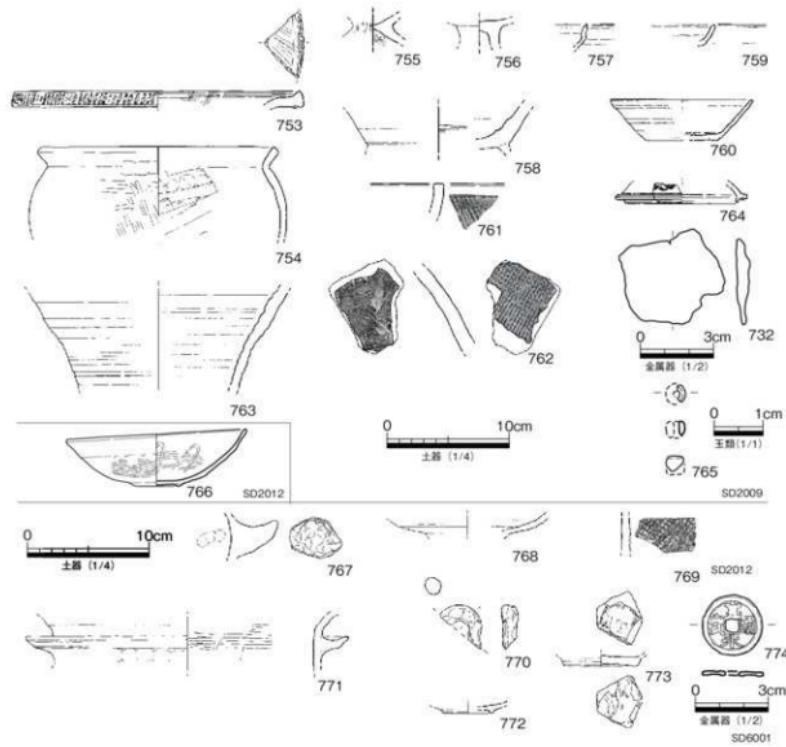
土器 SD2009の出土遺物は、弥生土器広口壺（753）、鉢（754）、台付鉢（755）、須恵器高杯（756）、須恵器杯（757・760）、壺（758）、土師質土器杯（759）、鉢（761）、甕（762）常滑系陶器（763）、陶磁器蓋（764）、SD6001の出土遺物は、瓶（767）、高杯（768）、甕（769）、平瓶（770）、羽釜（771）、瓦器（772）、綠釉陶器（773）、古銭（774）がある。

753の広口壺は、口縁端部をやや拡張し、右斜め上の沈線をめぐらせる。口縁部内面にも櫛描文を施す。759の土師質土器杯は、底部切り離しは回転ヘラ切りで、体部は直線的に口縁部に至る。760の須恵器杯は、口径12cm、器高3.4cmを測り、底部外縁がやや下方に突出し、口縁部は直線的にのびる。763の常滑系陶器は、壺とみられ、底部から大きく開く。残存範囲の上半は下半に比べ、器壁が厚い。771の土師質土器羽釜は、垂直気味の体部に口縁部は斜め上方に延びる。突堤は水平気味に伸び先端がやや斜め上方に立ち上がる。774の古銭は古寛永通宝とみられ、古くとも17世紀中頃とみられる。

時期 SD2009は13世紀前半の遺物が出土したSD2012より新しく位置づけられる。また明らかに混入とみられる764の陶磁器蓋と774の古銭も除外すると、13世紀前半より新しく位置づけられる遺物はみられない。また一連の遺構と考えられる14次SD97は、遺物の時期幅が広く別遺構の混入が多いものと考えられ判断つかないが、19次SD17でも時期差を明瞭に示すものは出土していない。また、



103図 1区・2区② SD2009・SD2012・SD6001 平断面図



104図 1区・2区② SD2009・SD2012・SD6001出土遺物実測図

南北の条里型地割の坪境に一致するSR1002も13世紀に廃絶しており、SD2009もほぼ同時期に埋没した可能性がある。

SD2012 (103図・104図)

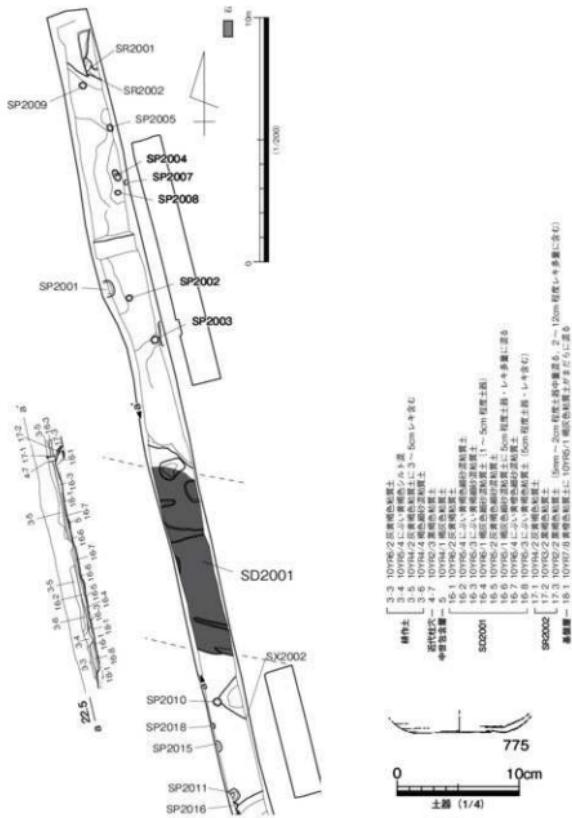
遺構 2区②南東で検出した大溝である。幅1.3m、深さ約70cmを測り、断面形状はU字状を呈している。埋土は最下層に厚さ10cmほどの粘質土で占められる層(1層)があり、機能時の堆積と考えられる。上層は10cmから20cm台の亜円レキが主体となっている。以上より上層は人為的な埋戻と理解される。遺構の重複関係はSD2009に先行する。

SD2012は14次のSD93・SD99、19次SD17と一連の遺構である。14次SD76とSD99の重複関係はSD99が古いことが確認されており、SD2012とSD2009の先後関係の判断も正しいものと判断される。

土器 766は和泉型の瓦器碗である。高台は低く扁平な逆三角形を呈する。底部から内湾気味に大きく広がり、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。内外面ともに磨滅著しく、ヘラミガキは不明瞭である。

高台や体部の形状より13世紀前半の所産と考えられる。

時期 出土土器は大溝の埋戻土中位からの一点だけ瓦器挽の特徴は13世紀前半頃を示す。前述したSD209の状況を考慮すると、SD2012とSD2009の埋没時期に時期差はなく、13世紀代に埋め戻されたものと考えられる。



105図 2区① SD2001 平断面図・出土遺物実測図

SD2001 (105図)

遺構 2区①中央で検出した溝状遺構である。幅約10m、深さ10cmとみられる。埋土は中世から近世の耕作土に類似しており、南から北へかけての緩斜面を耕作地としてカットした痕跡を溝と誤認した可能性がある。

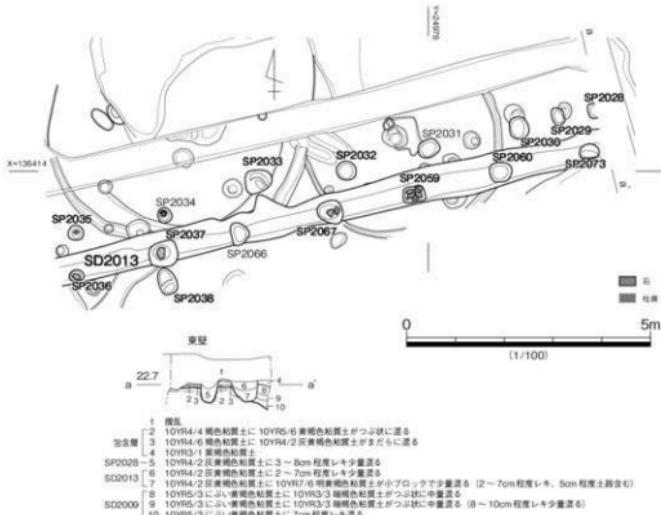
土器 出土遺物は775の土師質土器杯の一点のみである。内外面ともに磨滅著しく、底部の切り離し痕跡は確認できない。

時期 775の土師質土器杯より中世後半期と考えておきたい。

SD2013 (106図)

遺構 2区②南側で検出した東西方向の布影り遺構で、近代の遺構と考えられる。規模は幅65cm、深さ40cm程度を測る布影りに、1.8m等間で直径約50cm～60cmの柱穴が掘削されている。またすべての柱穴に、浮沈防止もしくは高さ調整のための礎板石を設置している。同様の遺構は4区①でも検出している。

時期 近代遺構の基礎と考えられる。



106図 2区② SD2013 平断面図

2) その他

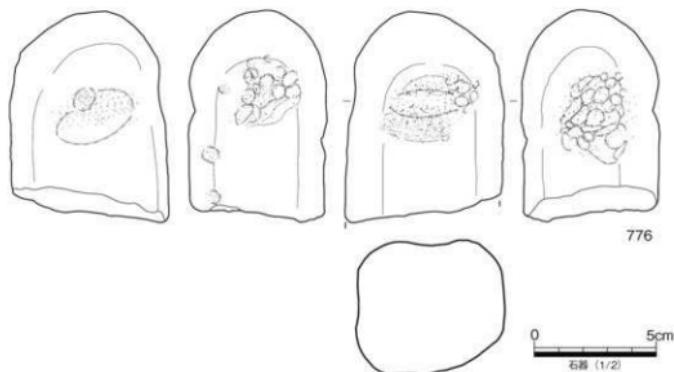
SX2003 (107図)

遺構 2区①南側で検出した不定形な落ち込みである。遺構の重複関係は、SD2004及びSD2005より古い。調査時に基盤層が渦る範囲として掘削をした。埋土は基盤層を基本的としている。遺構の性格については、竪穴建物の構築時の溝状遺構の可能性があるが、主柱穴など竪穴建物を構成する遺構は未

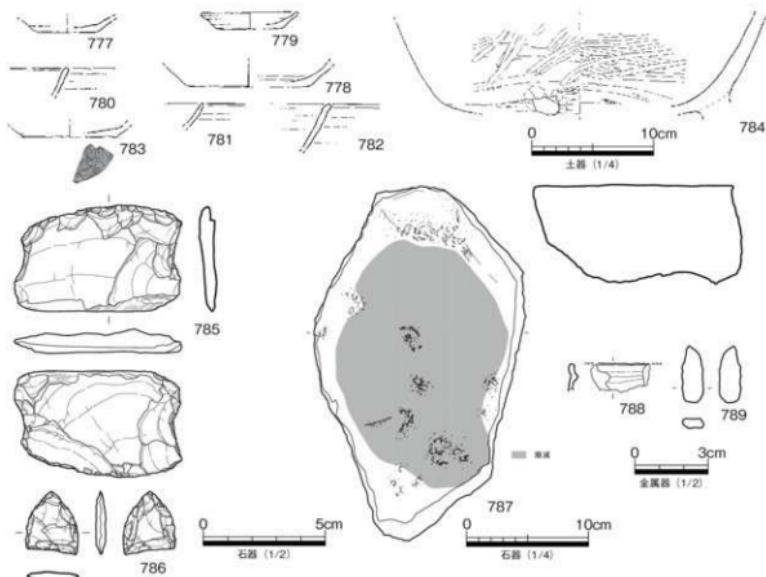
検出であり、遺構の性格は不明である。

土器 出土遺物は、高杯（709）石器（776）がある。高杯については既にSD2005で述べた通り、SD2005との接合資料で、本来はSX2003の遺物である。776の石器は叩石とみられる。中央部分に敲打痕が残る。

時期 709の高杯から、弥生時代中期後半に埋没したものと考えられる。



107図 2区① SX2003 平断面図



108図 2区①・②柱穴出土遺物実測図

c. 柱穴 (108図)

建物として復元しえなかった柱穴出土資料である。土師質土器および瓦質製品はSR2002上に展開する中世の柱穴資料で建物の時期を示す土器群である。SR2002上面は、中世の柱穴群以外の遺構はみられない。

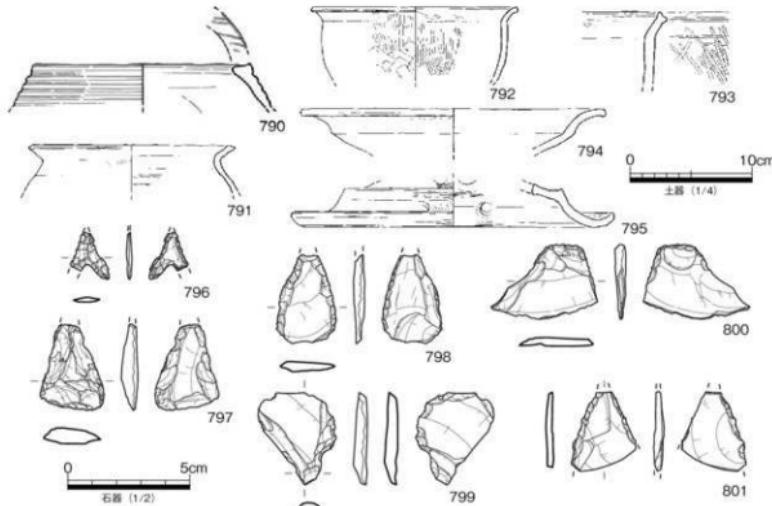
土師質土器皿(777・779・782・783)、杯(778・780・781)、瓦質脚付盤(784)、石包丁(785)、平基式石鎌(786)、台石(787)、不明鉄器(788・789)がある。777～783の土師質土器は底部ヘラ切り(777～779)と糸切り(783)が混在していることから、12世紀後半の所産とみられる。785のサスカイトは、打製石包丁で両側の短辺に抉りがある。787は砂岩製の台石である。

d. 包含層

2区包含層 (109図)

2区の調査時に遺構に伴わない土器として、取上げられたものである。特徴的な遺物を抽出している。無頸壺(790)、壺(791)、鉢(792・793)、高杯(794・795)、石鎌(796～798)、剥片(799～801)がある。

790の無頸壺は外面に凹線、端部は内面がやや突出し、端部上面に斜め沈線の文様が入る。793は古代の鍋とみられる。煤が外面に付着する。795の装飾高杯は、脚部の上下二段に円形のスカシを穿孔し、脚端部の外反が著しい。796のサスカイト製凹基式石鎌は一部欠損しているが、绳文時代の所産とみられる。



109図 2区①・②包含層出土遺物実測図

第4節 3区の調査

3区は病院敷地内の中央部に位置する3区①、病院敷地東端南寄りに位置する3区②③、3区①のやや南に位置する3区④、3区③のやや南の病院敷地東側境界線上にある3区⑤に細分して調査を実施した。

3区①は南北7.4m、東西5.3mの範囲を幅「コ」字状にトレント設定した調査区である。面積は27.6m²である。旧病院建物による擾乱が著しく、東壁際でかろうじて遺構が残存していた。検出した遺構は1回の建て替えが確認できる弥生時代の竪穴建物1基、それに先行する柱穴1基である。

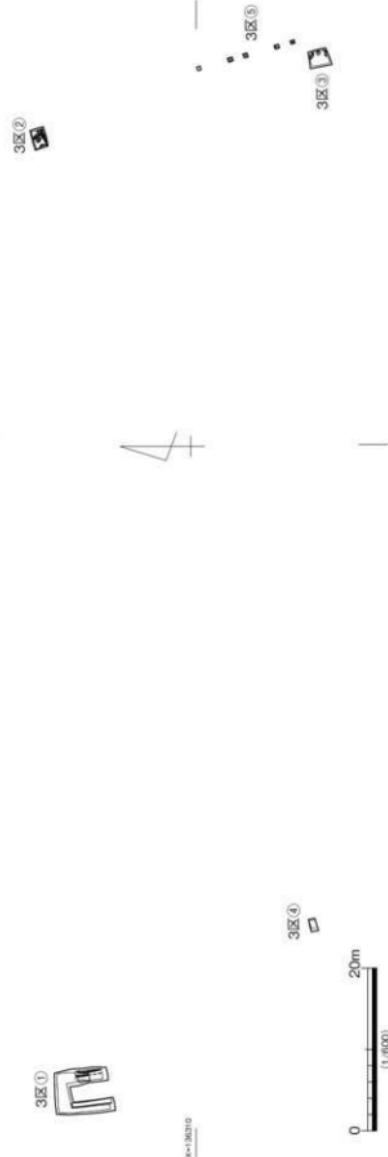
3区②は南北18m、東西2.6mの小規模な調査区である。面積は43m²である。古代須恵器を含む遺物包含層の除去後、古代の掘立柱建物1棟を検出した。さらにそれに先行する弥生時代の竪穴建物1棟を検出した。

3区③は南北2.8m、東西2.0mの小規模な調査区である。面積は5.3m²である。整地層を除去するとすぐに地盤の疊層が露出し、疊層を穿つ柱穴数基を検出したが所属時期等は不明であった。

3区④は南北1.0m、東西1.5mの小規模な調査区で、面積は1.4m²である。柱穴等の遺構を検出したが、遺構面より上に厚さ30cmの保護層が確保できることが判明したことから、遺構検出のみにとどめ、遺構掘削は実施していない。

3区⑤は60cm四方の小規模なトレントを病院用地東境界に沿って5箇所設定して調査を行った。明確な遺構は検出できなかったが、遺構面の高さが判明した。

以下、遺構調査を実施した3区①と3区②についての遺構・遺物を説明する。



a. 弥生時代から古墳時代前期

1) 壁穴建物

SH3001 (111図)

3区①東壁際で検出した南北3.2m以上、東西0.7m以上の壁穴建物である。掘方の深さは0.5mで、同じ位置で上層建物と下層建物が重複する。上層建物は厚さ0.12mの貼床を設置し西側壁沿いに幅0.2mの壁溝を設ける。貼床層を除去した後に検出した下層建物は厚さ0.07mの貼床を設置し、幅0.18mの壁溝を設ける。壁溝の溝底には長さ0.12~0.14m、幅0.05m、深さ0.03mの細長い窪みが合計5箇所残る。壁際に並べた縦板の痕跡と推定できる。上下いずれの建物もブロック混じりの灰褐色系粘質土で埋没し、西壁を基準とした主軸方向が一致することから、下層建物から上層建物へ拡張を伴う建て替えが行われたものと推定した。

上層建物出土の土器4点を図化した。802・803は甕口縁部である。口縁部が斜め上方に開延びする形態で、2は端部を上方に僅かにつまみ上げる特徴がある。いずれも弥生終末期に比定できる。804・805は後期前半土器の混在品である。下層建物は土器1点を図化した。806は底部が尖り気味の弥生終末期鉢である。

以上、SH3001は弥生時代終末期において機能し、建て替えが行われた壁穴建物と考える。

b. 古墳時代以後

1) 壁穴建物

SH3003 (112図)

3区②の南壁際で検出した壁穴建物である。古代の掘立柱建物SB3001を構成する柱穴SP3010の掘削により大部分を欠損するが、掘方の東西に弧状に巡る壁溝及び褐色系埋土を確認した。調査時に柱穴SP3010との層位関係を誤認して調査を進めてしまった。

調査区南壁断面では検出面から深さ0.1mで貼床上面に至り、深さ0.2mで掘方下面に達する。貼床層は黄色系ブロックを含む黒色系粘質土で、幅0.2m、深さ0.12mの壁溝がそれを切って開削される。壁溝は褐色系埋土だが、貼床層より上はブロック状の黄褐色系粘質土で埋没することから、廃絶に当たつて意図的に埋め戻しているものと考えられる。

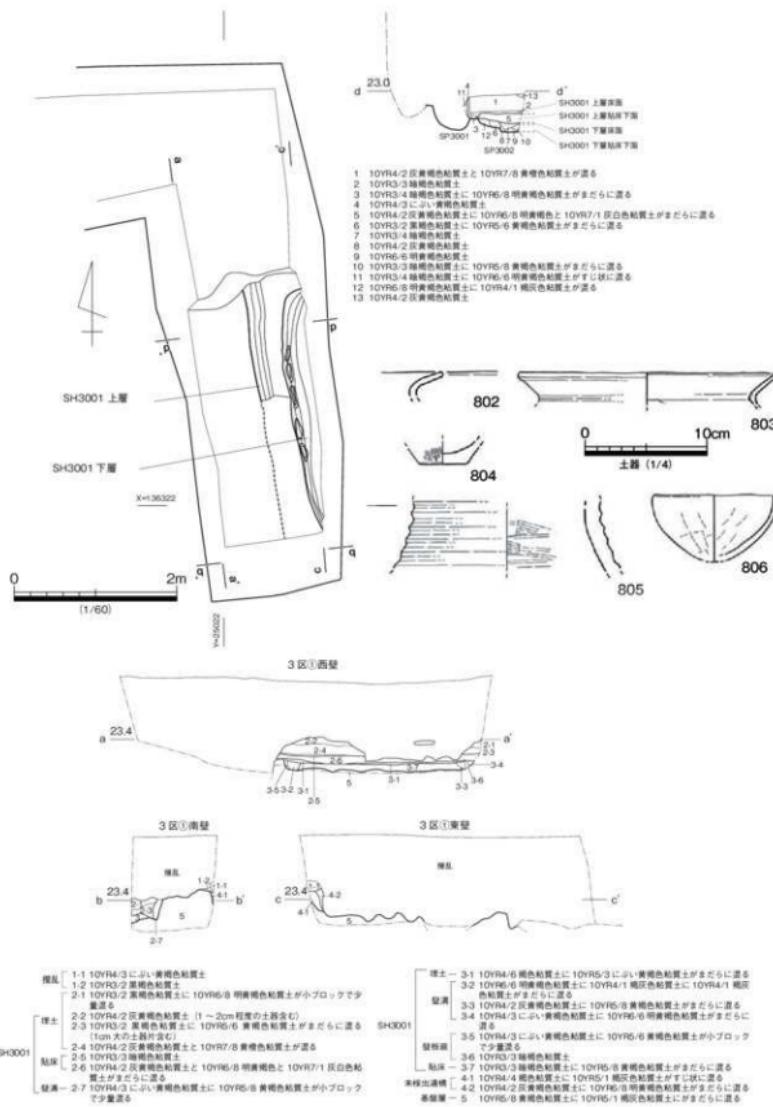
埋土中出土遺物は少量で図化できるものはなかったが、SH3003を切り込む古代以降と考えられるSP3010(SB3001)の柱穴掘方に古墳時代中期の土器が混じっており、本来はSH3003の土器群の可能性がある。以上より古墳時代中期と想定しておきたい。なおSH3002はこれに先行する壁穴建物である。

2) 掘立柱建物

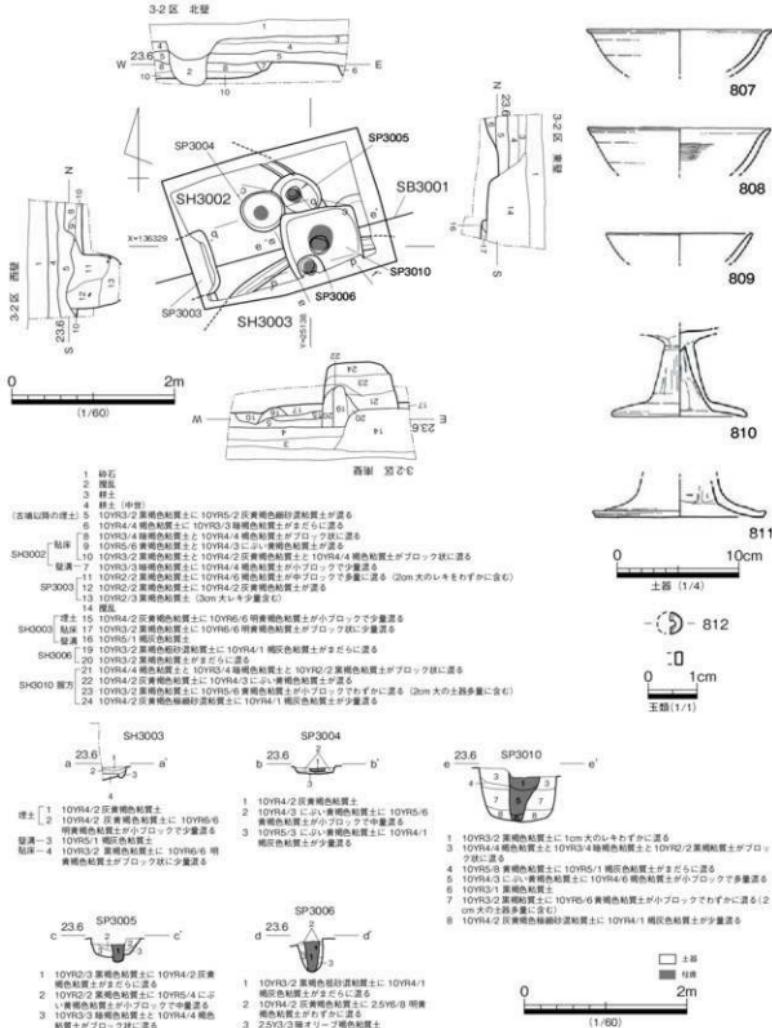
SB3001 (112図)

3区②で検出した掘立柱建物を構成する可能性が高い柱穴2基(SP3010・SP3003)からなる。建物としての柱構造等は不明だが、両柱穴とも一辺約1mの平面方形を呈して主軸を揃え、柱痕径も大きいことから、同じ建物を構成する柱穴と判断し、建物遺構としてここで報告する。

SP3003は柱痕が調査区外にあるため正確性を欠くが、両柱穴をつなぐラインは北から約30度西偏する。それぞれ深さは約1mで柱痕の太さは0.28mを測る。掘方及び柱痕(抜取り)から古墳時代の土師器等の土器が出土した。



111 図 3区① SH3001 平断面図・出土物実測図



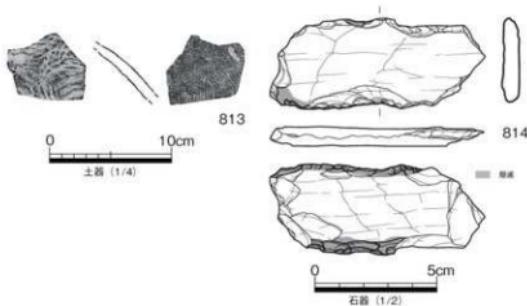
112 図 3区② SH3003・SB3001 平断面図・出土遺物実測図

807～809は土師器の高杯部である。緩やかに内湾しながら口縁部が立ち上がり、端部を短く外に折り曲げる形態である。810・811は高杯脚部片である。裾は脚柱から屈曲して大きく開く形態で屈曲部内面に強い稜線がめぐる。古墳時代中期に特徴的な形態である。812は滑石製白玉である。

以上の出土遺物は古墳時代中期に所属するが、大半がSH3003からの混入と判断し、方形の掘方や建物の主軸より古代以降の掘立柱建物と考える。

c. 3区包含層（113図）

813は3区①出土の須恵器壺洞部片である。内面に青海波文が残る。SH3002の貼床層除去中に出土したものだが、それと切り合う柱穴SP3004またはSP3005に本来含まれるものと考えられる。814は3区②出土の結晶片岩製打製石包丁である。赤味の強いわゆる赤簾片岩で、刃部の一部に使用によるとみられる磨減痕が残る。

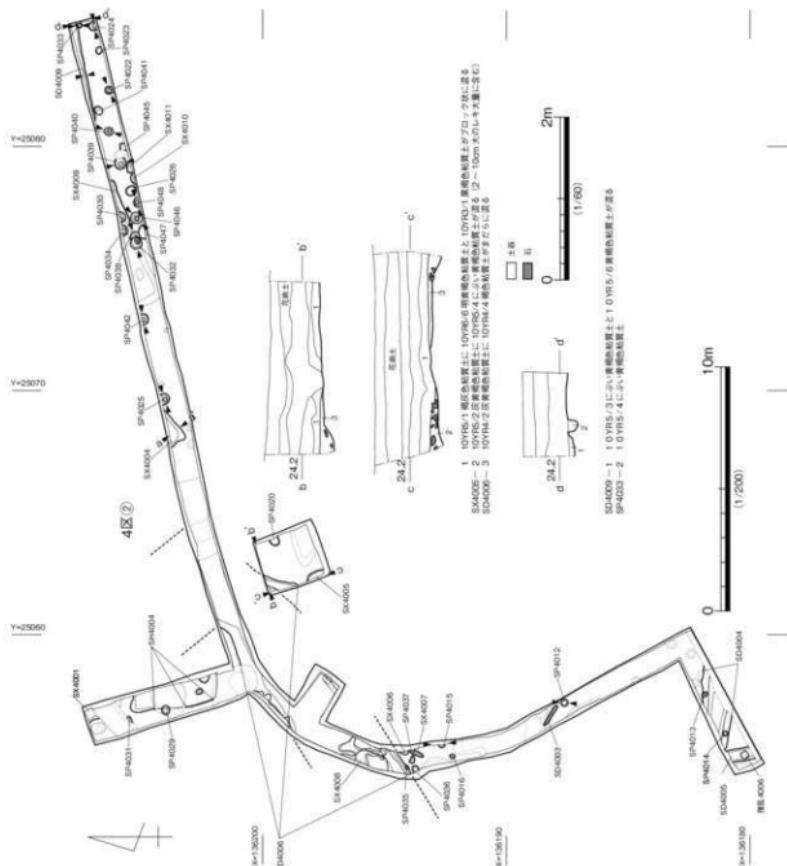


113図 3区包含層出土遺物実測図

第5節 4区の調査

外構工事に合わせて調査区を設定した。そのため調査区名が細分化され煩雑になったことから調査区を統合している。調査時と報告時の調査区名対応関係については4図及び表2を参照していただきたい。

調査区のはばすべてにおいて基盤層IV層の黄褐色シルトが広がり、また基盤層V層が4区①中央に一部露出している。基盤層は東が高く西が低い状況であった。しかしながら、4区②で検出したSR4001の底面（周囲の基盤層を基本とすると深さ約1.5m、標高22.7m）においても基盤層IV層のシルト層が観察でき、底面から30cm程掘削すると粗砂層に到達する。4区②周辺で基盤層V層が大きく窪み、基盤層IV層が厚く堆積するようである。



114 図 4区①全体図

a. 弥生時代から古墳時代前期

1) 壁穴建物

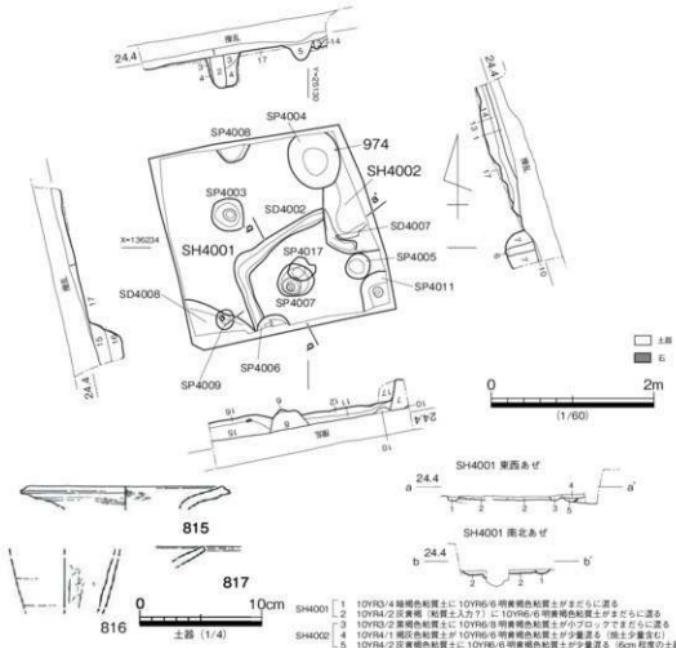
SH4001 (115図)

遺構 4区④で検出した平面プラン方形と考えられる壁穴建物である。壁溝が南側と東側の一部に残存し、貼床状の溝りを確認したことから壁穴建物と判断した。著しい攪乱を受け遺構の残存度は極めて低く、また狭小な調査区であったことから、壁穴建物全体の四分の一程度を検出しているにとどまっている。そのため全体の規模や主柱穴の有無は不明である。遺構の重複関係はSH4002に先行する。

土器 出土した遺物は、広口壺(815)、細頸壺(816)、甕(817)がある。815、816どちらも香東川下流域産の胎土に似るが雲母が目立つ。815の広口壺は、内湾気味に開く口縁部に、ハケ目調整後にやや強い横ナサを施す。816の細頸壺は、頸部の接合部分に近い部分の破片で、口縁部上半は残存しない。内面は絞り目とタテ方向のナデ調整が施される。

時期 出土遺物が小片だけで判断材料に乏しいが、815の広口壺口縁部と、816の甕口縁部の特徴から古墳時代前期前半相には廃絶したものと考えたい。

8	10YR3/4 錆褐色粘土質土に 1cm ~ 5cm 程度で溝る	SP4008	9	10YR4/2 黄褐色粘土質土に 10YR7/8 黄褐色粘土質土が小ブロックで少量混る
2	10YR4/2 黄褐色粘土質土に 1cm 程度で溝る	SP4008	10	10YR5/2 反張褐色粘土質土
3	10YR4/1 褐色粘土質土に 10YR6/6 明褐色粘土質土がまだらに混る	SP4008	11	10YR5/2 反張褐色粘土質土
4	10YR4/1 褐色粘土質土に 10YR6/6 明褐色粘土質土がまだらに混る	SP4008	12	10YR7/8 黄褐色粘土質土
5	10YR4/1 褐色粘土質土に 10YR7/8 黄褐色粘土質土がまだらに混る	SP4008	13	10YR7/8 黄褐色粘土質土
6	10YR5/2 反張褐色粘土質土に 10YR7/8 黄褐色粘土質土がまだらに混る	SP4008	14	10YR4/3 黄褐色粘土質土に 10YR6/6 明褐色粘土質土が少量まだらに混る
7	10YR7/8 黄褐色粘土質土に 10YR7/2 反張褐色粘土質土がまだらに混る	SP4008	15	10YR7/3 黄褐色粘土質土に 10YR6/6 明褐色粘土質土が少量まだらに混る
	5mm 程度土質土片含む	SP4008	16	10YR2/2 黄褐色粘土質土に 10YR6/6 明褐色粘土質土が少量まだらに混る
	1cm 程度土質土片含む	SP4008	17	10YR6/2 反張褐色粘土質土に 10YR4/2 反張褐色粘土質土が少量混る



115図 4区④ SH4001 平面図・出土遺物実測図

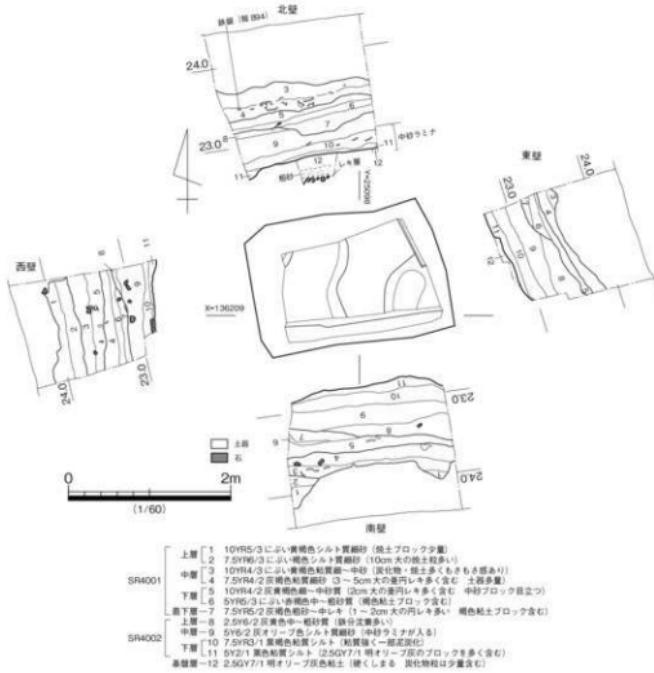
2) 溝

大溝 SR4001・SR4002

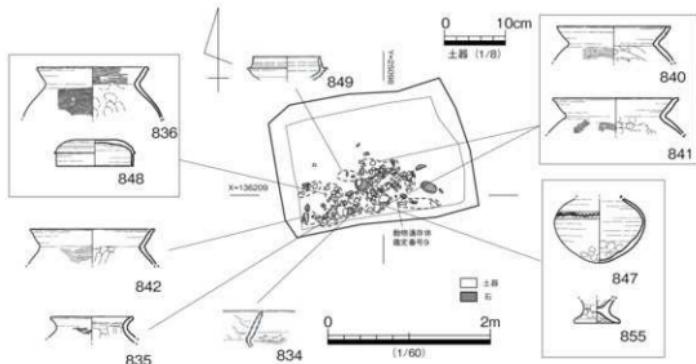
遺構 4 区③で検出した大溝である。狭小な調査区であったため、大溝の規模など不明な点が多い。大溝の深度は近接する 4 区①の基盤層の高さを基準にすると深さ約 1.5m を測る。流下方向は①大溝底面の南と西がやや高く北と東が低い形態を呈していること、②SR4001・SR4002 の土器の平面部分が南北から北東方向へと帶状に出土することの 2 点から、調査箇所は大溝の中軸線よりやや南肩寄り、流下方向は南北から北東方向と考えられる。21 図で復元した微地形より、SR4001・SR4002 は中央微高地に位置し、また流下方向とみられる北東方向は中央微高地の中央部分となる。以上より、微地形を無視して開削された人為的な大溝と考えておきたい。

この大溝は埋土および遺物の時期より 2 時期に大別し、上層を SR4001、下層を SR4002 とした。また各層を 3 層に細別し、それぞれの層で遺物の取上げを行った。下層の SR4002 は弥生時代中期後半新相から後期後半、SR4001 は弥生終末期新相から古墳後期初頭に位置づけられる。

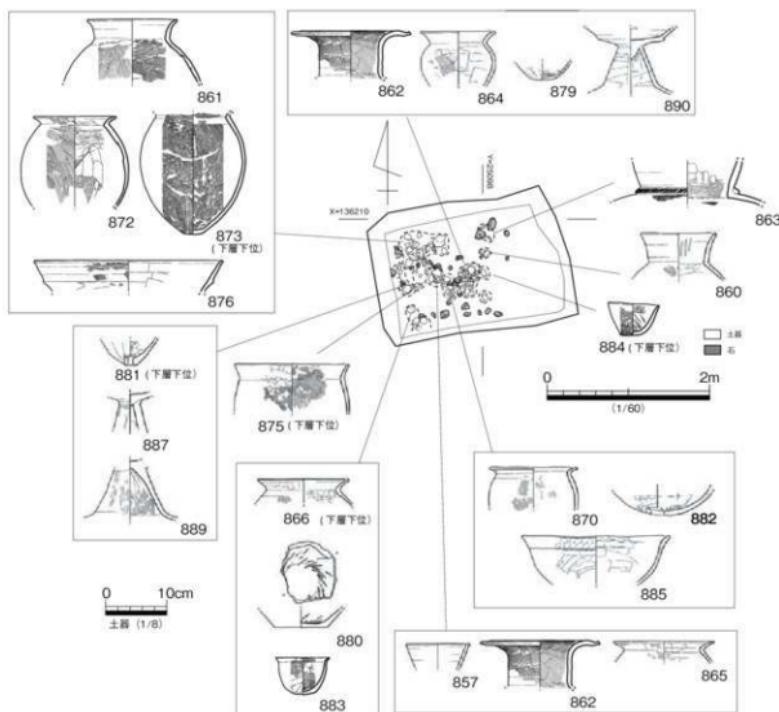
SR4002 は 3 層に細別され、中層と下層の埋土に変化はほとんどみられず、著しい流水の痕跡もみられないことから、緩やかな流れの中で堆積したものと考えられる。上層では鉄分の沈着が目立ち、灌水している状態が長く続いているものと考えられる。



116 図 4 区③平面図



117図 4区③ SR4001 中層遺物出土状況図



118図 4区③ SR4001 下層遺物出土状況図

下層のSR4001も3層に大別される。下層はSR4001の上層の崩壊土に5cm大のレキが混じる。中層は黒褐色の粘質土を主体としており、水流が減った状態とみられる。中層および中層下位には多量の土器、石材、鍛冶関連遺物、滑石製品、獸骨、魚骨を、採取した土壤の水洗より確認した。生活残滓が多いことから廃棄場所として一部利用されていたのだろう。上層埋土は中層と同様に低地化した状態とみられるが、生活残滓の痕跡はほとんど確認できず遺物量も多くはない。

注目されるのは、大溝が機能していた時期である。SR4001とSR4002が同一遺構であるかは判断を保留しなければならないが、弥生中期後半から終末期、古墳前期後半から古墳時代後期にわたり、長期間開放状態にあったことが考えられる。本遺跡内では時期幅や出土遺物が類似する大溝は本報告のSR1003が該当する以外は、報告されていない。また、ほぼ同時期に機能していた大溝として、旧練兵場遺跡より北に約400mに位置する善通寺西遺跡の溝群があげられる。報告では、4条の大溝が重複関係をもちながら、南東から北西へと流下していたとされる。これらの大溝は、灌漑用水路として機能していたと考えられ、位置する場所はそれぞれ離れているものの、その開削時期や廃絶時期、包含される特徴的な遺物に共通する点がある。

SR4001 上層（119図）

出土土器は壺（818）、甕（819・820）、瓶（821）、鉢（822・823）須恵器壺（824・825）、蓋（826）、蓋杯（827～830）がある。遺物の時期は須恵器蓋杯の所属時期は古墳時代中期末から後期初頭の時期が中心である。

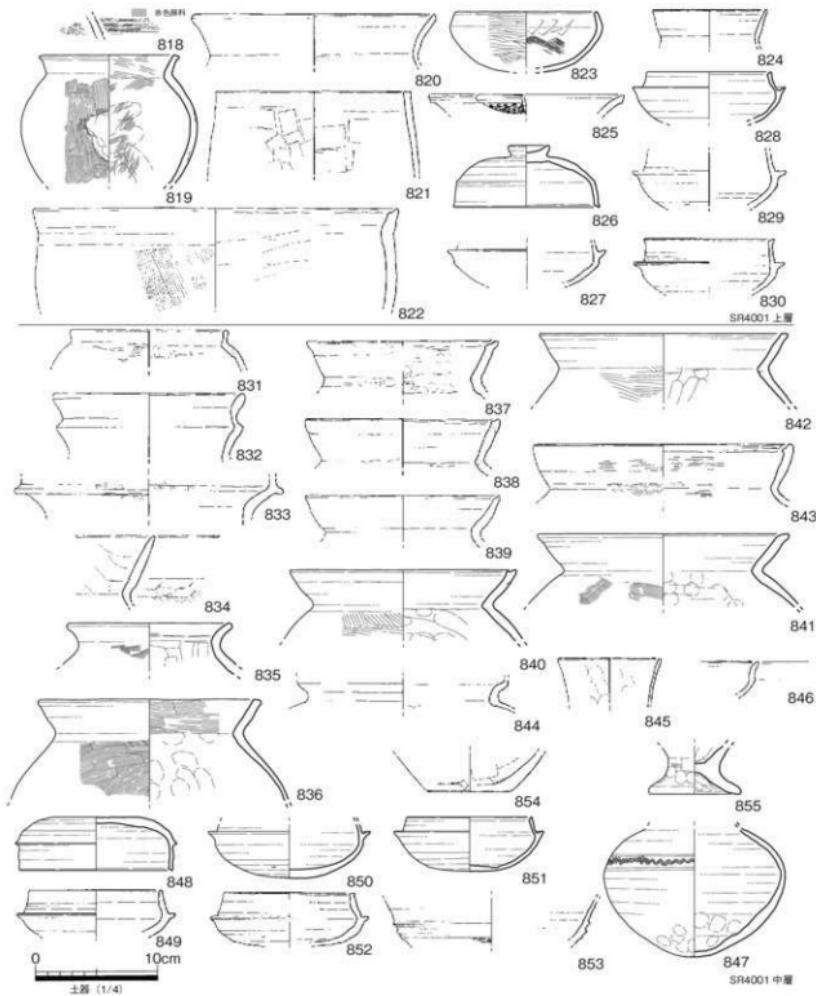
818の壺は、備前系弥生土器壺の胴部片である。小片で磨滅著しいが、外面に施された櫛描の凹みに赤色顔料が残存している。分析の結果、ベンガラであると判明した。

820の土師器甕は、口縁部が大きく上方に立ち上がる。823の鉢は、外面にヘラミガキが多用され、口縁端部はナデによって平滑にされる。蓋杯（827～830）は底部が丸みのあるものがほとんどで、受け部は水平気味に大きく張り出す。立ち上がり端部上面は、強い回転ナデによって四字状を呈し、口径は12.8cm前後におさまる。826の蓋は、つまみは凹字状を呈し、中位には沈線状の窪みがまわる。以上の諸特徴からTK47型式期に相当すると考えられる。

SR4001 中層（119図）

出土遺物は壺（831）、二重口縁壺（832・833）、甕（835～844）、製塙土器（845）、鉢（846）須恵器壺（847）、蓋（848）、杯（849～852）、無蓋高杯（853）、底部（854）、台付鉢（855）鉄艇（894）、滑石製品がある。遺物の時期は古墳時代中期後葉とみられる。

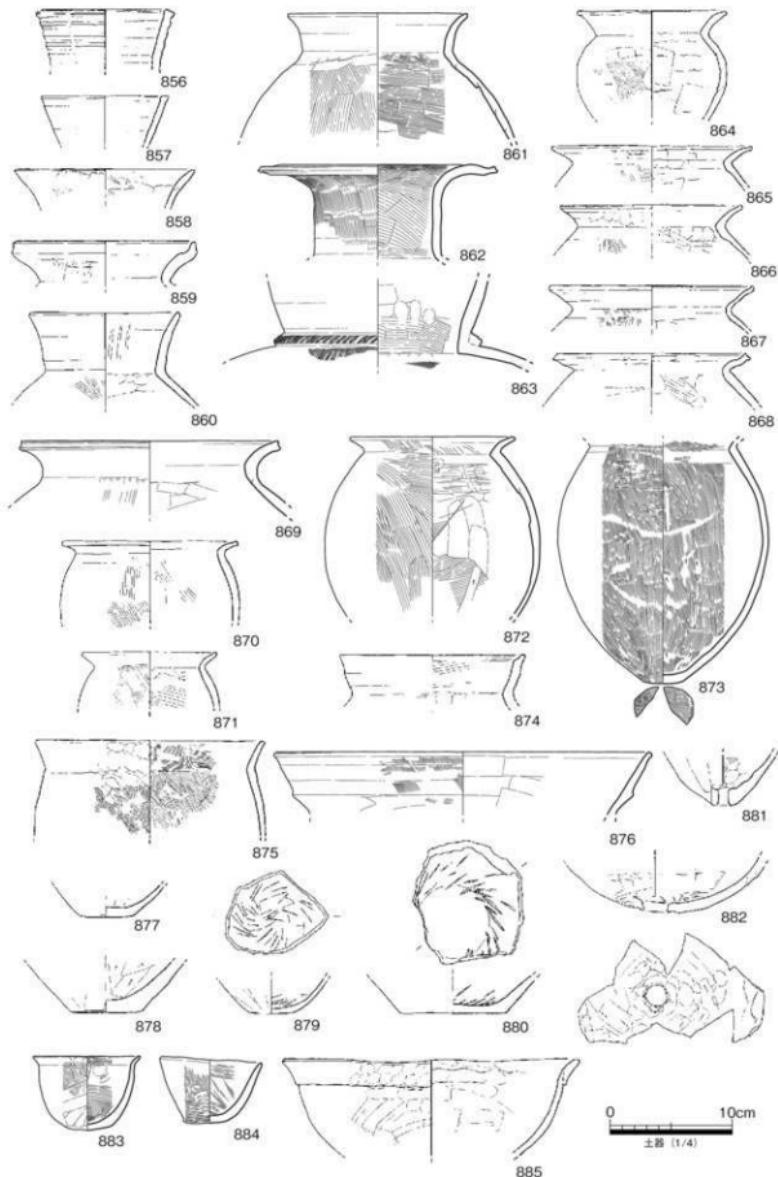
832の二重口縁壺は、口縁16cmを測り、短く連続して外反する口縁部をもつ。土師器甕（836～841）はSR1003中層出土資料の口径（14cm～16.8cm）に比べ口径（16.4cm～21.2cm）と口径のまとまりがやや大きい。口縁部の立ち上がりは斜め上方に内湾して端部にいたり、端部上面は強い横ナデによって内面に突出するもの、口縁部が横ナデによってゆるい凹凸が連続し、端部上面は強い横ナデによって内外面につまみ出されるものがある。845の製塙土器は、小型の椀型タイプとみられる。器壁は薄い。備讃V式に相当すると考えられる。847のハソウは、胴部や上位に最大径をもち、沈線で挟まれた部分に波状文を施す。848の須恵器杯蓋は口縁部と天井部の境に鋭い棱線がめぐり、天井はやや丸みをもつ。蓋杯は、底を丸くおさめる（850・851）と立ち上がり端部を面取りし、底面を比較的の平らにおさめ



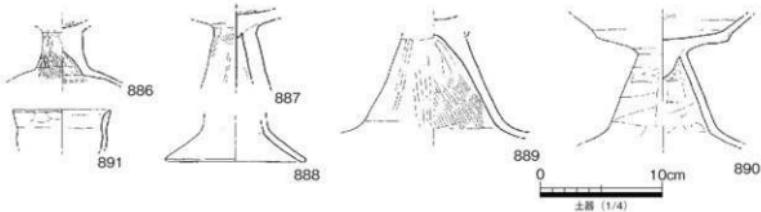
119図 4区③ SR4001 上層・中層出土遺物実測図

る(849・852)がある。概ねTK208型式期～TK23型式期に相当する。853の無蓋高杯は、口縁端部は残存していないが、口縁部は大きく開き、下位に波状文を施す。

894の鉄鋌は、端部は両方とも撥状に広がり、長さ18.4cm、幅2.7cm、端部幅3.88cmを測る。



120図 4区③SR4001下層出土遺物実測図(1)



121図 4区③SR4001下層出土遺物実測図(2)

SR4001下層(120・121図)

出土遺物は長頸壺(856)、広口壺(857～863)、壺(864～875)、底部(877～880)、瓶(881・882)、鉢(883～885)、高杯(886～890)、ミニチュアの壺(891)、サスカイト製平基式石鏃(892)鉄製品(893)がある。土器の時期は古墳時代前期が中心で、下位層の弥生土器の混入がわずかにみられる。

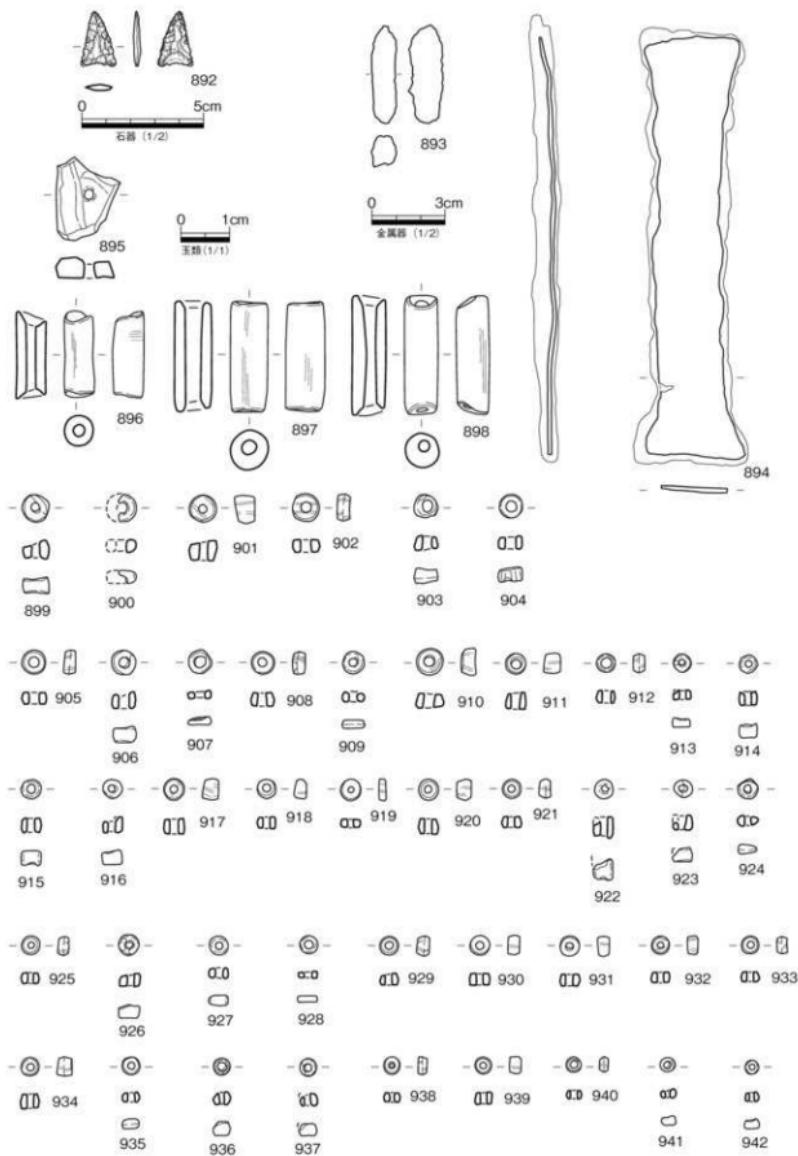
856の長頸壺は、頸部に凹線文を施し端部は外側に突出する。861の広口壺は、上方に大きく立ち上がり、頸部からゆるく外反する。862の広口壺は、垂直にのびる頸部に、口縁部は水平方向に外反し、中位で一部反転して内湾する。867の壺は、頸部の屈曲は弱く、やや開延びした口縁部を有し端部は上方につまみ上げる。876の壺は、口縁部外面中位に段を有し、端部は強い横ナデが施される。口縁部の形状がよく似る大型鉢の可能性も考えられる。883・884は小型の鉢で、883は端部を外側につまみだし、889はタキ目の痕跡が残る。885の鉢は、口縁部を一端作り上げたのちに、端部外面に幅2cm程度、厚さ5mmほどの粘土帯を貼付け、口縁部としている。口縁部の粘土帯貼りつけは土佐に多くみられる技法で、また胎土や色調が旧練兵場遺跡で通常みられるものと異なることから、搬入品とみられる。889・890の大型高杯は、大きく下方に広がる脚部を有し、裾は屈曲点を境にさらに大きく広がる。891のミニチュアの鉢は、口縁部を外にやや開き、胴部最大径は上位にある。

滑石製品(122図)

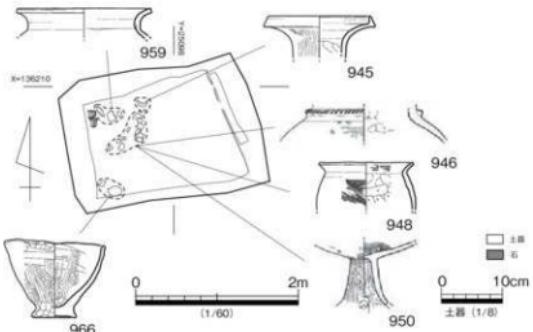
各層から多量の白玉、管玉、剣形もしくは有孔円盤の可能性があるものも出土している。碧玉製管玉の896・897と滑石製の898は、端部の穿孔形状が特徴的で、本来管玉の端部は平滑であるのが通有であるが、本資料の端部は内側の穿孔に向かって傾斜し、断面形がロート状を呈する。本遺跡内では報告資料の管玉と類似するものは管見の限りその出土はない。896・897・898の管玉が、装身具として使用した結果、端部の形状が変化したのか、意図した形態でそのような形状を造り出したのかは判断できない。端部を平滑にしない、意図した結果つくられたのであるならば、製作地が同一地の可能性があるだろう。

滑石製白玉は中位がやや突出し、算盤玉に近い形状を呈するものがほとんどで、直径が5mm前後(899～902・910)、4mm前後(903～909・911)、3mm前後(912～942)の大きさの三種類ある。中層と下層からの出土が大部分を占める。

本遺跡内では「旧練兵場遺跡Ⅲ」で報告のM区からII-3区付近に滑石製模造品が集中して出土するエリアがあり、本資料群との関係は不明ながら、注意される点である。



122 図 4 区③ SR4001 上層～下層 玉・石製品・鉄製品 遺物実測図 (3)



123 図 4 区③ SR4002 下層遺物出土状況図

SR4002 上層 (124 図)

出土遺物は広口壺 (943)、壺 (944・946)、複合口縁壺 (945)、甕 (947・948)、底部 (949)、高杯 (950・951) がある。時期は弥生時代後期後半から終末期古相がある。

943 の広口壺は細身の頸部にハケ原体による長めの列点文を施す。頸部は拡張させているが、凹線は明瞭ではない。946 は頸部に突帯を貼付け、列点文が施文される。945 の複合口縁壺は、垂直に伸びる頸部に、口縁部は水平方向に外反し、端部は内傾して立ち上がる。950・951 の高杯は脚部の傾斜変換部分にスカシを多方向に穿孔する。弥生時代中期後半に位置づけられる土器 (943) は、中層および下層からの巻き込みと考えられる。

SR4002 中層 (124 図)

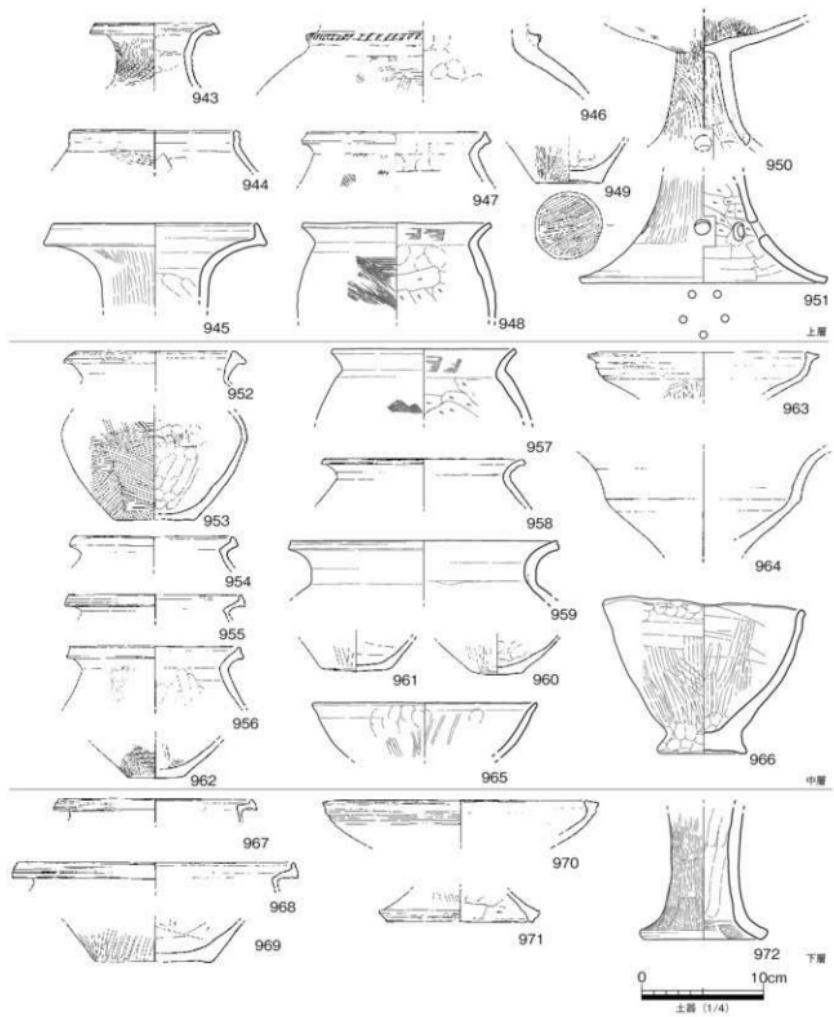
出土遺物は広口壺 (952・953)、甕 (954～959)、底部 (960～962)、高杯 (963・964)、鉢 (965)、台付鉢 (966) がある。時期は弥生時代中期後半中段階から後期前半である。

952 の広口壺は、頸部の立ち上がりは急で、端部は拡張し凹線文を施す。953 は広口壺ないしは長頸壺の胴部で、胴部の中位に最大径をもち、外面はヘラミガキが多用される。高杯 (963) は受け口状の杯部に、口縁端部を内外面に拡張させ、外面には凹線を施す。964 は高杯の杯部として復元している。杯部の下位と上位の立ち上がりの角度は急である。焼成はあまく、色調は赤褐色を呈し、胎土には石英を多く含む。甕は頸部がゆるく屈曲し、口縁端部の凹線が形酸化している (956～958)、頸部の屈曲が鋭く、「く」の字に屈曲し、端部に凹線を施す (954・955) がある。前者は弥生時代後期後半、後者は弥生時代中期後半中段階に位置づけられる。965 の鉢は、端部がやや外反する浅鉢である。966 の完形の台付鉢は、太く短い脚部がつき、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はナデ等の凹凸がや目立つ。

SR4002 下層 (124 図)

出土遺物は甕 (967・968)、底部 (969)、高杯 (970・971)、支脚 (972) がある。時期は中期後半中層である。時期や遺物の特徴に非常にまとまりがある資料群である。

967・968 の両者とも頸部で「く」の字に鋭く屈曲し、上下に拡張した口縁部は凹線文が施される。全体的に薄手である。また 970 の台付鉢も杯部の凹線があり、端部は内外面に突出する。972 の支脚は



124 図 4区③ SR4002 上層・中層・下層遺物実測図

丁寧な作りではあるが、時期的に明らかに後出することから、中層の混入と考えられる。

b. 古墳時代後期以後

1) 壁穴建物

SH4002 (115図・125図)

遺構 4区④で検出した平面プラン方形と考えられる壁穴建物である。壁溝が南側と西側の一部、そして貼床が残存していることから壁穴建物と判断した。SH4001と同様に著しい削平を受けており、遺構の残存度は極めて低い。

遺構の重複関係はSP4004・SP4005に先行し、

SH4001より後とする。狭小な調査区であったため、全体の規模や主柱穴は不明である。

土器 出土遺物した遺物は、杯(973)、玉(974)がある。973の須恵器杯は、外面に回転ヘラケズリが施される。焼成の際のひずみかやや歪んでおり、本来の直径および形状を反映していない可能性がある。974は滑石製白玉である。

時期 遺物が少なく、根拠に乏しいが壁溝から出土した973の杯の特徴から7世紀代には廃絶したものと考えておきたい。

SH4004 (126図)

遺構 4区①で検出した平面プラン方形の壁穴建物である。規模は西側の辺を基準にすると一辺3.5mに復元できる。調査時に壁溝の平面記録をとれていないが、あぜと4区①東壁で壁溝の落ち込みを確認している。全体の三分の一程度を検出しているが、主柱穴や竈の有無は不明である。遺構の重複関係はSP4027・SP4031に先行する。

土器 出土した遺物は、杯(975・796)がある。975の蓋杯は口径13cm前後に復元でき、下部にヘラケズリが施されている。立上り端部は残存していない。976の蓋杯は立ち上がりが内傾気味に立ち上がる。977は滑石製の白玉である。

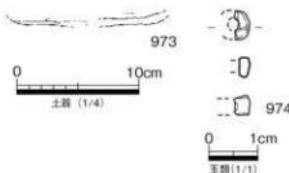
時期 975は覆土、976は貼床内から出土している。975・976の特徴からTK209型式期に相当すると考えられることから、7世紀前半には廃絶したものと考えておきたい。

SH4005 (127図)

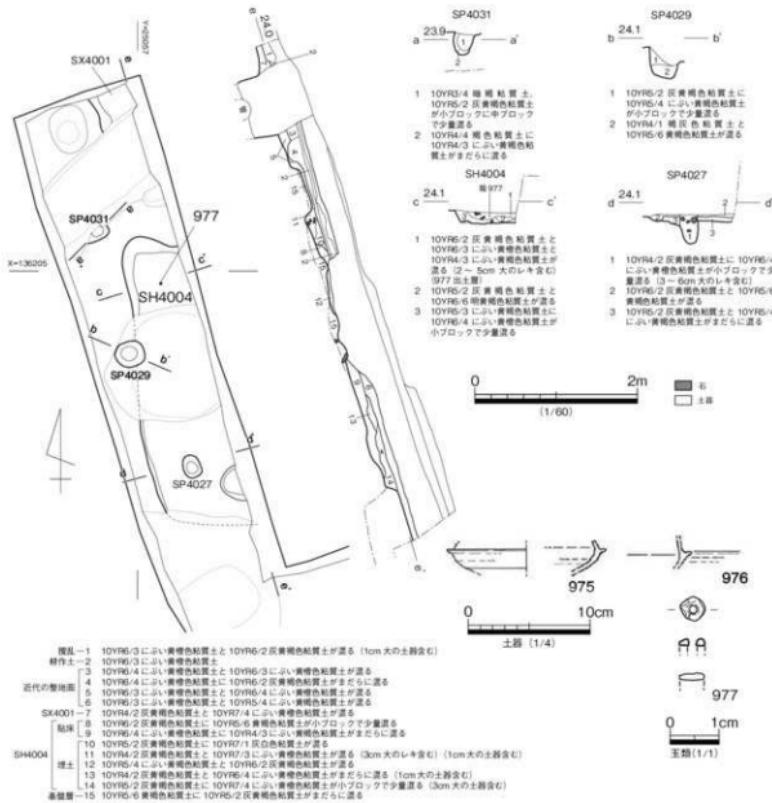
遺構 4区⑤で検出した平面プラン方形と考えられる壁穴建物である。貼床および南側と東側において壁溝を確認したことから、壁穴建物と判断した。調査区全体に著しい削平を受けており、遺構の残存度は極めて低い。遺構の重複関係はSP4043に先行する。調査区の都合上全体の四分の一程度を検出しているのみで、全体の規模・主柱穴・竈の有無は不明である。

土器 出土した遺物は978の須恵器杯のみである。口径は11cm前後になるとされる。下部は回転ヘラケズリ、上部は回転ナデが施されている。

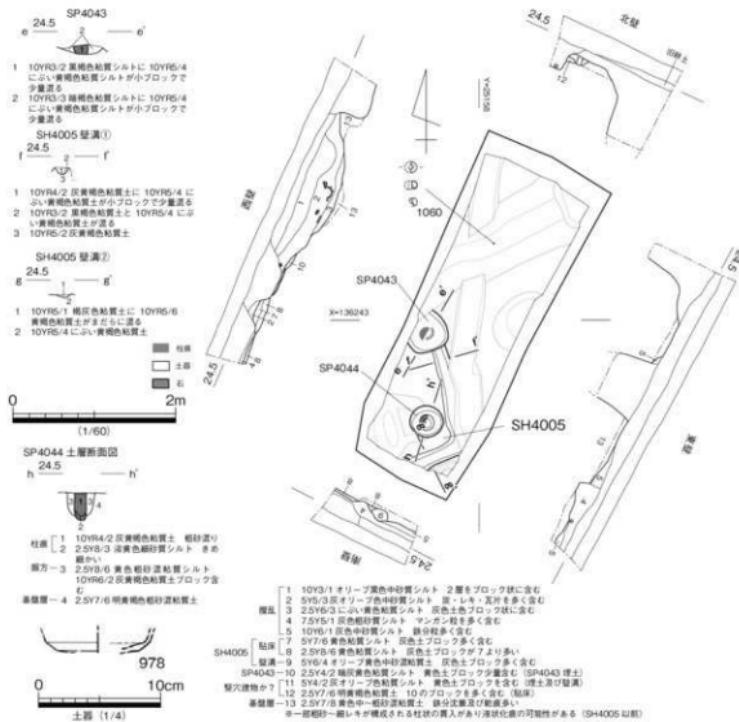
時期 壁穴建物から出土した遺物は小破片が多く、時期がある程度わかる資料は貼床内から出土した978の杯のみである。1点の須恵器杯の資料だけで詳細な時期比定は困難であるが、底部に回転ヘラケズリが施されている特徴から様相1に位置づけられる。7世紀前半に建てられたと判断しておきたい。



125図 4区④ SH4002 出土遺物実測図



126図 4区①SH4004 平断面図・出土遺物実測図



127 図 4 区⑤ SH4005 平断面図・出土遺物実測図

2) 溝

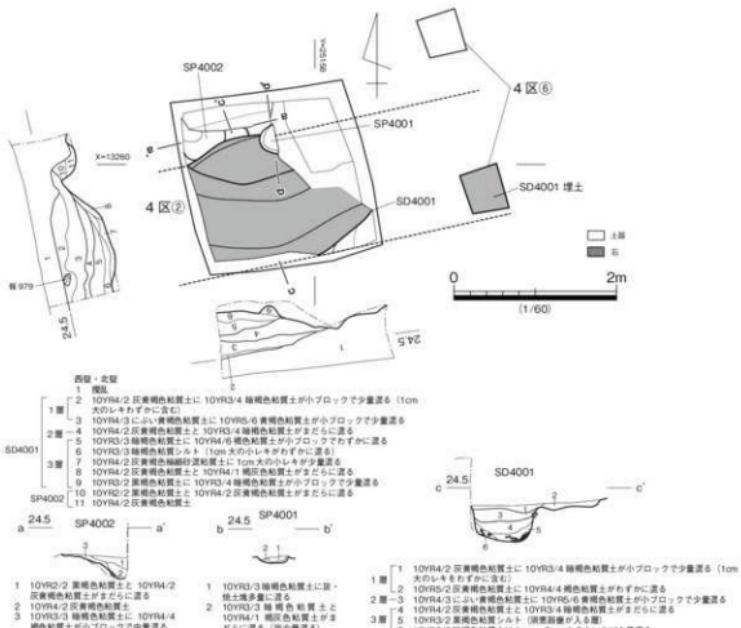
SD4001 (128 図・129 図)

遺構 4 区②で検出した東西方向に軸をとる溝である。幅 85cm、検出面からの深さ 45cm を測る。4 区②東側の 4 区⑥でも SD4001 とみられる埋土を確認していることから一定程度直進するものと考えられる。条里型地割に合致する南北溝の分布から、4 区②の近隣でその存在が予想されるが、明確な溝状の落ち込みや遺物は確認できていない。

埋土は大別 3 層に分けられ、いずれの層も顕著な流水は確認できない。3 層には基盤層由来のレキが少量含まれる。2 層はシルトから粘質土で、比較的混じりが少ない。1 層は基盤層由来の黄色シルトがブロック状に混じり、人為的な埋戻し土の可能性がある。

土器 1 層出土遺物は杯 (979～982)、鉢 (983) がある。2 層出土遺物は、瓶 (984)、蓋 (985)、杯 (986～990)、高杯 (991～992)、甕 (993)、土師器甕 (994) がある。3 層出土遺物は、土師器甕 (995)、平瓶 (996)、杯 (997)、甕 (998)、広口甕 (999)、底部 (1000) がある。

979～981 の杯は、口径 12cm 前後、底部から斜めに立ち上がり、胴部は下半三分の一から垂直気味

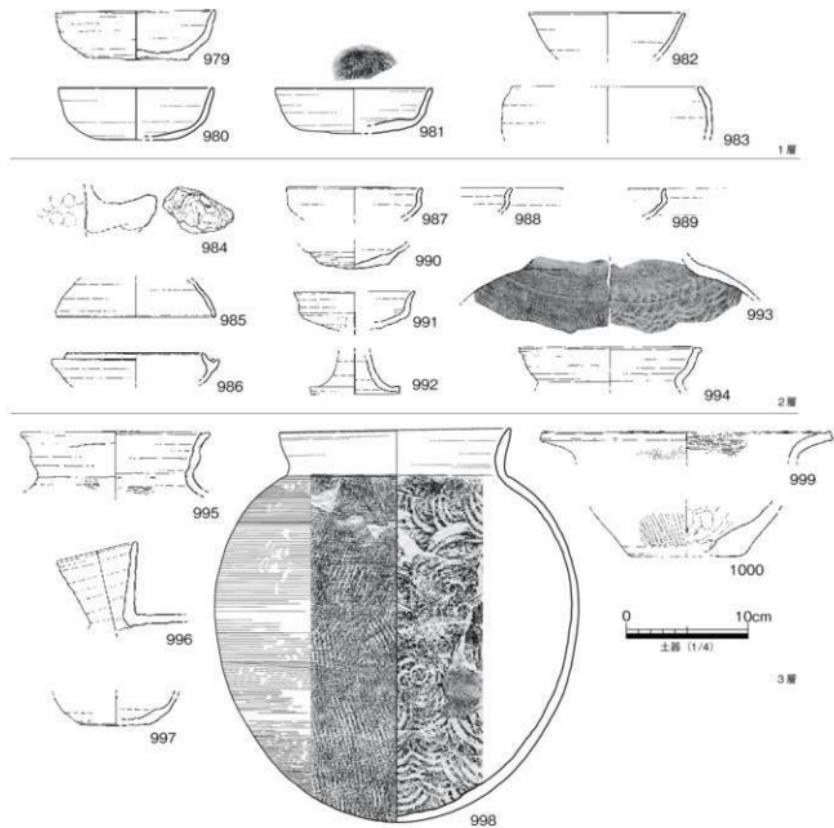


128図 4区(2) SD4001 平面図・遺物出土状況図

に立ち上がる。端部はわずかに外傾する。また底部の回転ヘラ切り後の調整は、すべて施されていない。また981の杯は内面に「Y」字状のヘラガキがある。982の須恵器杯は、やや内清気味に胴部で端部は外反する。983の須恵器鉢は、内湾気味に端部をおさめる。984の土師器瓶は、把手部分が水平方向にやや突出し、端部を上方に屈曲させる。986の杯は、口径15cmの立ち上がりは、6mm程度である。987～989は須恵器杯もしくは高杯の口縁部である。いずれも胴部下半が斜め上方に立ち上がり、端部を垂直気味に立ち上げたのち、外反する。990の須恵器杯底部は、ヘラ切り後の調整は施されていない。991の高杯杯部は987・989と同様な形態を呈しているが、器壁はやや厚い。992は脚部で、脚端部を下方に屈曲させる。994・995の土師器甕は、頸部から斜め上方に外傾したのち中位から角度を変え口縁部まで至る。口縁部はどちらも水平方向にややつまみだされる。997の杯底部は、ヘラ切り後の調整は施されていない。998は須恵器甕である。胴部や上位に最大径をもち、口縁部は頸部から垂直気味にとりつく。胎土は粗く、砂粒の石英が目立つ。

時期 999・1000は弥生時代、994・995は古墳時代前中期などの遺物が出土しているが、これらは埋没時の混入と考えられる。982については最上層資料であり、10世紀の遺物とみられ、最終埋没の時期を示すものと考えられる。

混入遺物を排除し1～3層を概観すると、各層に様相2(信里2002)の遺物が入っており、各層の顕著な時期差は認められない。また断面の観察では溝の改修は行われていないと判断されることから、様相2には埋没し、10世紀代まで窪地として残存していたものと考えられる。



129図 4区②SD4001出土遺物実測図

SD4008 (130図)

遺構 4区④で検出した遺構である。断面形状がほぼ垂直に立ち上がり、底面も水平であることや、壁断面の2層が基盤層由来の黄色シルトをブロック状に含み、貼床の可能性が考えられ、堅穴建物の縁辺部を検出している可能性がある。しかしながら、平面および断面でも壁溝を検出できておらず、溝ないしは堅穴建物であるかの遺構の性格については、周辺の今後の調査を待ち、判断したい。現状では溝として報告しておく。

時期 時期については弥生土器の細片が含まれるだけであるが、周囲の状況を加味し、古墳時代に位置づけておきたい。

SD4006 (130図・131図)

遺構 4区①で検出した中世の条里型地割に合致する道状遺構である。幅3.4m前後、溝底面までの深度は30cm程度である。溝底は平坦に掘削されている。検出範囲は東西に約11mの直線部分と、北へと屈曲する部分である。東側への延伸は確認できない。

埋土は大別3層ある。3層は20cm～30cmのレキが敷き並べられ、細かい粗砂が隙間に充填されている。2層は粗砂層で細かい土器片が混じる。また2層は3層上面の全面には広がらず溝幅の中央に集中してみられる。1層は黒褐色の粘質土層で、下位から上位まで土質や色調に変化はみとめられない。各層とも遺物は出土するものの細片が多く、推測を多分に含むが、2層3層の土器片は故意に碎片化させている可能性がある。

本遺構の立地や構造から本遺構の性格を確認しておきたい。立地は中央微高地よりやや西へ下がった緩斜面に位置し、等高線にはば直交する。溝状に確認できる部分が仮にオープンカットの道であるとすると、立地条件からは矛盾はみられない。また、埋土の説明でも述べたが、下層は20cm～30cmのレキと粗砂が充填され、中層は粗砂、上層は粘質土層であり、中層以下と上層との埋土は著しく異なる。130図で示している通り、溝の上場と平行に石材が東西南方向に列をなしている箇所が數か所みられる。

本調査区の西側で25次II区SD2001、36次で報告される溝と一連の遺構と考えられる。

土器 1層出土土器は、(1001～1024)、2層出土土器は、(1025～1035)、3層出土土器は、(1036～1046)がある。須恵器杯(1002～1004、1026～1027、1037)は高台が低く扁平で、高台の貼付けは粗い。土師質土器(1013～1016・1034・1035・1041・1043)は底部が残存するものについてはヘラ切りされ、1035を除いてヘラ切り後の調整はみられない。土師質土器碗(1017～1020)は高台が逆三角形から逆台形を呈し、高く踏ん張る。瓦器碗(1021)の高台は逆台形を呈し、焼成は硬質である。平瓦(1022・1023、1044～1046)がある。

時期 遺物の出土層位を区分して提示したが、1層から3層にかけて時期差はほとんどみられない。また全体的に古代期(8世紀末から9世紀後半)の遺物が各層の主体を占めるが、下層から上層にかけて出土した建物より、11世紀末～12世紀前半代の時期と考えられる。

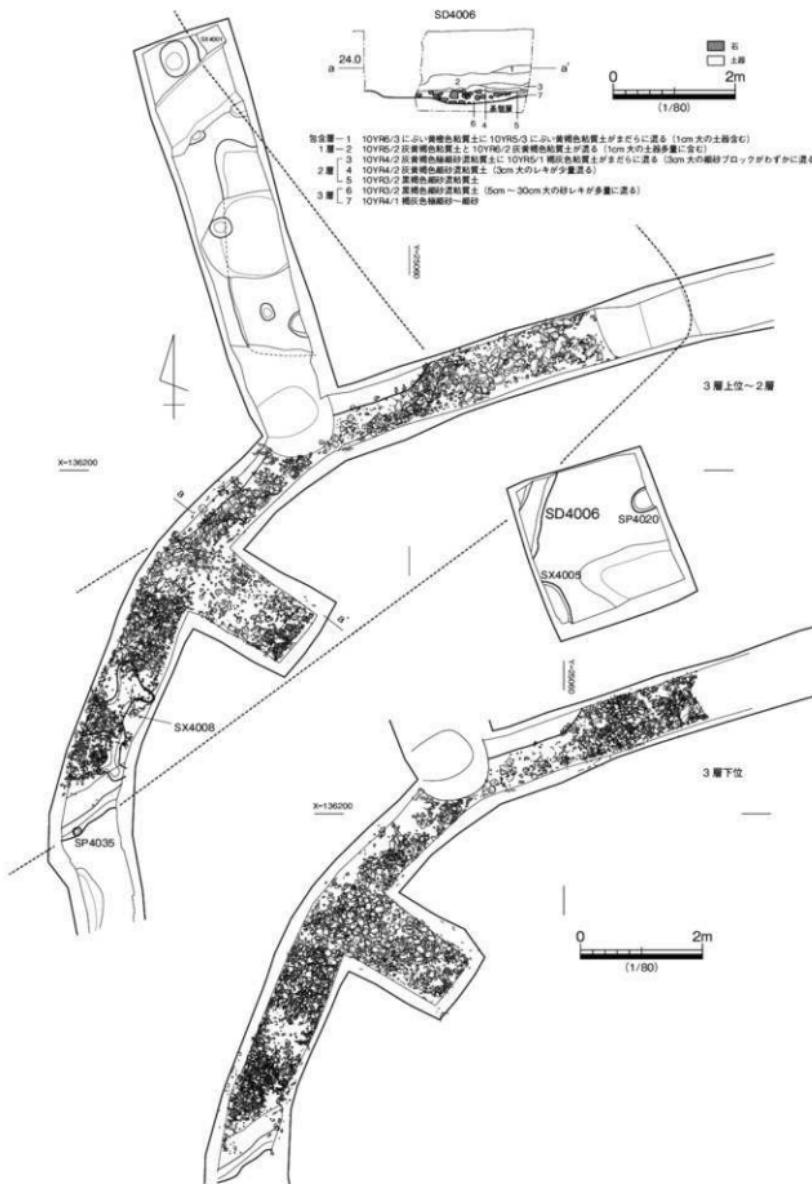
SD4009 (114図・134図)

遺構 4区①で検出した東西方向に軸を持つ溝である。溝は幅10cm以上、深さ10cmを測り浅い。周辺の条里型地割とはやや傾きが異なり、N11°Wを測る。

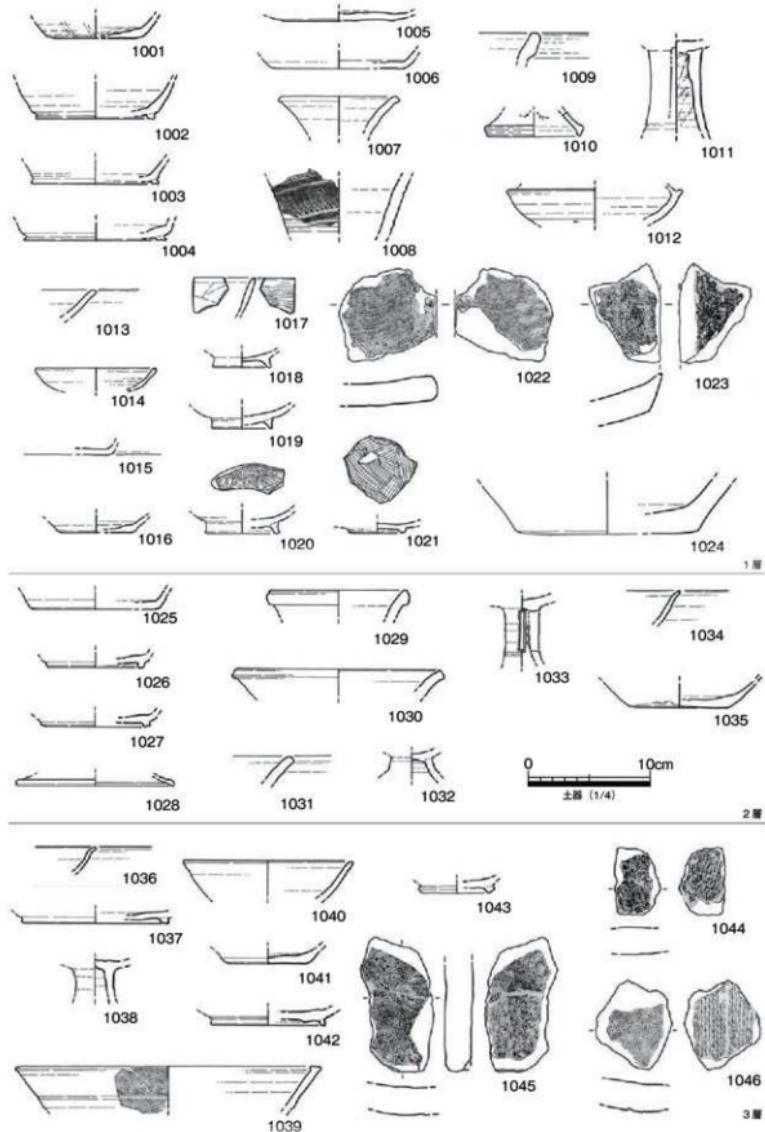
時期 遺構の時期を示す遺物は出土しておらず、周囲の条里型地割とは完全に一致しないが、溝埋土の色調や土質から中世の遺構と判断した。

SD4004 (13図・114図)

遺構 4区④南西部で検出した、ほぼ東西に軸を持つ溝である。溝の両肩に小ピット(SP4013・SP4014)を伴い、溝の両肩に横列があったものと推測される。下層は流水を示す極細砂のラミナ堆積がみられるが、上層は周囲の基盤層IV層に由来する黄色シルトのブロックが多量に混じり、一度に埋め戻されていることがわかる。練兵期に使用されていた壘塹のような凹凸を溝の底面が示さないことや、溝の両肩にある柱穴の存在から、何らかの区画施設の可能性があるだろう。



130 図 4 区① SD4006 平断面図



131図 4区① SD4006 出土遺物実測図

時期 遺構の時期を示す遺物は出土していないが、埋土の色調や土質から近代の遺構と考えられる。

SD4005 (13図・114図)

遺構 4区①南西部で検出した溝である。搅乱4006と合わせて建物基礎の布影りと考えられる。搅乱4006は方形の掘方をもち、底面には人頭台の亜円レキが設置され、沈下防止のための礎盤石と考えられる。また近接するSD4004との関係は、SD4005の建物が廃絶した後に、SD4004が開削されていることが、北壁の観察からわかる。本次調査でも2区②でSD1013として、近代の布影り遺構を確認しており、近代の建物基礎である布影り遺構は遺跡内の各所で確認されている。本遺構も近代の建物に伴う基礎の一つとみられる。

3) その他

SX4004 (114図・132図)

遺構 4区①東側で検出した不定形土坑である。平面形はややいびつな方形を呈し、深さは10cmほどである。微高地にありながら、浅い落ち込みとして埋土が確認できることから、遺構と判断した。

遺物 出土遺物は1047の高杯と、1048の壺がある。1047の弥生土器高杯は、脚端部の上方をつまみ上げている。1048の須恵器壺は、内外面の調整から胴部中位の破片とみられる。

時期 遺物からは古墳時代後期以後の遺構と判断できるが、埋土の特徴が中世の遺構に類似しており、現段階では中世の遺構と判断しておきたい。

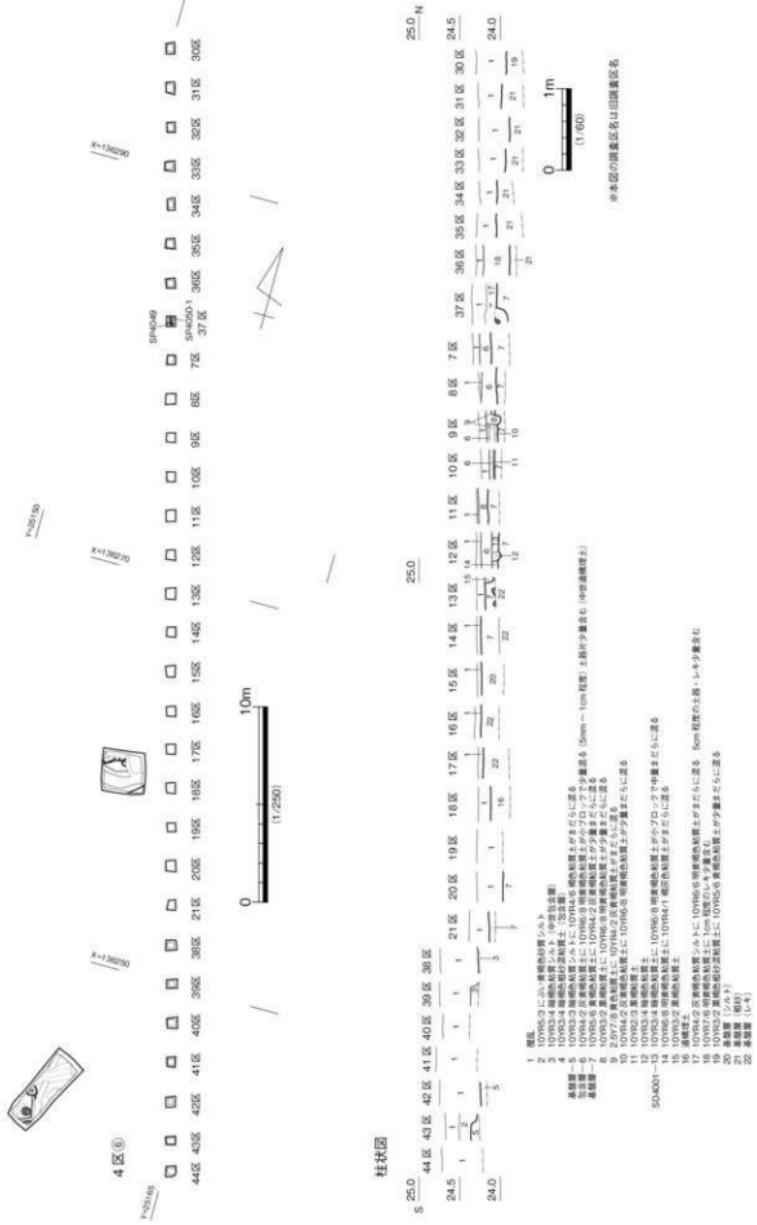
4区⑤ (133図)

フェンス基礎工事に伴い調査を実施した。調査個所は中央微高地の南北方向に連なる、一辺50cmの基礎列であったことから断面観察のみ実施した。一部には包含層や遺構が残存していたが、ほとんどの箇所では著しい削平を受けており、30cmほどの搅乱を除去すると直下に基盤層が露出する箇所がほとんどである。また4区②の東側の調査区では、SD4001の埋土と似る土層を確認しており、SD4001の東への延伸を確認している。

南側三分の二ほどが基盤層Ⅳ層の黄褐色シルトが主体となり、3区④あたりから基盤層V層のレキ層が搅乱直下で検出されるようになる。中央微高地の起伏を反映するように、南から北へ基盤層が著しく下降し、それに伴い北へ行くほど、遺構や包含層が残存するようである。



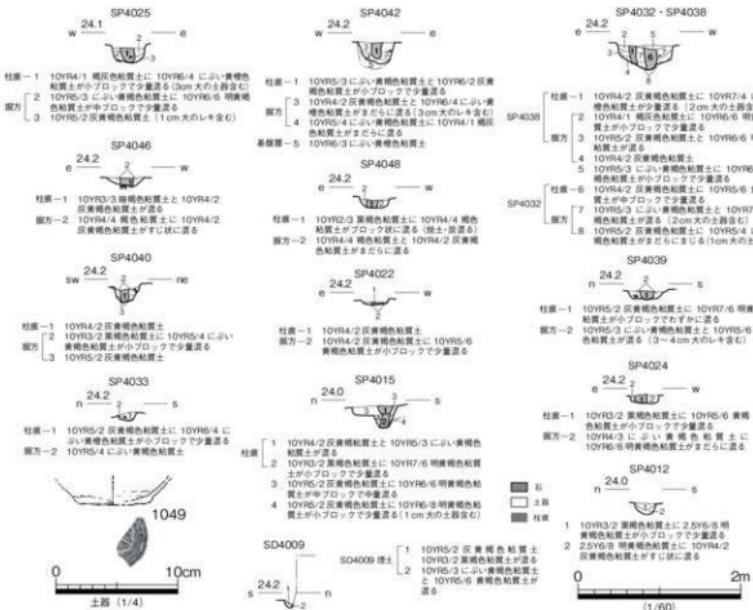
132図 4区① SX4004 平断面図



c. 柱穴
4区柱穴(134図)

4区①東側で検出した柱穴および溝である。狭小な調査区であったことから、掘立柱建物の柱穴もしくは、堅穴建物の主柱穴の可能性のある柱穴の可能性があったが、復元しえなかつた柱穴群である。古代から中世の包含層は4区①では確認できおらず、柱穴群の上位がほとんど削平されており、遺構の深度は浅い。しかし、今後周辺の調査で、組み合う遺構が調査される可能性や、また中央微高地の遺構の情報が少ないとから、断面図を掲載し、少しでも遺構の情報を提示しておきたい。遺物については、SP4020以外の出土遺物は、図化しない細片でありまた遺物の時期を示す遺物を抽出できなかつたことから、遺物の報告は行わない。

SP4020は4区①中央で検出した遺構である。出土した土師質土器杯(1049)は、底部は台状を呈し、調整は底部ヘラ切り後に板ナデされている。時期についてはその特徴から13世紀前半の所産と考えられる。



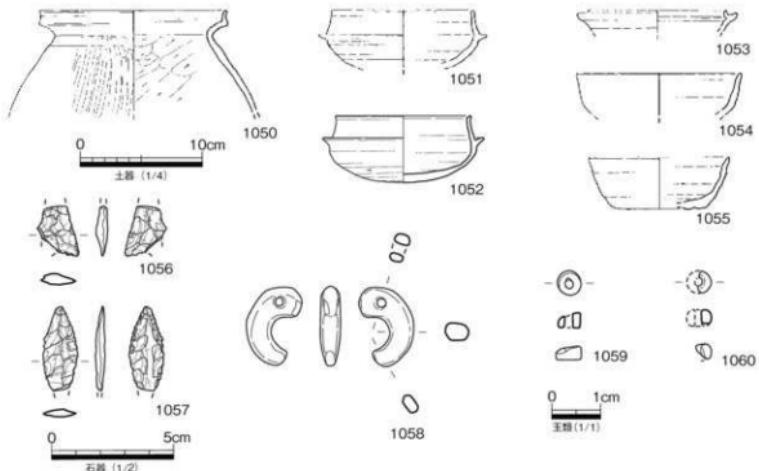
134図 4区柱穴断面図・出土遺物実測図

d. 包含層

4区包含層（135図）

遺構検出時等で出土した資料で、特に1051・1052の杯は、SR4001を検出する際の重機掘削時に出土したもので、本来はSR4001の上層資料と考えられる。甕（1050）、須恵器蓋杯（1051～1053）、須恵器杯（1054・1055）、石鏡（1056・1057）、勾玉（1058）、滑石製白玉（1059・1060）がある。

1051・1052の蓋杯は底部が丸くおさめられ、受け部は水平方向に大きくつまみ出されている。1052の立ち上がり端部は段を有し、外側につまみ出される。両者とも口径は12.5cmを測る。TK47型式期と考えられる。1055は4区②の出土遺物である。SD4001検出時に出土したもので、SD4001の最上層資料の可能性がある。口径は12cmで、小型の杯である。8世紀後半の所産とみられる。1058は4区①西側擾乱内から出土したもので、蛇紋岩製の勾玉である。



135図 4区包含層出土遺物実測図